

# 異世界転移してゼ+カと

## 特濃

めちやハメ♡♡♡

## 上

### (初SEX編)

基本CG16枚、本編234枚、  
文章なし、効果音なしの  
差分合計423枚

ゲームの中の憧れの  
ヒロイン(処女)と  
こんなに濃厚セックス  
出来るなんて!



ドクエ8の周回クリアもこれで何回目だろうか。

マルチエンディングや縛りプレイなどで何回も楽しみ、  
何と云っても魅力的なキャラクター、特にゼシカに惚れて  
プレイする度に興奮した。

なぜまた今回ドクエ8をまたやったかというと、  
会社をクビになって暇になってしまったからだ…

両親共にもう亡くなり、親戚とも付き合いがない。  
友達とももう疎遠だ。現実の俺は不甲斐ないままだ。

もう疲れた…いつもオカズにしているゼシカのおっぱいと若い肌の感触を夢想しながら  
今日も寝ようと思うと腹が鳴った。

俺は食事を摂るため重い腰を上げ夜の街へ向かった。

安い飯を胃に入れると、道端に気になる看板を見つけた。

胡散臭い占いの館のようだったが、  
「占い」「人生相談」の他に「究極の逃避」  
とわけの分からない記述がある。

この世にたいした未練はない。  
興味半分で、俺はその店へ入る。

妖しい照明が部屋を照らす。  
そして胡散臭い老婆がそこには居た。

「何を見てほしいんですかな」

「…色々と疲れて」

「ちょっと頭を失礼」

言うと老婆は、俺の頭をむんずと掴む。

「…そうか この世界が好きなのじゃな」

老婆は目の前の水晶に手をかける。

「うむ 探り当てたぞ すぐに始めるか

その世界に飛ばしてやる」



A woman with short, curly blonde hair, wearing a purple long-sleeved dress and a pearl necklace, is seated at a table. In front of her is a glowing, spherical orb resting on a small, metallic stand. The orb emits a bright, warm light. The background is a blurred interior setting with warm, golden lighting, suggesting a restaurant or a lounge. The overall atmosphere is mysterious and ethereal.

「その世界？」

「パラレルワールドじゃ  
多元宇宙論は知っているか」

「え…これって占いですよ？  
そんな論理的な裏付けがあるんですか？」  
「まあよからう やるのか やらないのか」

俺は一瞬迷ったが、この世界に未練はない。  
即答した。

「やります」

「よし財布とカードなどを置いていけ  
どのみち向こうには持っていけないからな  
こちらの世界に戻る気は？」

「無いです」

「そうか、無いなら財布から代金を抜いておく」



そんなシステムでいいのかとも思ったが、  
頭に強烈な波のようなものが襲い、  
思考が寸断された。

「うっ…！」

「よいぞ…見つけた…飛ばすぞ！」

老婆は俺の頭と水晶を手で押さえている。

「かっ！」





一瞬、意識が混濁し…



次の瞬間、俺の意識が切れた。

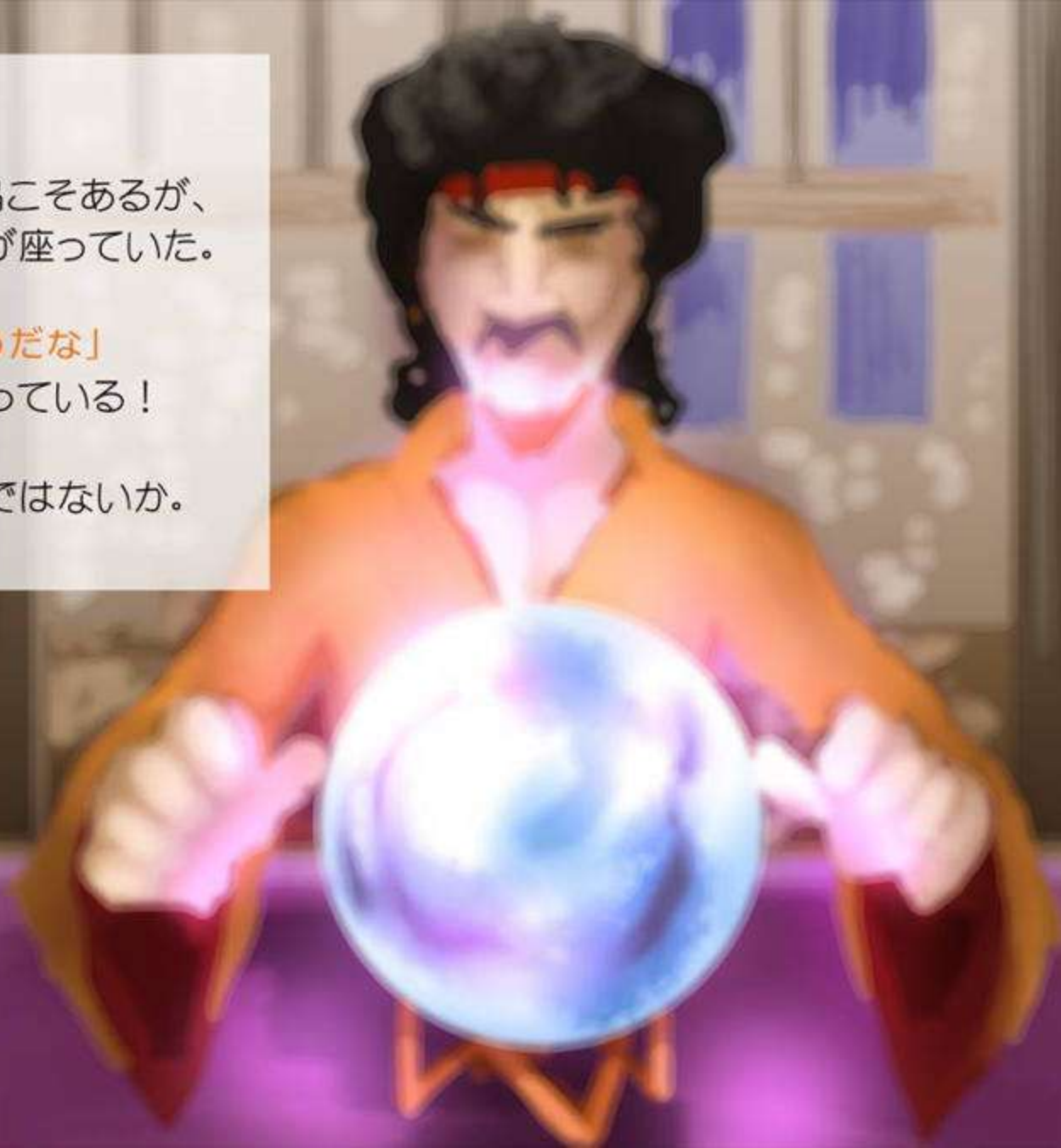
「はっ！！」

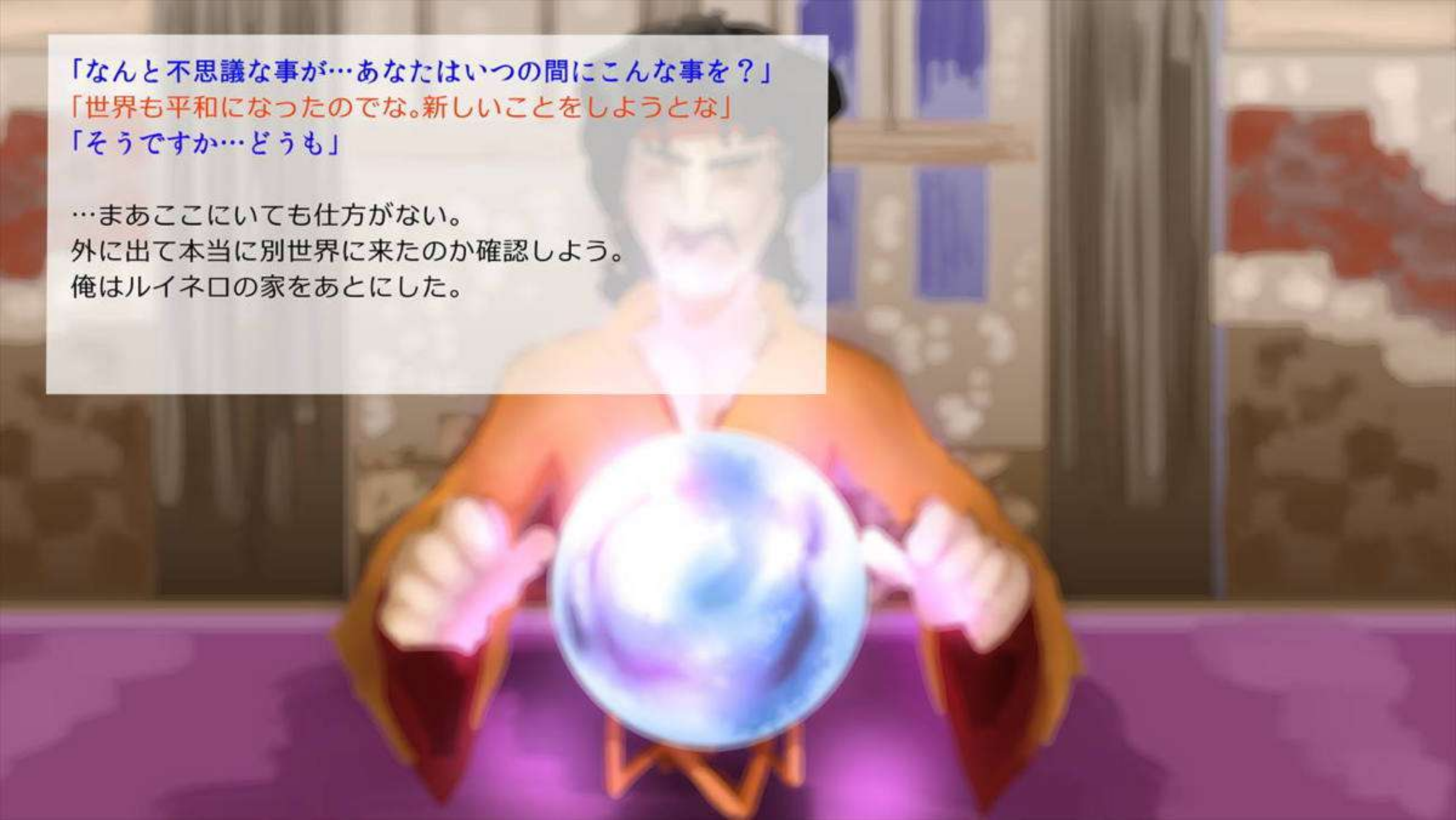
俺の目の前には、水晶こそあるが、  
先ほどとは違う人間が座っていた。

「…上手くいったようだな」

俺はこの占い師を知っている！

ドクエ8のルイネロではないか。





「なんと不思議な事が…あなたはいつの間にこんな事を？」

「世界も平和になったのでな。新しいことをしようとな」

「そうですか…どうも」

…まあここにも仕方がない。

外に出て本当に別世界に来たのか確認しよう。

俺はルイネ口の家をあとにした。



「この世界によろこそ」


あたりを見渡すと、そこは  
トラペッタのレイネロの家間違いない。

「信じられない…あの世界は実在していたのか？」

「異世界から水晶を通じて何かを送受信する仕組みだ」

「では…向こうの世界での婆さんと連絡を？」


「そういうことだな」



ドクエ8のあの世界じゃないか。  
まさか同じだ。信じられない。  
が、これからどうしよう。

ここは平和を取り戻した後の世界のように、  
俺は別に冒険はしたくないし。

…そこで俺の脳裏に浮かんだのは、もちろん。



ゼシカだ！ゼシカ、本物のゼシカがいるんじゃないか？

そう思った瞬間、はやくも勃起しそうになった。  
ひと目、本物のゼシカを見に行きたい。

俺はリーザス村に急いだ。

行く先の景色や街の風景に  
感動しながら、リーザス村に到着。

俺は村に着くなり、ゲームと同じ感覚で  
ゼシカの家に入りました。





ここは確かにゼシカの家だ…  
たしかに名門だけある作りで中が広い…！


と、ちょうど階段の上に…！



ゼシカだ！ゼシカが居たっ！

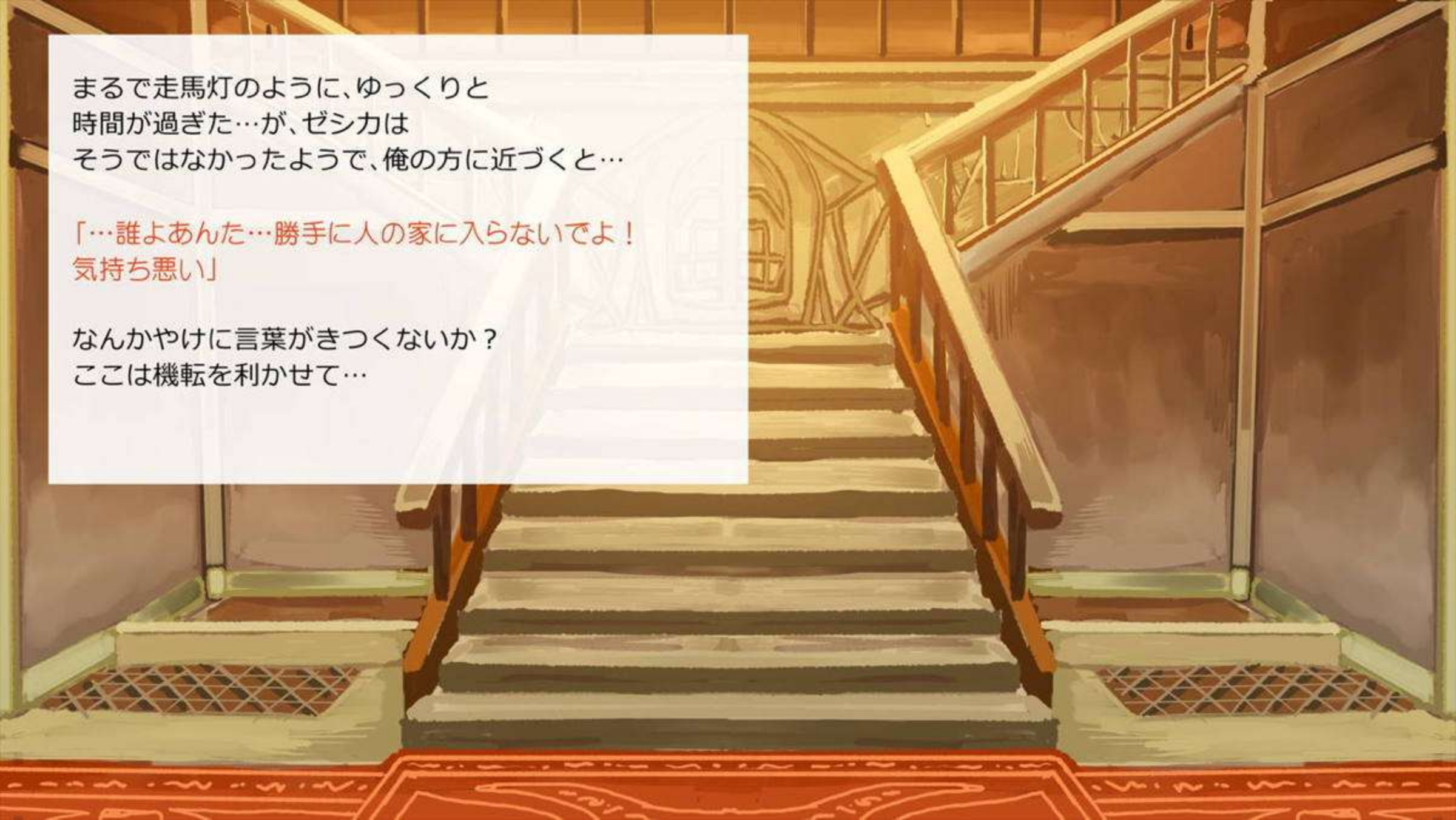
遠くから見ているのに恐ろしいほどの色気、そして恐ろしいほどの美人だ。



A young girl with vibrant red hair styled in two high pigtails, each secured with a gold-colored ring. She has large, expressive brown eyes and a slightly open mouth, looking upwards with a surprised or admiring expression. She is wearing a light pink, long-sleeved dress with a ruffled collar and a row of dark red buttons down the front. Her hands are positioned near her chest, and she appears to be leaning against a wooden structure. The background is a warm, golden-brown color, suggesting an indoor setting with soft lighting.

こんなに綺麗なのか…！  
実物の信じられないような美しさ…！

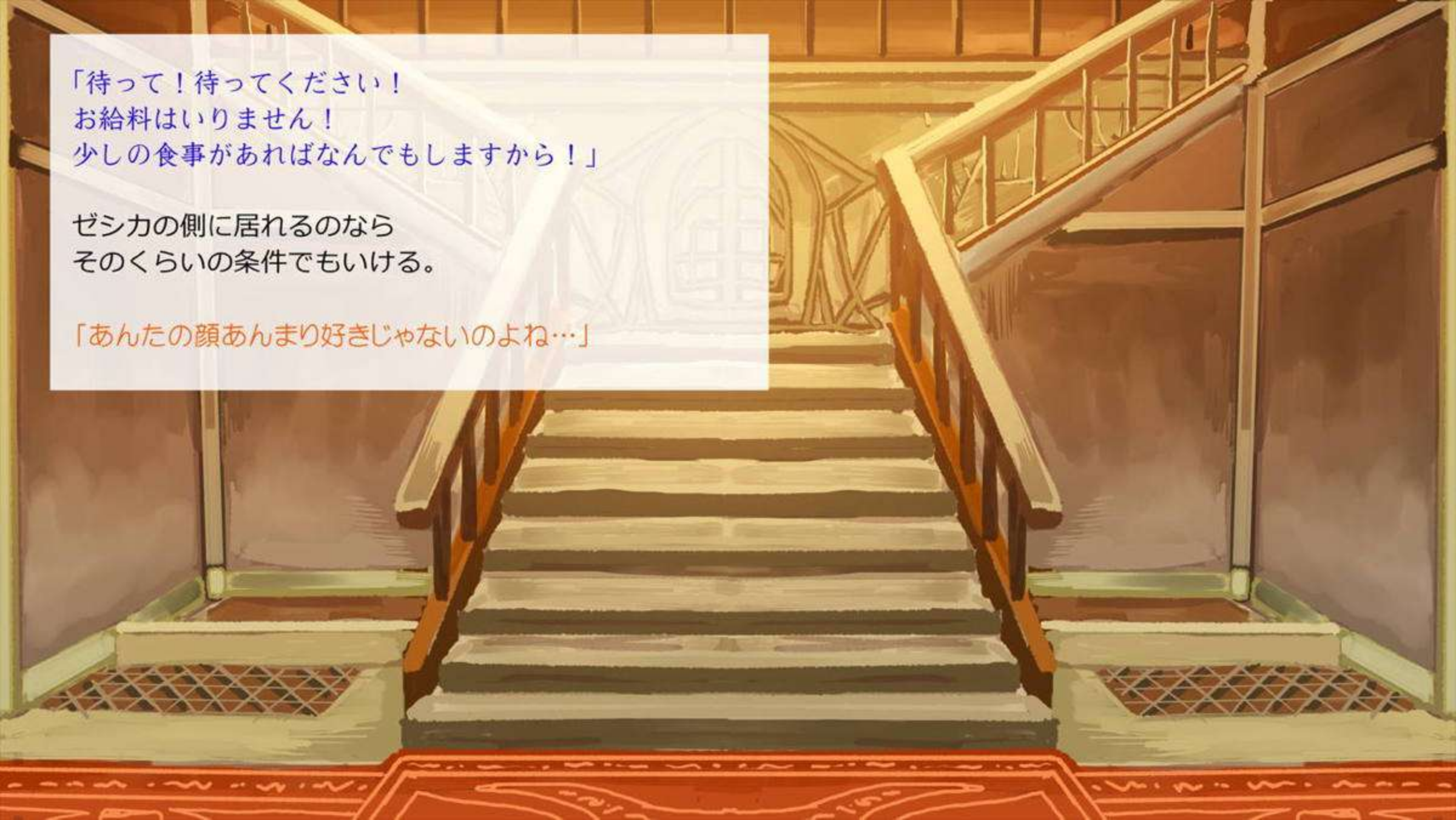
そして服の上からひと目で分かる、  
見事な爆乳…！



まるで走馬灯のように、ゆっくりと  
時間が過ぎた…が、ゼシカは  
そうではなかったようで、俺の方に近づくと…

「…誰よあんた…勝手に人の家に入らないでよ！  
気持ち悪い」

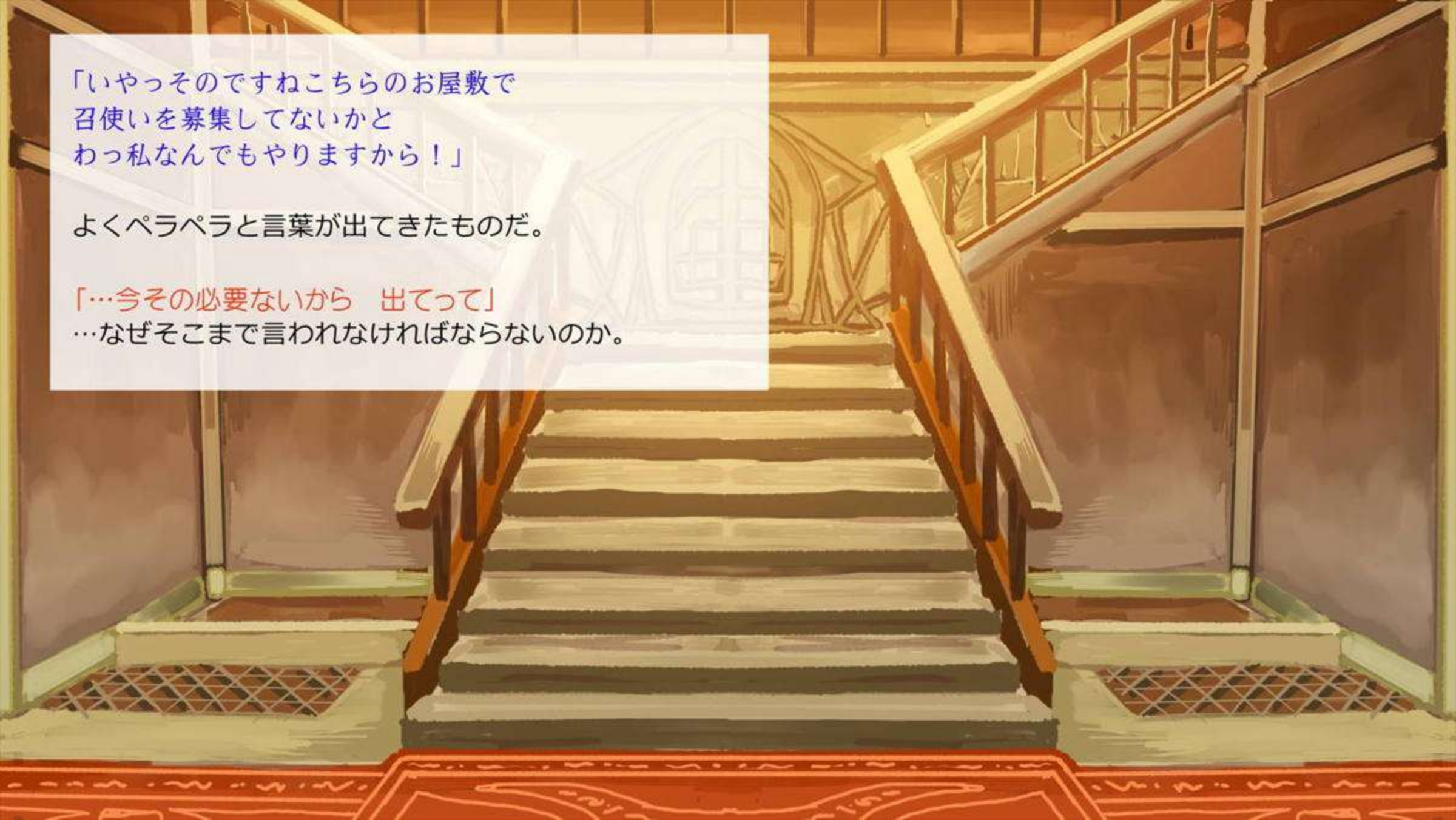
なんかやけに言葉がきつくないか？  
ここは機転を利かせて…



「待って！待ってください！  
お給料はいりません！  
少しの食事があればなんでもしますから！」

ゼシカの側に居れるのなら  
そのくらいの条件でもいける。

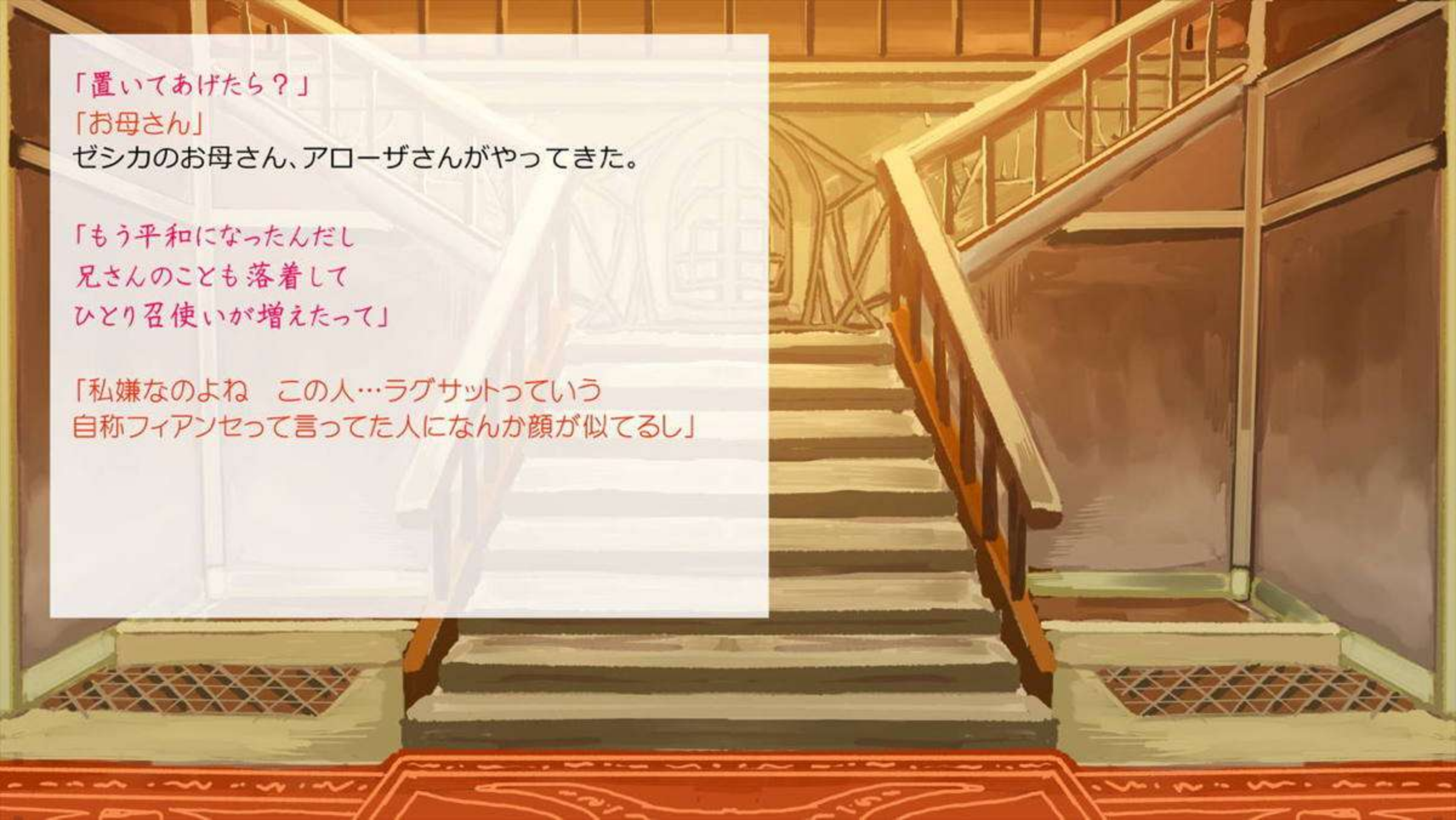
「あんたの顔あんまり好きじゃないのよね…」



「いやっそのですねこちらのお屋敷で  
召使いを募集してないかと  
わっ私なんでもやりますから！」

よくペラペラと言葉が出てきたものだ。

「…今その必要ないから 出てって」  
…なぜそこまで言われなければならないのか。



「置いてあげたら？」

「お母さん」

ゼシカのお母さん、アローザさんがやってきた。

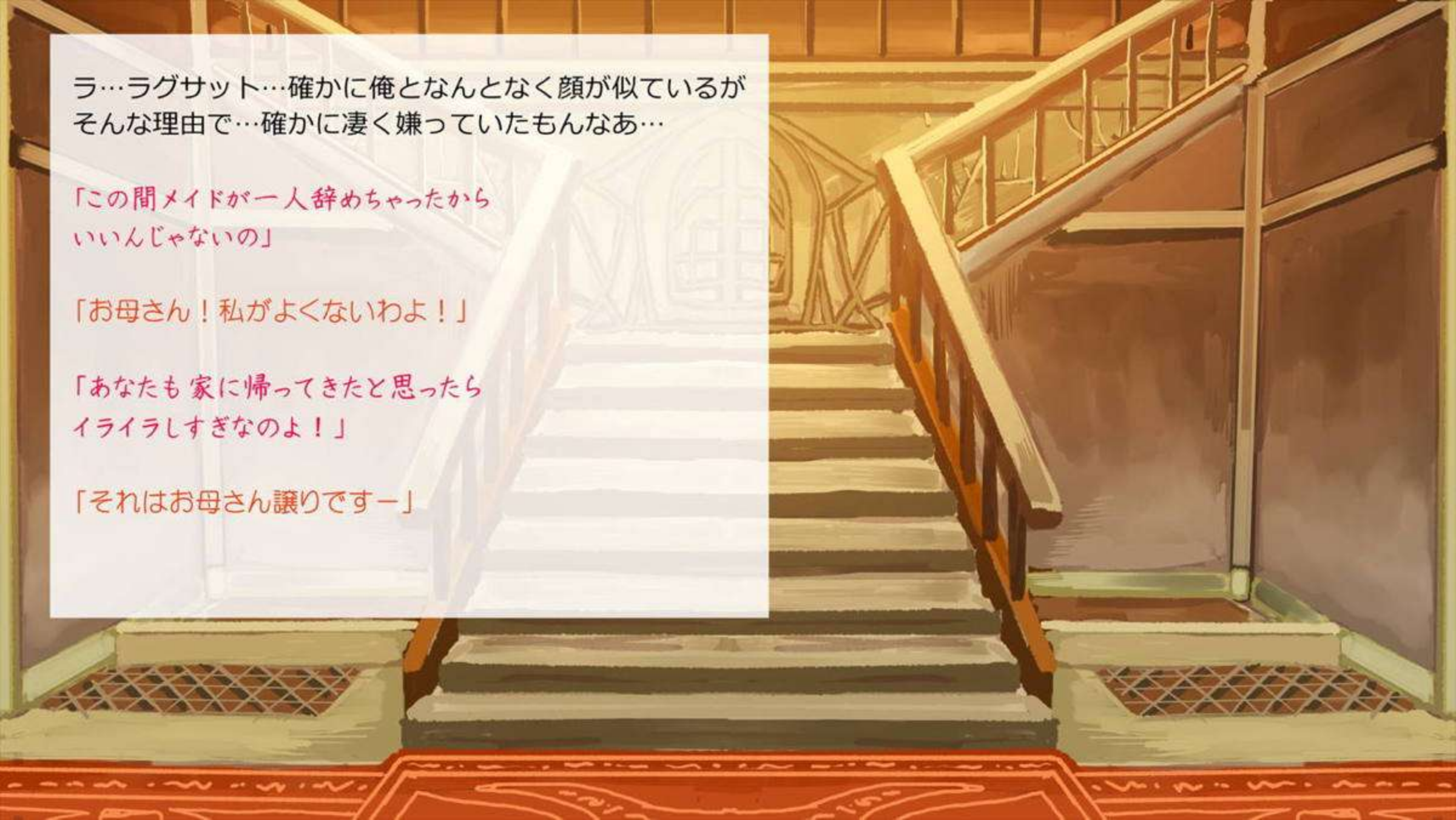
「もう平和になったんだし

兄さんのことも落ち着いて

ひとり召使いが増えたって」

「私嫌なのよね この人…ラグサットっていう

自称フィアンセって言ってた人になんか顔が似てるし」



ラ…ラグサット…確かに俺となんとなく顔が似ているが  
そんな理由で…確かに凄く嫌っていたもんなあ…

「この間メイドが一人辞めちゃったから  
いいんじゃないの」

「お母さん！私がよくないわよ！」

「あなたも家に帰ってきたと思ったら  
イライラしすぎなのよ！」

「それはお母さん譲りですー」





「ゼシカ…？」

アローザさんが眉をピクピクさせる。  
俺はとっさに間に割って入る。

「まあまあまああ！  
喧嘩はよくないんじゃないですか」

「触らないでよ！」

まだ触ってないのに…ラグサットに  
似てるからってこんな…

…なんとか召使いとして  
置いてもらうことには成功したようだ…

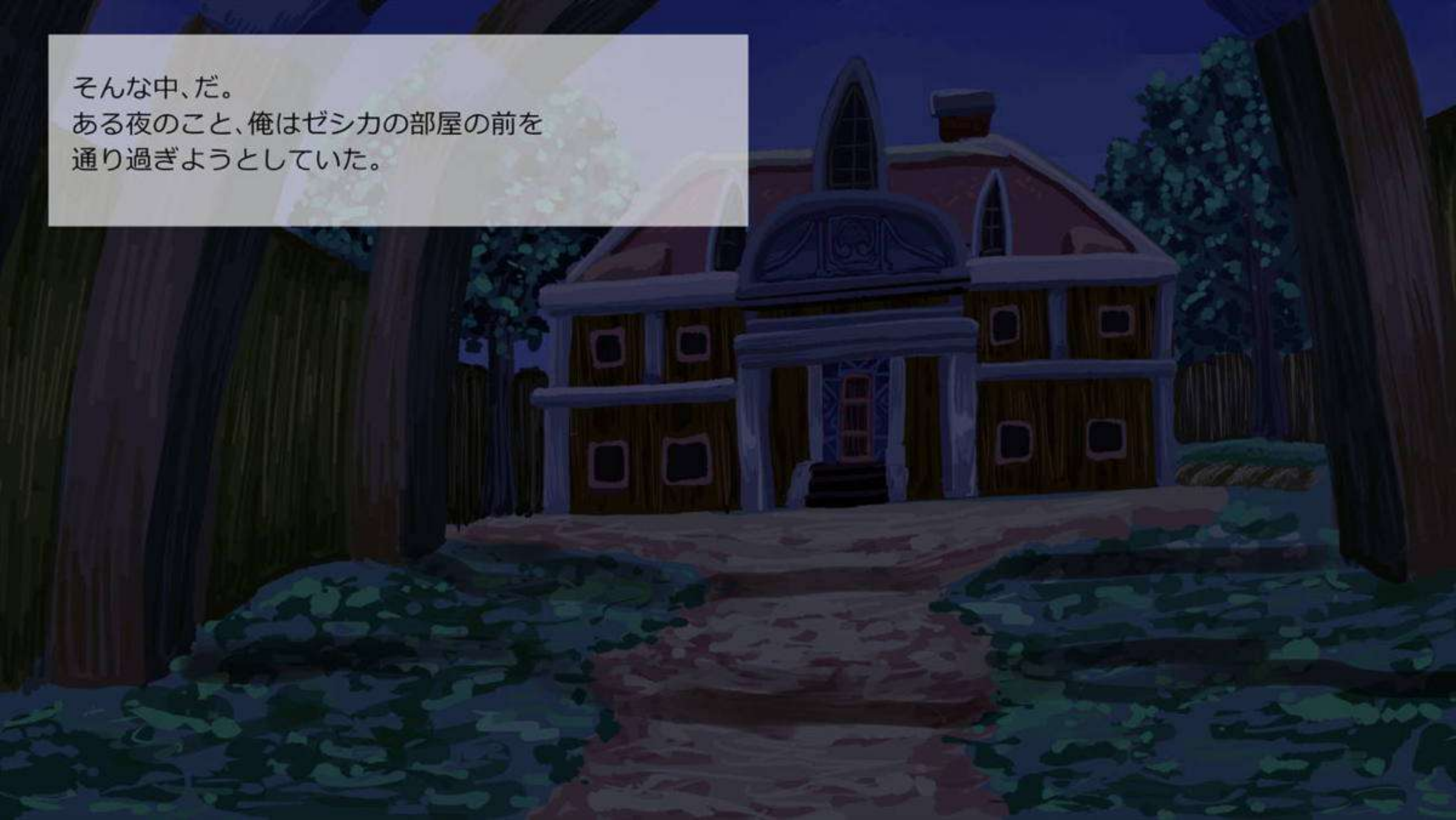
その後、召使いとして暮らす日々の中で、  
美しいゼシカを毎日見られる喜びを味わえたものの、  
ラグサットに似てるだけの理由で俺は殆ど  
ゼシカに口をきいてもらえなかった。

だが俺は幸せだった。ゼシカを間近で見れる生活。

召使いの生活は大変なことばかりだが、  
ゼシカがいるから頑張れた。  
嫌われているが…。



そんな中、だ。  
ある夜のこと、俺はゼシカの部屋の前を  
通り過ぎようとしていた。



と……ゼシカの部屋から  
聞こえるものが…



僅かに開いたドアの隙間から、部屋の様子を覗く…。

だらしなく開いた足。ビクビクと震えている。

「もおっ…我慢できないのよっ…毎日…毎日…  
エイトはミーティアと結婚しちゃうし…  
クワールとヤンガスは違うし…

私ってスタイルはサイコーなのに出会いがないから…  
体ばかり色気が出て…こうでもしないと…  
おさまらないなんて…」



俺のペニスはフルに勃起してしまっていた。  
たまらず我慢できなくてズボンと下着を下ろす。

「はあ…あ…気持ちいい…ああ…！  
ここ…触ると…甘くて…」

まさかこんな形でゼシカのまんこを見てしまうとは…！  
暗くてハッキリとは見えないが、確かにそこにある。

今射精しろと言われたら一万回でも射精できる…！

だが、継続しているオナニーを  
少しでも見逃すまいと射精をこらえながら  
俺はオナニーする。

「は…あ…！気持ちいい…！ああ…誰か…欲しいよお…  
ここに…男の人の…あれ…ああ…」

くっ…そんなに飢えているのか…！  
俺は…こんなに…すぐそばに…  
そこにぶち込みたいチ○ポがあるぞゼシカ…！！



指がゼシカのア液で濡れていき、  
月夜の明かりでぬらぬらと鈍く光っていく。

「か…皮…皮がじゃま…」  
自分で自分のクリトリスを剥いているのか。

なんといやらしい…  
指の腹でクリトリスを押し付け、  
回転させるように愛撫する。

その手つきは、数回のオナニーで  
得たものとは思えない。もう毎日のように  
オナニーをしているのだと確信する。

強弱をつけて肉芽をいじるゼシカ。  
腰をグラインドさせ、いやらしく尻を突き出す。

「はあああ…！うっ…気持ちいい…！  
やば…イっちゃう…」

熱い液体がこぼれ、指をつたっていく。  
美しい髪が月夜の明かりに照らされて激しく揺れた。  
がむしゃらに肉唇をいじくり、  
もう片方は肉芽を激しく愛撫する。



「はあああ…ダメっ…  
イっちゃう…！ああああ！」  
「ああ…！ゼシカ…俺もっ…!!」



「あああああつ！」  
「あつ…！ゼシカ…!!!うううつ！」

ゼシカの腰が浮く。巨乳が体の上で上下に跳ねる。  
背筋がピンと伸び、指先まで足が硬直する。

体の奥から快感が一気に押し寄せ、  
ゼシカの体を悦楽の波が支配する。

「はああああつ…！あ…！  
気持ちいい…！んっ…」  
「あつ…あ…ゼシカ…！あ…」

俺も生のゼシカがオナニーしている様子を  
オカズにするオナニーで最高に  
気持ちいい射精をしていた。

まだ快感でひざを笑わせているゼシカ。

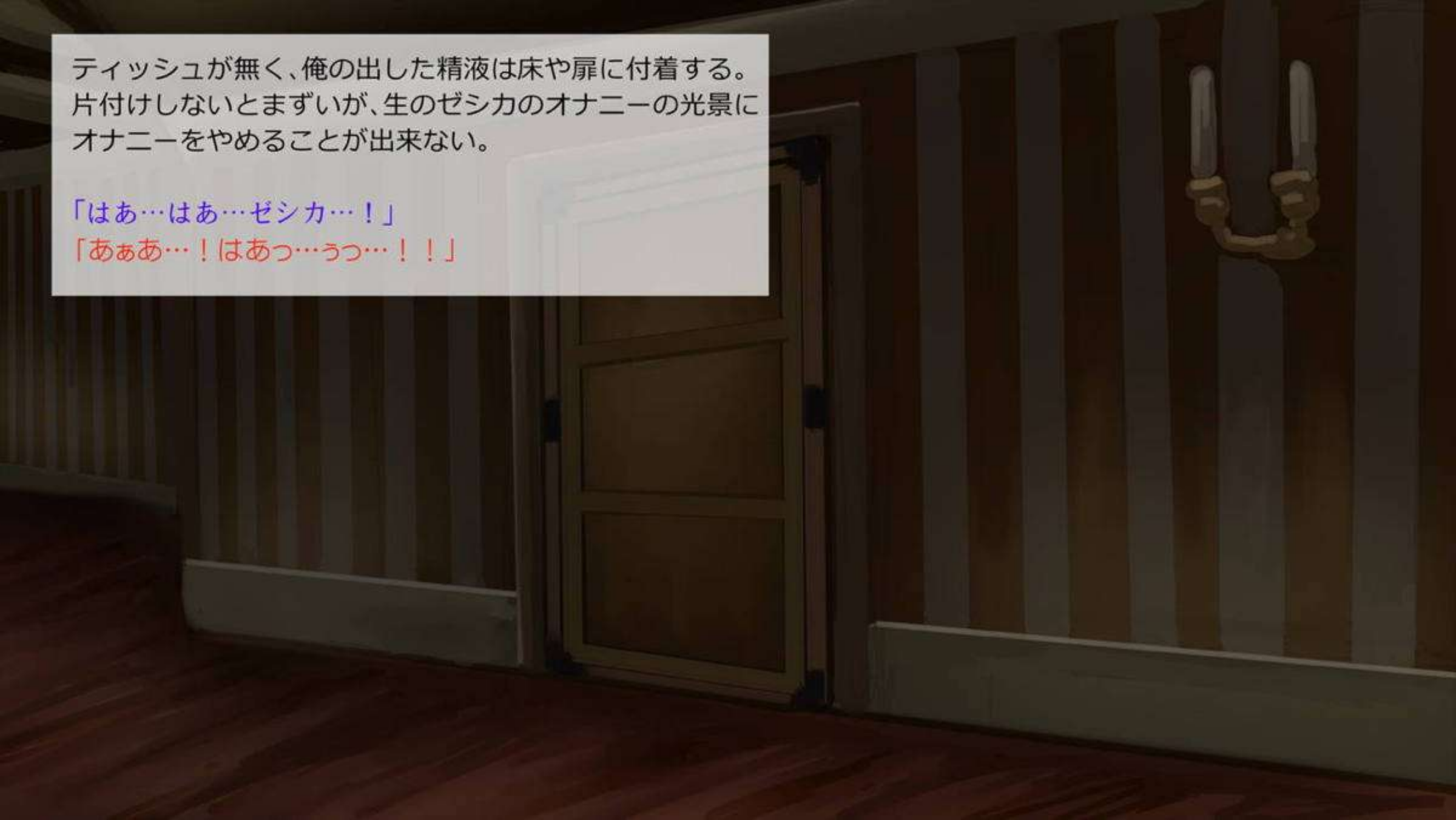
「はあ…はあ…でも駄目…  
足りない…こんなんじゃ…」

ゼシカはそのまま陰唇をまさぐり、  
再びいやらしい水音が響き始める…。

「もっと気持ちよく…んっ…  
指じゃなくて…おちんちんなら  
もっと気持ちいいのかな…」

俺も射精を終えたばかりなのに  
全く萎えず、ドア越しに  
ゼシカと一緒にオナニーを続けた…。





ティッシュが無く、俺の出した精液は床や扉に付着する。  
片付けしないとまずいが、生のゼシカのオナニーの光景に  
オナニーをやめることが出来ない。

「はあ…はあ…ゼシカ…！」

「あああ…！はあっ…うっ…！！」

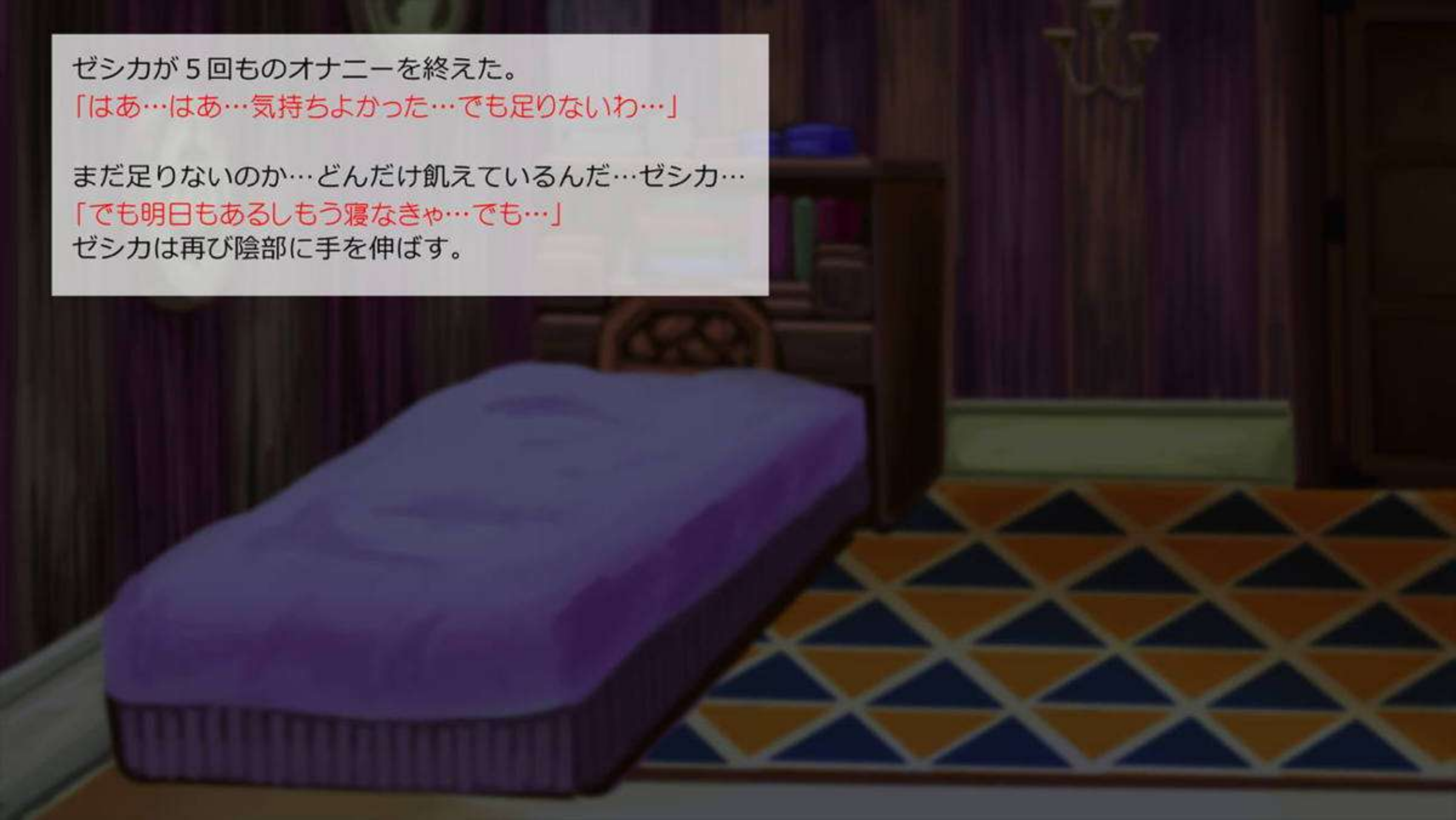
ゼシカが5回ものオナニーを終えた。

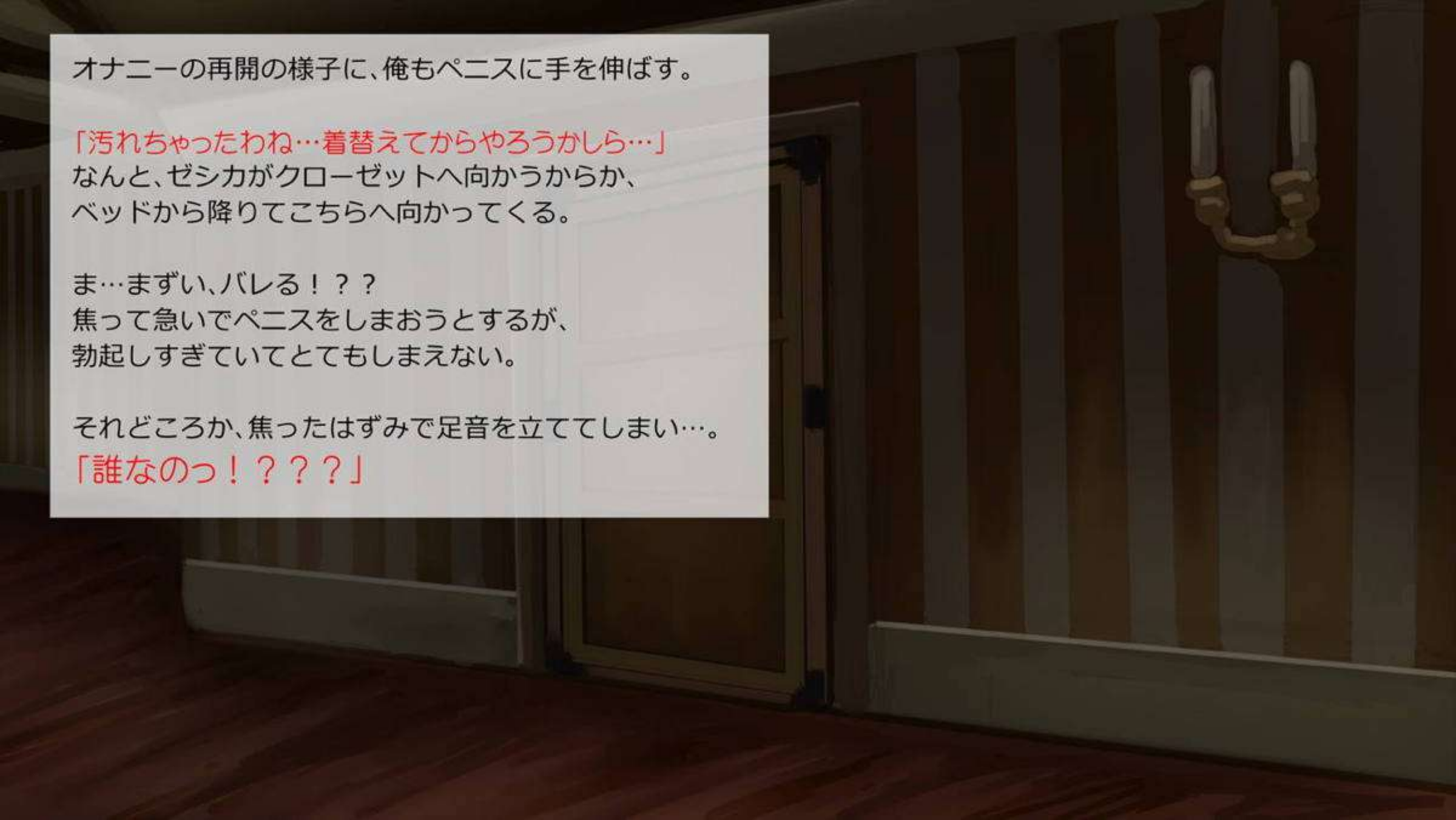
「はあ…はあ…気持ちよかった…でも足りないわ…」

まだ足りないのか…どんだけ飢えているんだ…ゼシカ…

「でも明日もあるしもう寝なきゃ…でも…」

ゼシカは再び陰部に手を伸ばす。



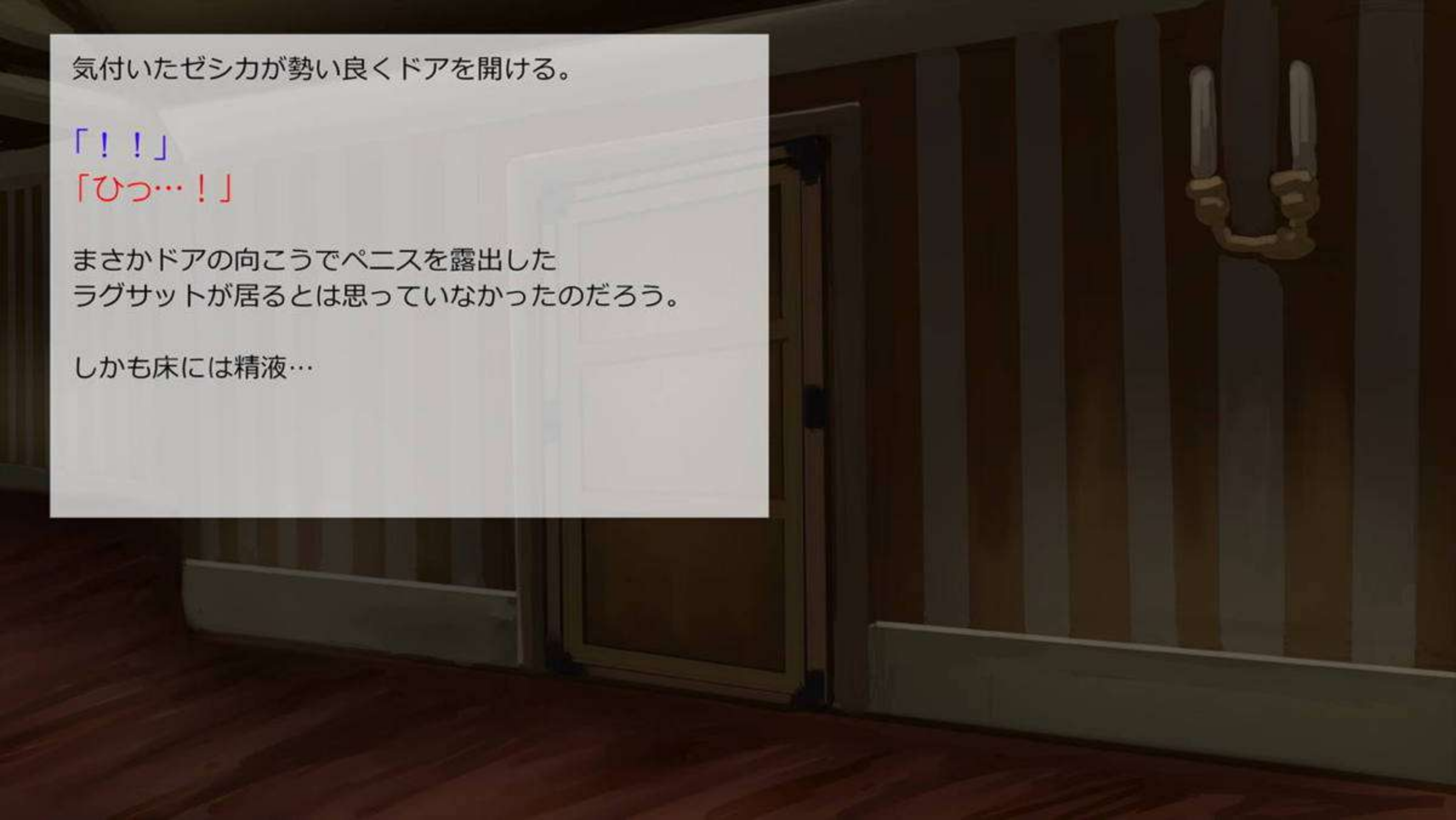
A dimly lit room with a wooden door and a brass handle. The floor is dark wood. The door is slightly ajar, and the handle is a classic brass design with two vertical bars.

オナニーの再開の様子に、俺もペニスに手を伸ばす。

「汚れちゃったわね…着替えてからやろうかしら…」  
なんと、ゼシカがクローゼットへ向かうからか、  
ベッドから降りてこちらへ向かってくる。

ま…まずい、バレる！??  
焦って急いでペニスをしまおうとするが、  
勃起しすぎていてとてもしまえない。

それどころか、焦ったはずみで足音を立ててしまい…。  
「誰なのっ！??？」



気付いたゼシカが勢い良くドアを開ける。

「！！」

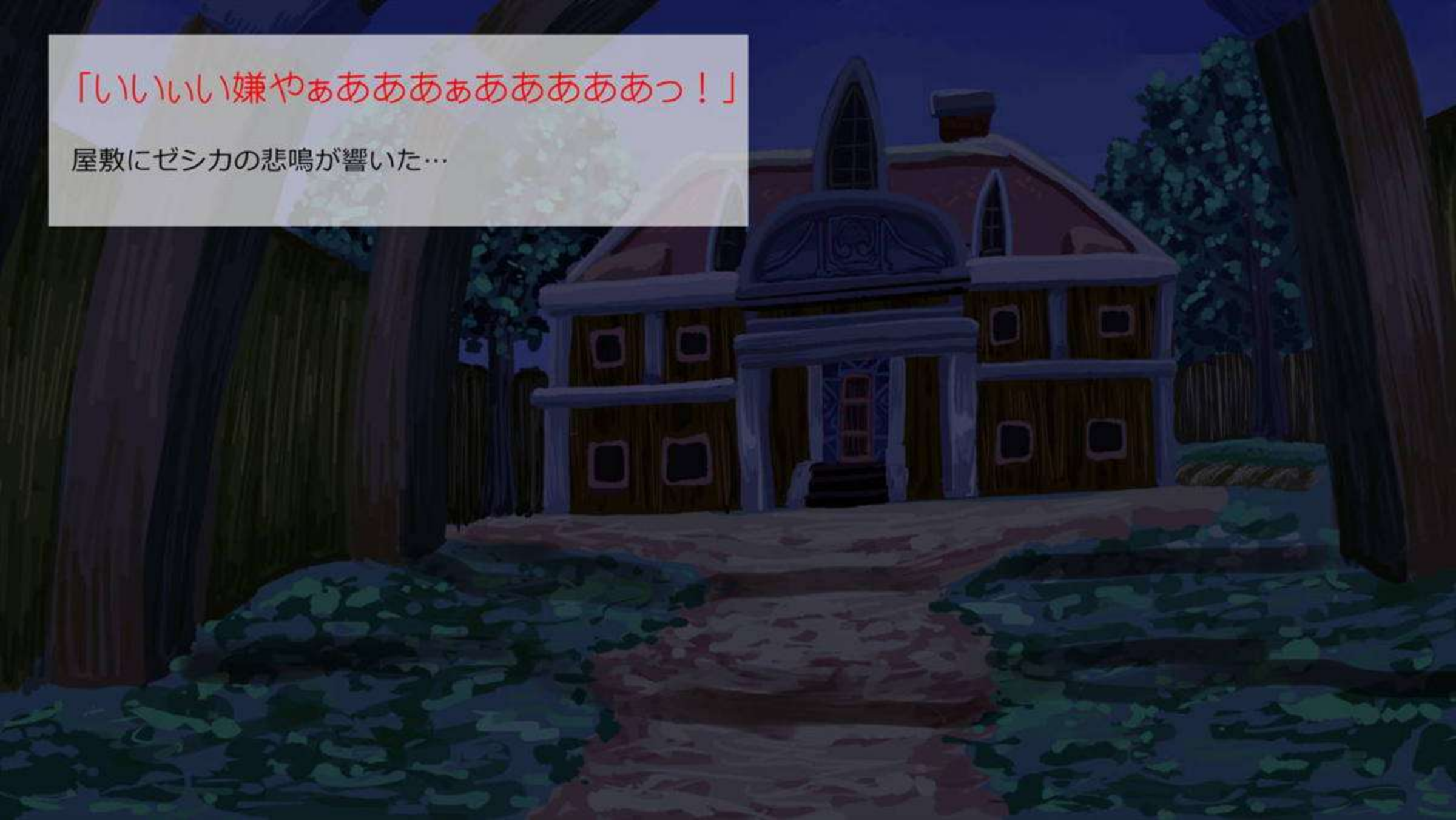
「ひっ…！」

まさかドアの向こうでペニスを露出した  
ラグサットが居るとは思っていなかったのだろう。

しかも床には精液…

「しいしい嫌やあああああああつ！」

屋敷にゼシカの悲鳴が響いた…





そして。  
ゼシカは俺に対し、攻撃呪文を唱えた…。

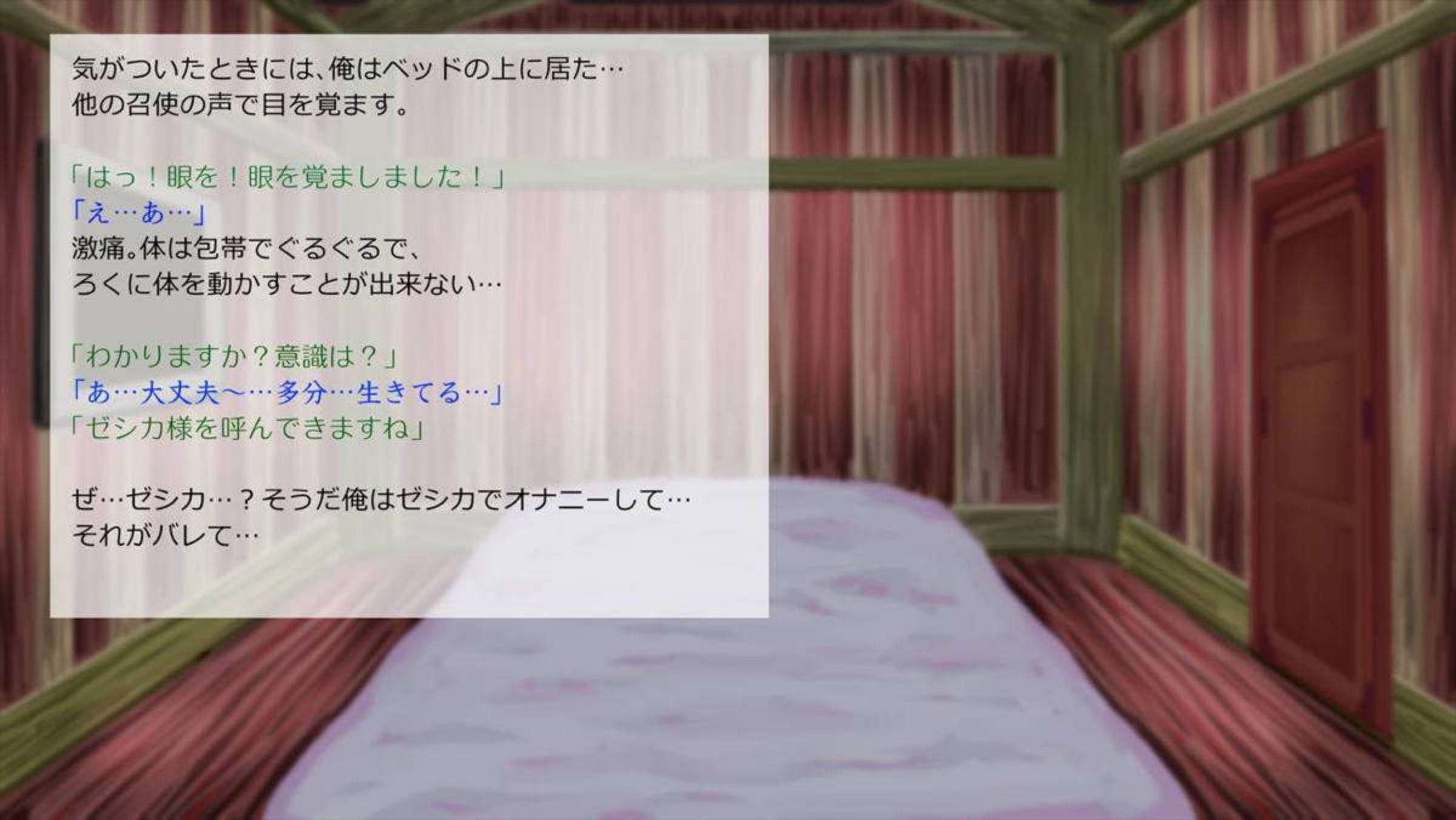
「メラゾーマ！」

「イオナズン！」

「マヒャド！」

「えっ！???」





気がついたときには、俺はベッドの上に居た…  
他の召使の声で目を覚ます。

「はっ！眼を！眼を覚ましました！」

「え…あ…」


激痛。体は包帯でぐるぐるで、  
ろくに体を動かすことが出来ない…

「わかりますか？意識は？」

「あ…大丈夫～…多分…生きてる…」

「ゼシカ様を呼んできますね」


ぜ…ゼシカ…？ そうだ俺はゼシカでオナニーして…  
それがバれて…

The background is a 3D-rendered room. In the center is a bed with a white sheet and a pink floral pattern. The walls are covered in vertical wood paneling. To the right, there is a dark brown door. The floor is covered in a red and brown striped carpet. A white text box is overlaid on the left side of the image.

…ここは屋敷内にあてられた自分のベッドだ…。

しばらくするとドアを開けてゼシカが入ってきた。  
相変わらず彼女は美しい…

「よかった…眼を覚まして…  
ごめんなさい…私…ビックルしちゃって…  
それで…すんませんっしたーっ！」  
ちょっと感動。それはおいておいて。

A room with a bed in the foreground, a door on the right, and a window with curtains in the background. The room has a warm, slightly dim lighting.

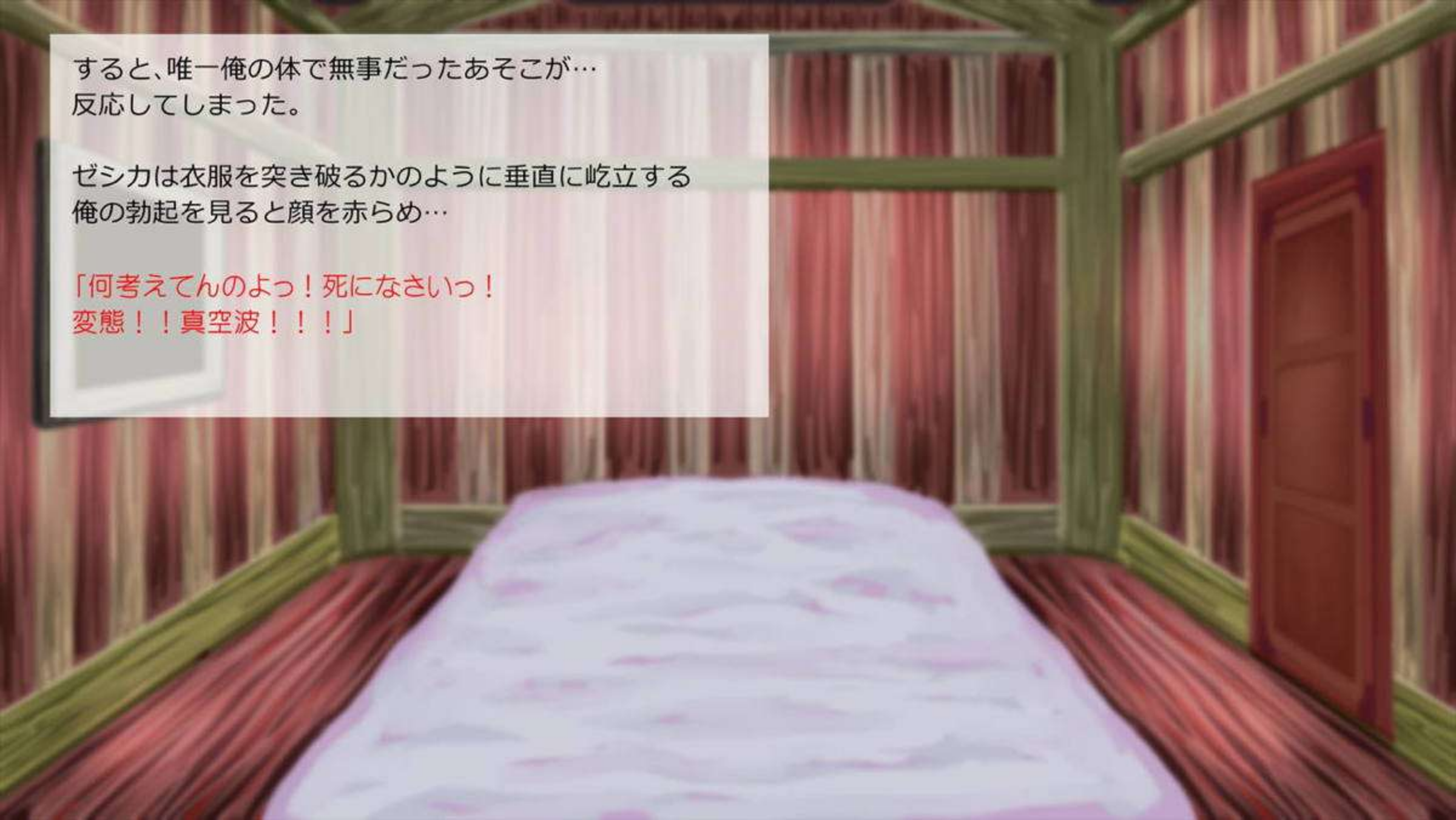
「いや…大丈夫ですゼシカ様…  
声が聞こえて…つい…覗いたら…」

「覗いたの！????」

「あっ いや 覗いてない！覗いてないです！  
空耳！幻聴です！」

「見てたの？聞いてただけじゃなくて？見たの！？」

俺はあのオナニーの光景を思い出してしまった。

A room with a bed in the foreground, a window with a white frame on the left, and a door on the right. The walls are covered in red and white vertical stripes, and the floor is also striped. The room is lit with a warm, reddish light.

すると、唯一俺の体で無事だったあそこが…  
反応してしまった。

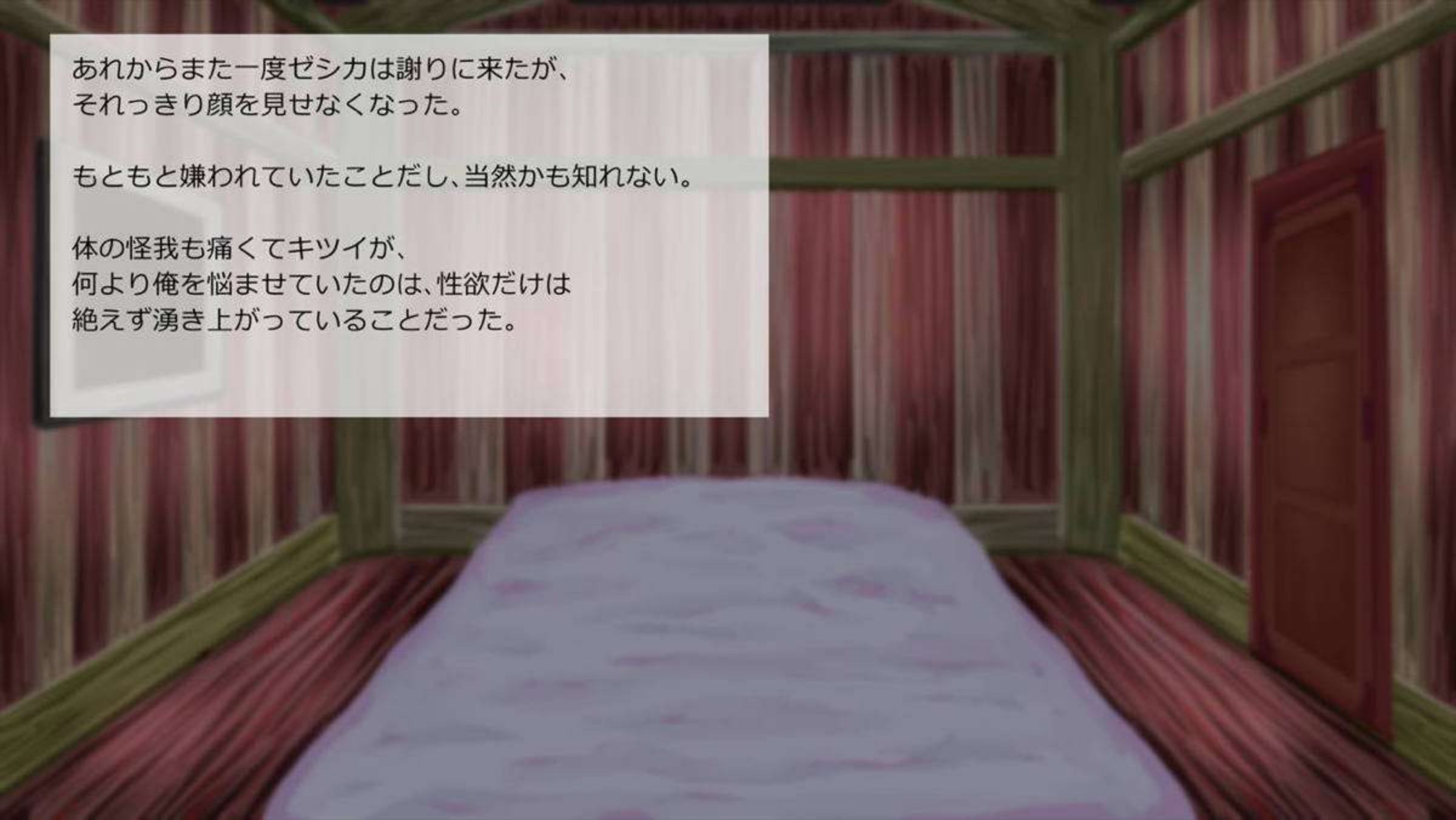
ゼシカは衣服を突き破るかのように垂直に屹立する  
俺の勃起を見ると顔を赤らめ…

「何考えてんのよっ！死になさいっ！  
変態！！真空波！！！」

俺はまた意識を失い、気がついたのは  
それから3日後だった。

全治半年。この世界に来て  
とんでもない目にあつたものだ…

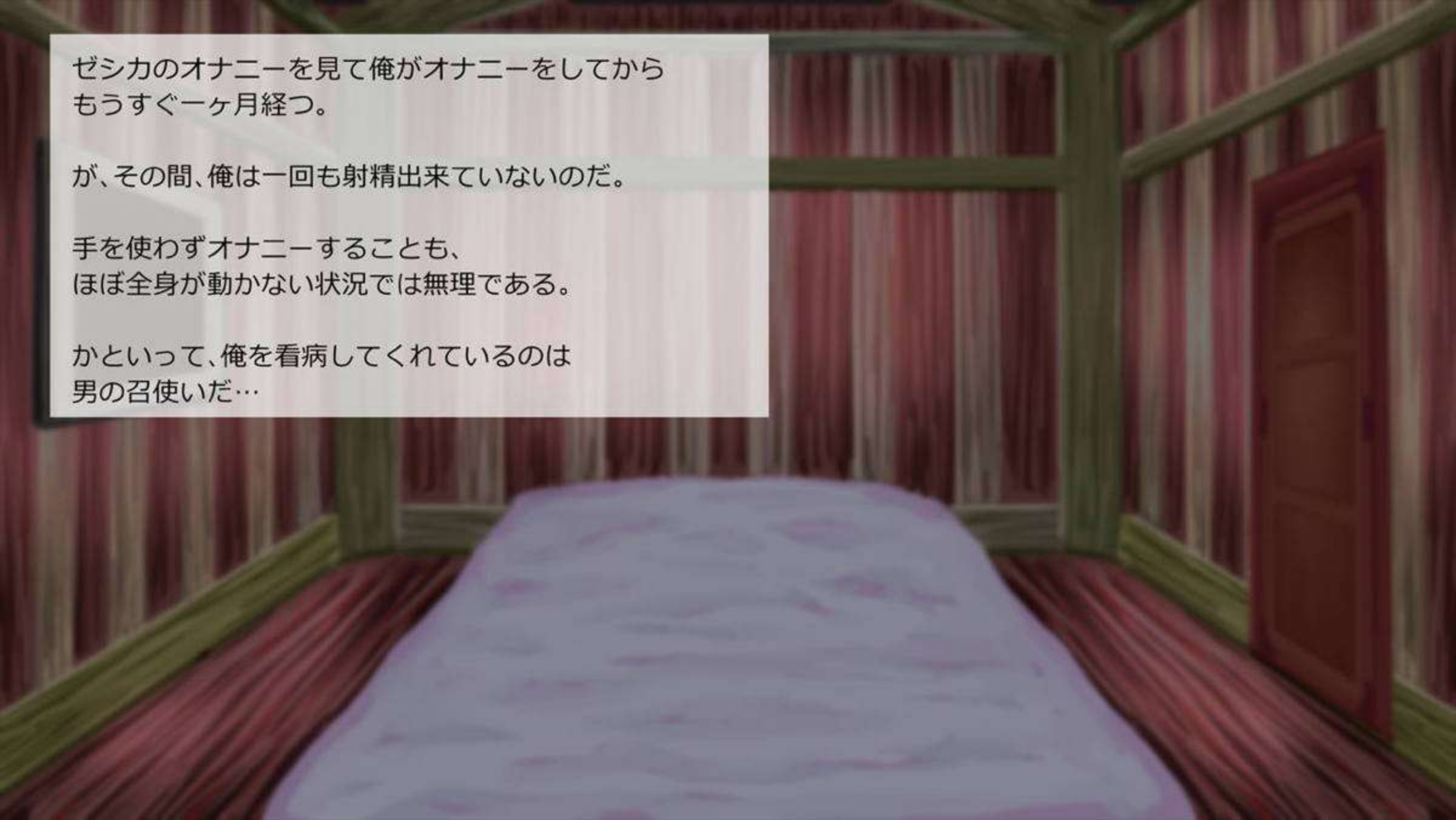


A bedroom with a bed in the foreground, a window with red curtains in the background, and a wooden door on the right. The room has green trim around the window and door.

あれからまた一度ゼシカは謝りに来たが、  
それっきり顔を見せなくなった。

もともと嫌われていたことだし、当然かも知れない。

体の怪我も痛くてキツイが、  
何より俺を悩ませていたのは、性欲だけは  
絶えず湧き上がっていることだった。

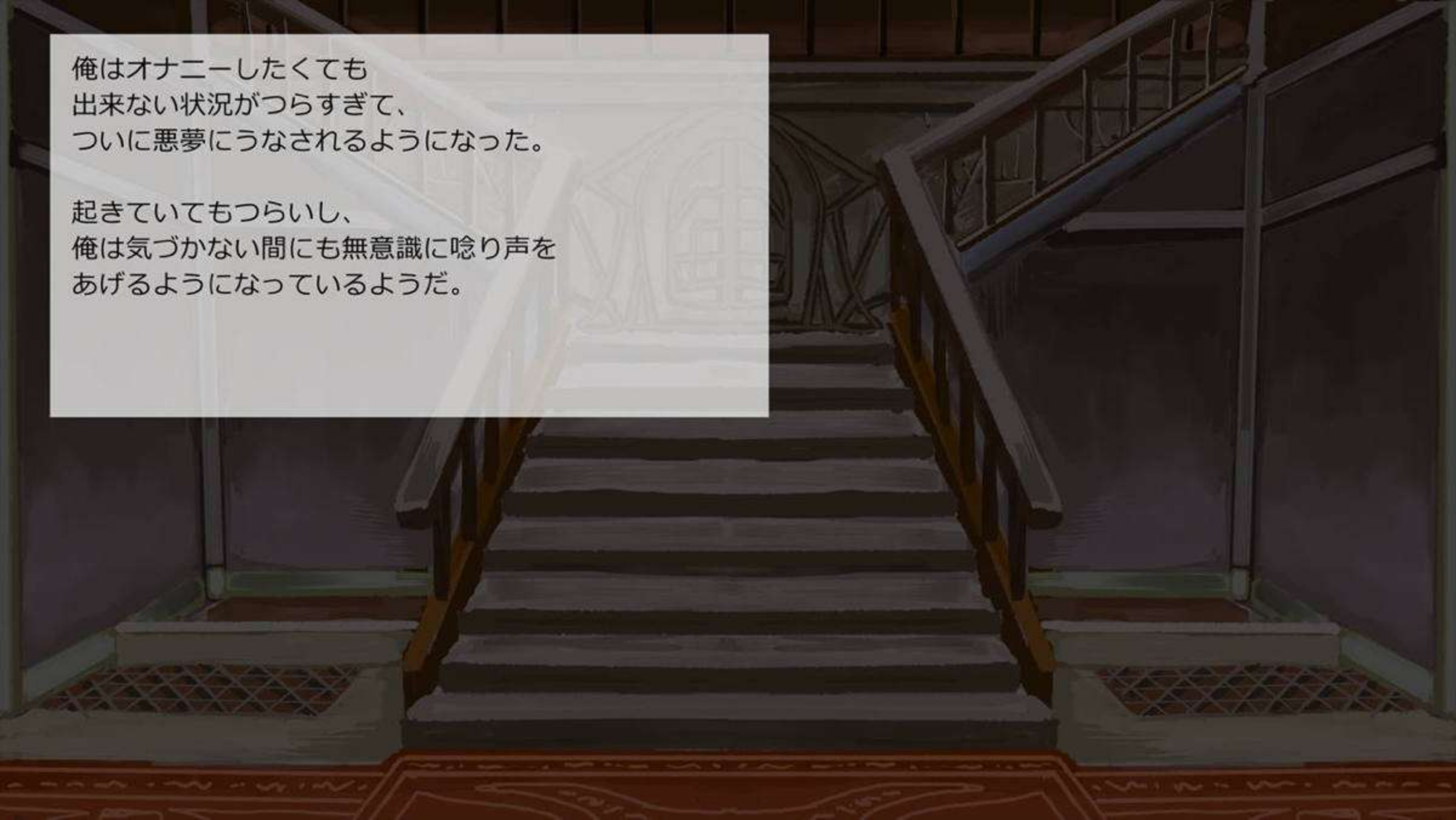
A 3D-rendered room with a bed, curtains, and a door. The room has a dark red and green striped pattern on the walls and floor. A bed with a light purple blanket is in the foreground. A window with red curtains is on the left, and a door is on the right.

ゼシカのオナニーを見て俺がオナニーをしてから  
もうすぐ一ヶ月経つ。

が、その間、俺は一回も射精出来ていないのだ。

手を使わずオナニーすることも、  
ほぼ全身が動かない状況では無理である。

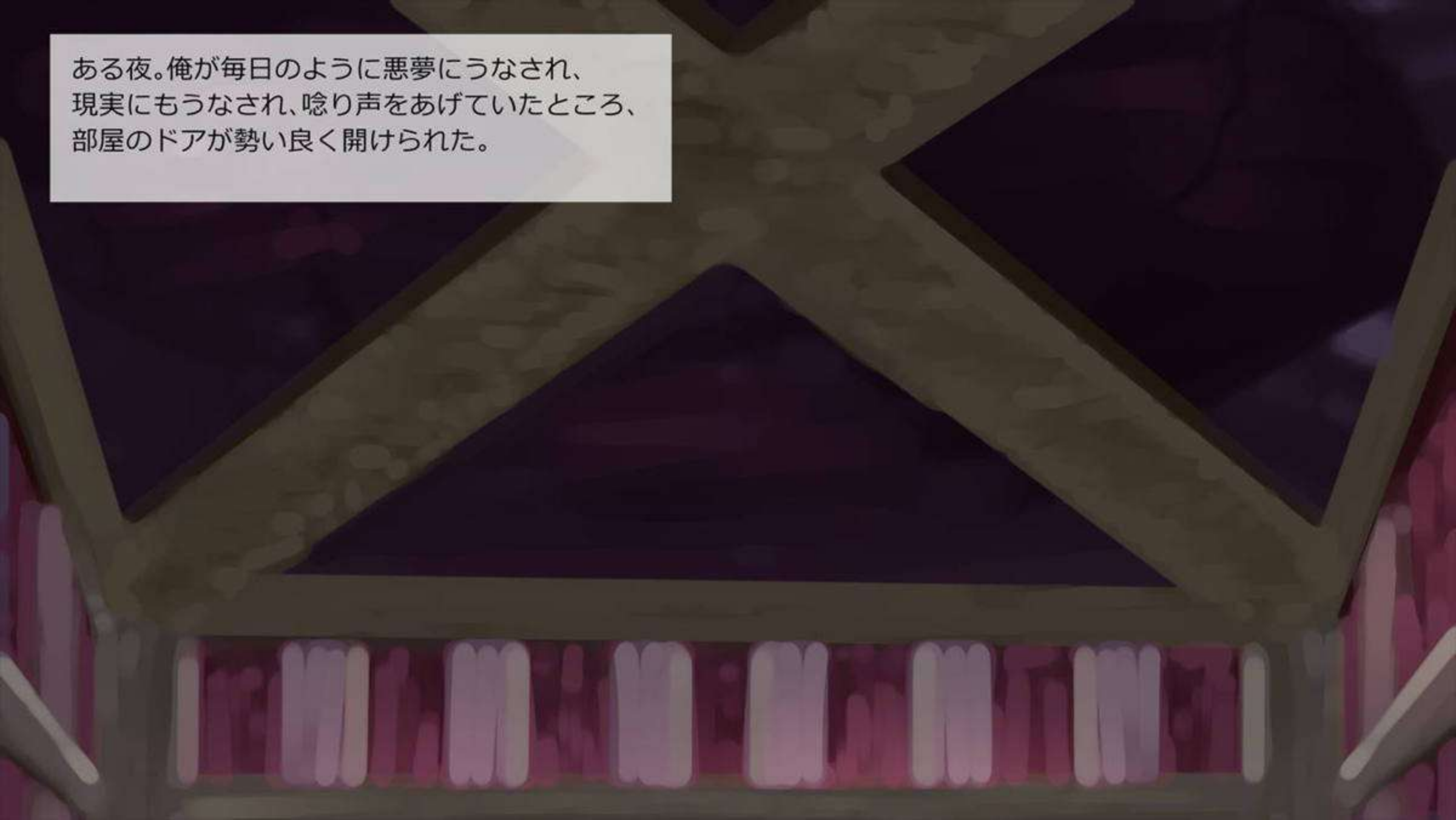
かといって、俺を看病してくれているのは  
男の召使いだ…



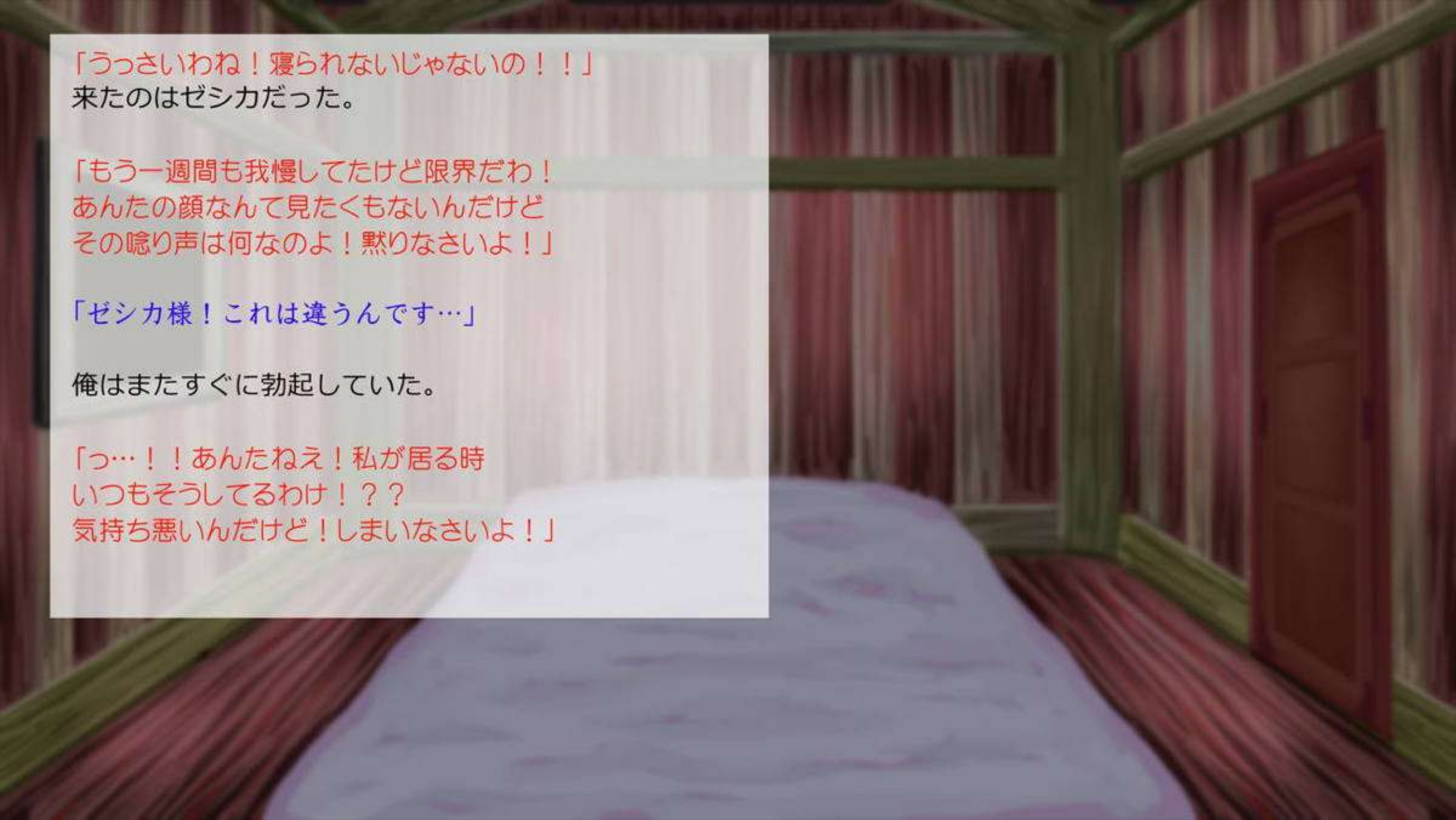
俺はオナニーしたくても  
出来ない状況がつらすぎて、  
ついに悪夢にうなされるようになった。

起きていてもつらいし、  
俺は気づかない間にも無意識に唸り声を  
あげるようになってきているようだ。



The background is a dark, stylized illustration of a room's interior. It features a wooden frame structure, possibly a bed or a window frame, with a window showing a night view. The colors are muted, with dark blues, purples, and browns. The overall atmosphere is mysterious and somber.

ある夜。俺が毎日のように悪夢にうなされ、  
現実にもうなされ、唸り声をあげていたところ、  
部屋のドアが勢い良く開けられた。



「うっさいわね！寝られないじゃないの！！」  
来たのはゼシカだった。

「もう一週間も我慢してたけど限界だわ！  
あんたの顔なんて見たくもないんだけど  
その唸り声は何なのよ！黙りなさいよ！」

「ゼシカ様！これは違うんです…」

俺はまたすぐに勃起していた。

「っ…！！あんたねえ！私が居る時  
いつもそうしてるわけ！？  
気持ち悪いんだけど！しまいなさいよ！」

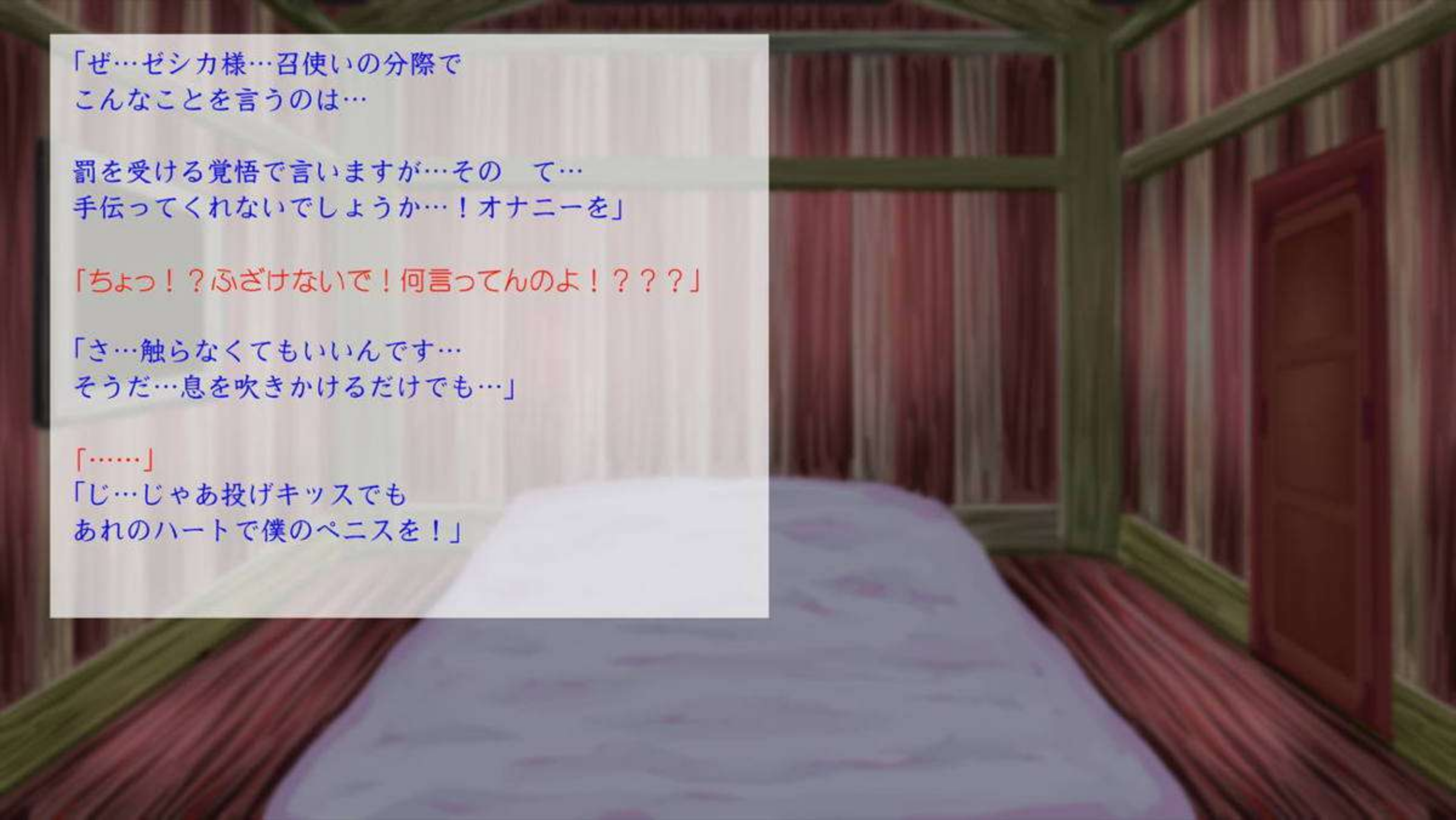
「だ…だからしまえないんです…それに…  
もう一ヶ月も出してなくて…つらくてつらくて……」

「…しまわないとベギラマくらわすわよ…」

「だから無理なんですよ…！  
自分ひとりじゃできないんです…」

「出来ないって何がよ」  
「お…オナニー」

「おなっ…！」  
ゼシカは赤面する。

A bedroom scene with a bed in the foreground, a window with red curtains in the background, and a wooden door on the right. The room is dimly lit, suggesting an evening or night setting.

「ぜ…ゼシカ様…召使いの分際で  
こんなことを言うのは…

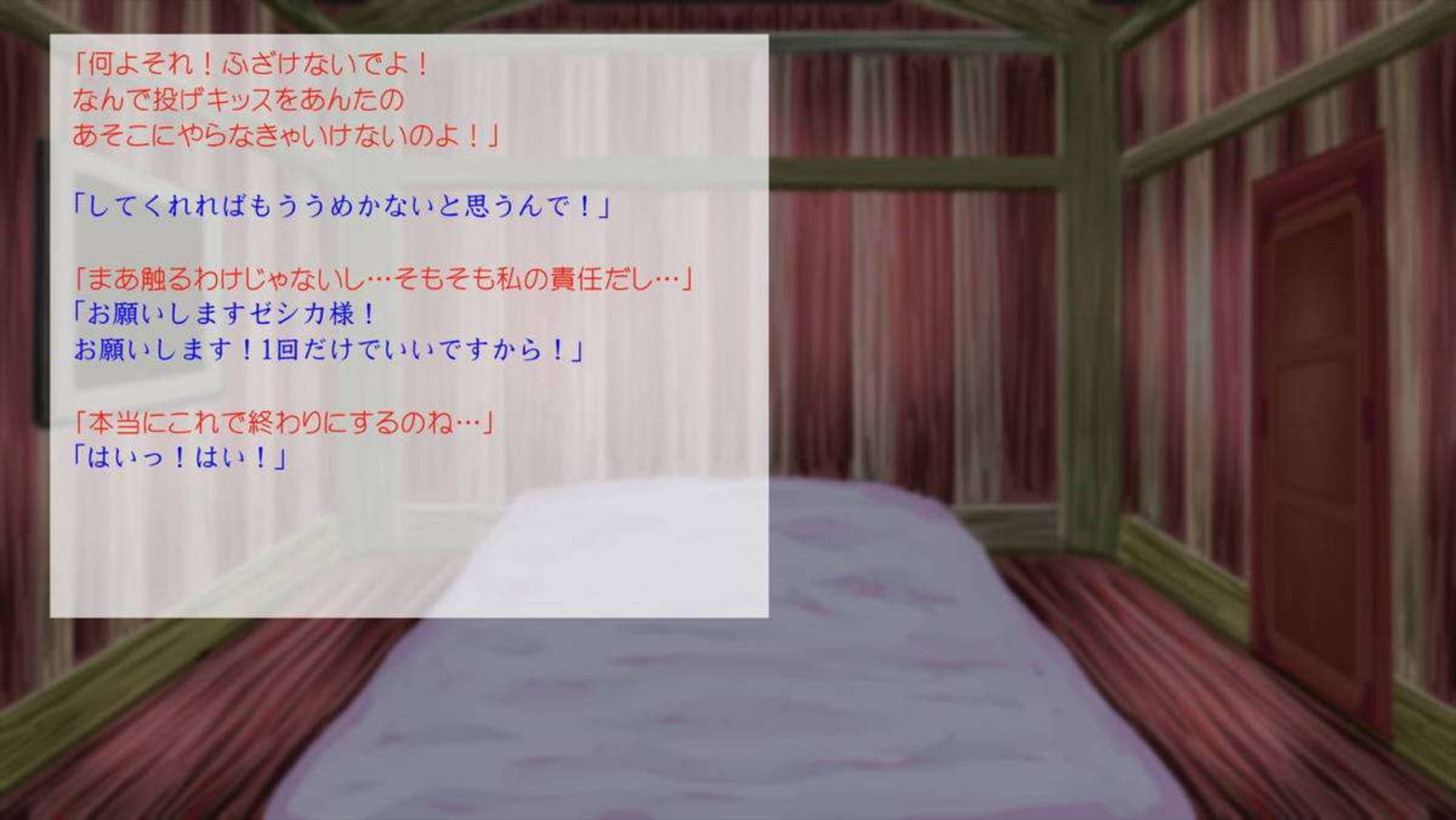
罰を受ける覚悟で言いますが…その で…  
手伝ってくれないでしょうか…！オナニーを」

「ちよっ！？ふざけないで！何言ってんのよ！？！？」

「さ…触らなくてもいいんです…  
そうだ…息を吹きかけるだけでも…」

「……」

「じ…じゃあ投げキッスでも  
あれのハートで僕のペニスを！」



「何よそれ！ふざけないでよ！  
なんで投げキッスをあんたの  
あそこにやらなきゃいけないのよ！」

「してくれればもううめかないと思うんで！」

「まあ触るわけじゃないし…そもそも私の責任だし…」

「お願いしますゼシカ様！

お願いします！1回だけでいいですから！」

「本当にこれで終わりにするのね…」

「はいっ！はい！」

「はあ…何でこんなことになっちゃったのかしら…」

「はあ…はあ…。ゼシカ様の投げキッス…  
ゼシカ様の投げキッスが僕のペニスに！！！」

「ちょっと黙っててくれる？」

下着が張り詰めている。

一ヶ月たまっているのは勿論、  
ゼシカと性的なふれあいがついに…  
下着と空気越しだけど。

「はあ…。じゃあ行くわよ…」

ちゅっ...

「んっ...ちゅっ...」


ゼシカの唇から♡が生み出され、  
その手の流れをたどるように  
こちらに発射されていく...

「おっ...お...！おおおお！！！」

んっ

んっ

んっ！




そしてそのハートが  
俺の下着に炸裂する。

痛みと、甘い刺激が破裂し、  
同時に温かさに  
包まれるような感覚が…！

と、この一瞬で俺のペニスは  
根本から快感を増して行って…！！

「おっ！????お…！」





「おあああああっ！」

射精の瞬間の律動で、  
ただでさえ投げキッスの破裂で  
繊維が弱まっていた下着を  
俺のペニスが突き破った。

そして大量の精液がゼシカの方へ。

「ちよっ…!?きやつ!!!」

「あああっ！気持ちいいっ！  
ゼシカの投げキッスっ!!!!」

ガ  
ブル

げ  
ち  
や  
あ

ゼシカは冒険で培った素早さで俺の精液を避けたが、手にそれが付着してしまった。

「う…うそでしょ…」


まだ一ヶ月分の大量の射精は続いている。

「ああ…ゼシカ様…気持ちいいよお…ゼシカ様…」

ビュッ  
グッ!

ビュッ  
グッ!

ビュッ  
グッ!



俺はゼシカの投げキッスで  
オナニー出来たことにご満悦だったが…。

「あんた…覚悟は出来てるんでしょうね？」

「え…何が…」

ゼシカの手には自分のねばついた精液が…。

「やばい…！」

「ベギラゴン！」

「おわーっ！！」

そして俺は、回復していた怪我を  
更に悪くしてしまうのであった…。

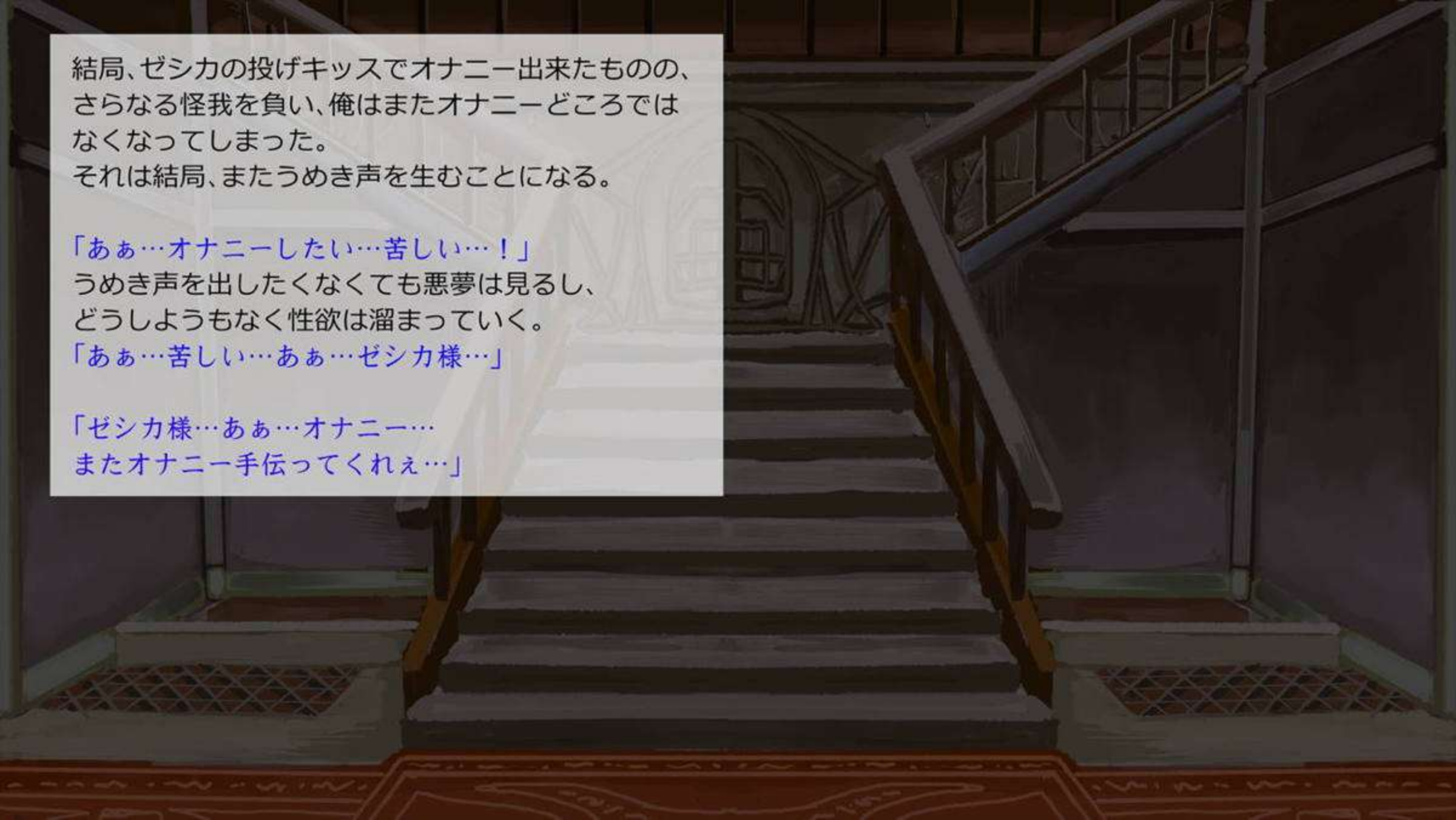


「はあ…何なのよアイツ！気持ち悪い！  
びっくりするじゃないの！  
くっさいしベタベタだし最低…！」

だが、その精液に何とも言えないオスの匂いを感じ、  
性欲でどうにかかなりそうなゼシカの膣は潤んだ。

「っ…！」

その事実をもみ消すかのように、ゼシカは  
一心不乱に手を洗い、  
精液を洗い落とす。



結局、ゼシカの投げキッスでオナニー出来たものの、さらなる怪我を負い、俺はまたオナニーどころではなくなってしまった。

それは結局、またうめき声を生むことになる。

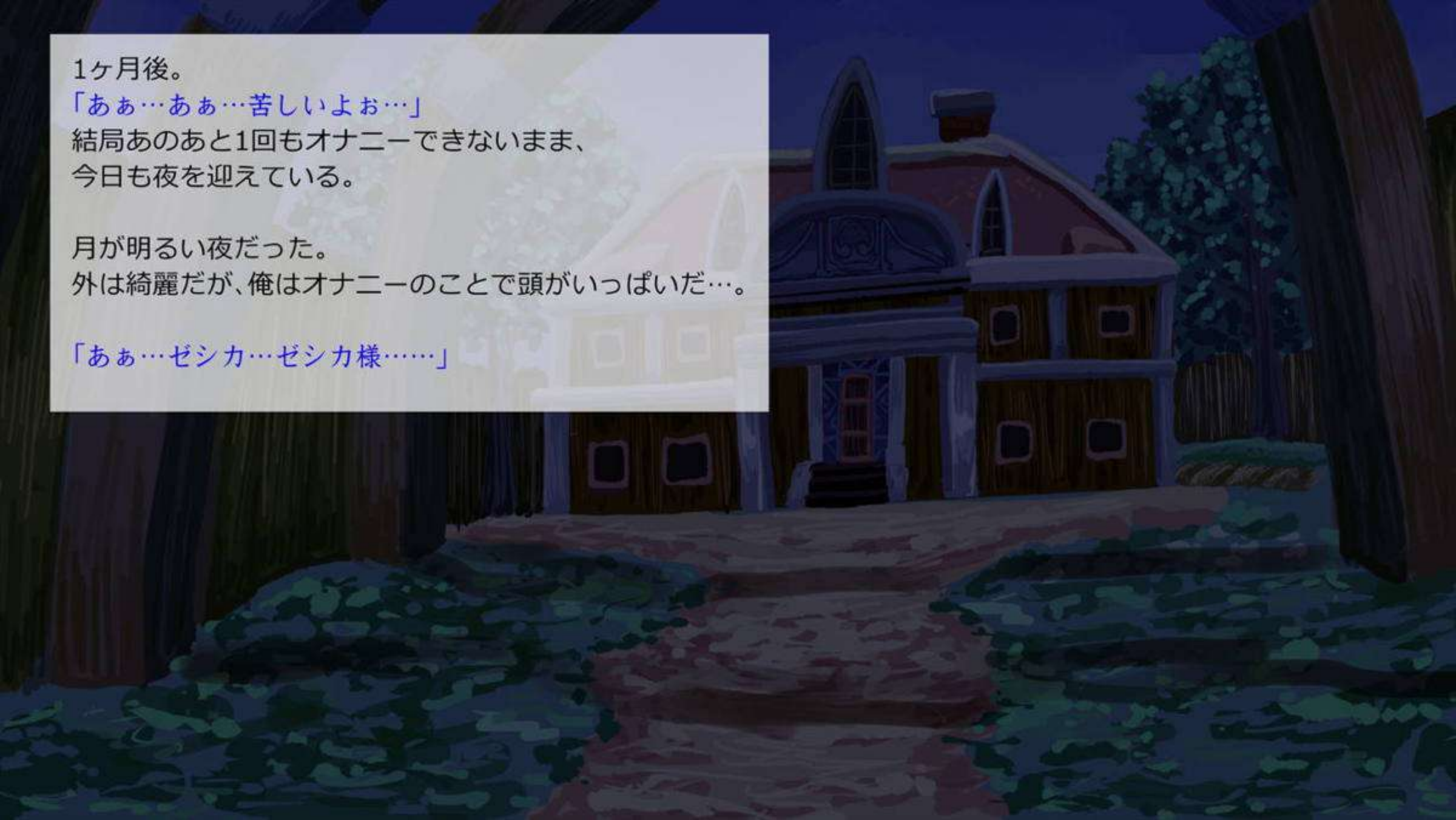
「ああ…オナニーしたい…苦しい…！」

うめき声を出したくなくても悪夢は見るし、どうしようもなく性欲は溜まっていく。

「ああ…苦しい…ああ…ゼシカ様…」

「ゼシカ様…ああ…オナニー…」

またオナニー手伝ってくれえ…」



1ヶ月後。

「ああ…ああ…苦しいよお…」

結局あのあと1回もオナニーできないまま、  
今日も夜を迎えている。

月が明るい夜だった。

外は綺麗だが、俺はオナニーのことで頭がいっぱいだ…。

「ああ…ゼシカ…ゼシカ様……」

「うるっさいわね！！！！本当に！！！！  
いい加減にしなさいよ！」

ブチギレながらゼシカが部屋に入ってきた。

「…ゼシカ様…お願いします…またオナニーの手伝いを  
して欲しいです…でないと…僕はずっと  
うめき続けることになる…」

「なんであんたの性欲の解消を私が手伝うのよ！  
確かにその怪我は全部私が負わせてるけど…  
だからってなんで私が…」

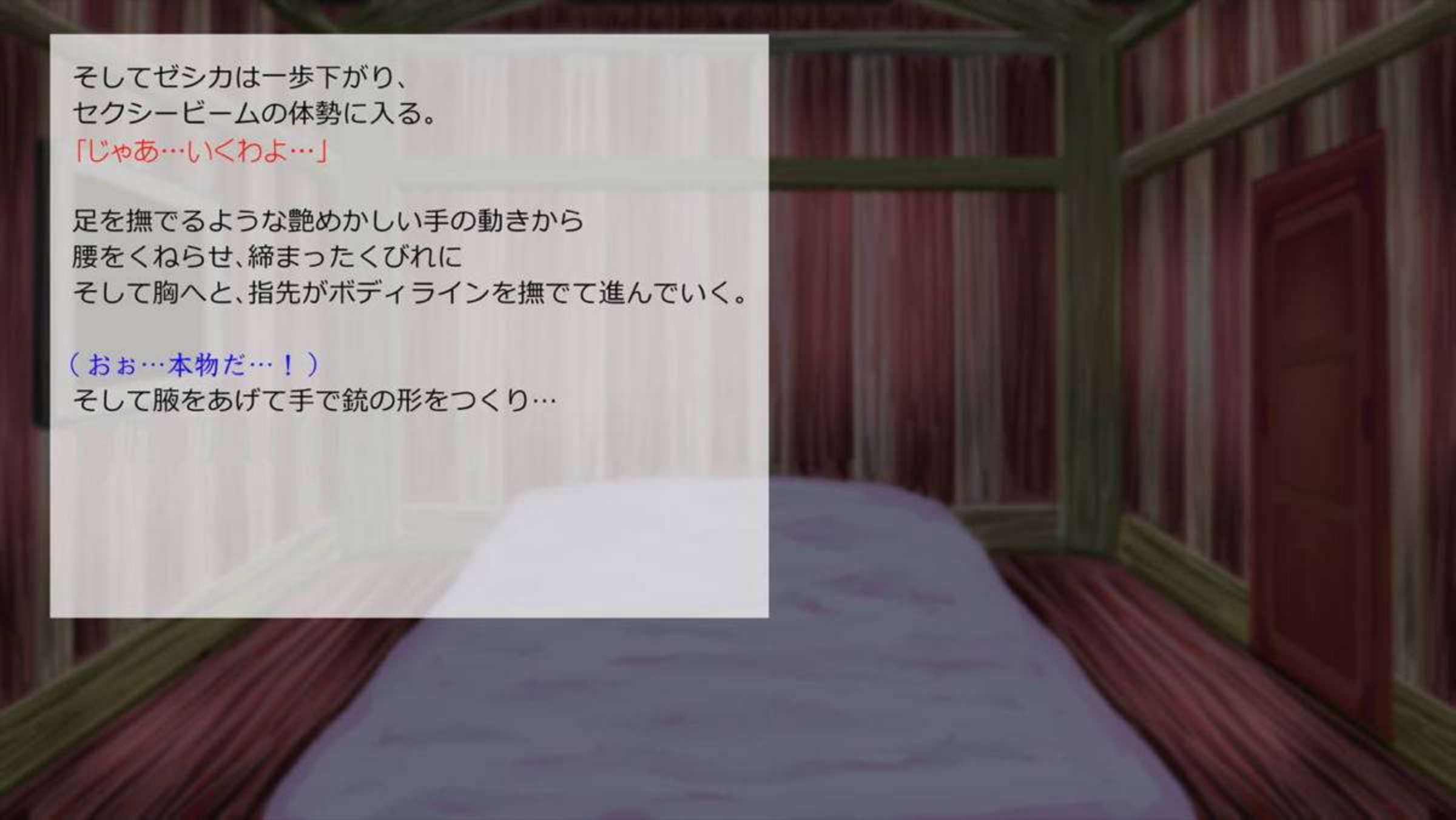


「今度はセクシービームをお願いします！  
もう投げキッスじゃ射精できません！」

「はあ？セクシービーム？  
…まあ投げキッスとそんなに変わんないけどさ…  
大体なんであんた私の技知ってるのよ…？  
まあいいわ…今度こそ本当に終わりよね…」

「はい！はい…」

「はあ……なんでこんなことに…」

A dimly lit room with a bed and a window with curtains. The room has a dark red or maroon color scheme. A bed with a white sheet and a blue blanket is visible in the foreground. A window with dark red curtains is in the background. The overall atmosphere is intimate and somewhat mysterious.

そしてゼシカは一步下がり、  
セクシービームの体勢に入る。

「じゃあ…いくわよ…」

足を撫でるような艶めかしい手の動きから  
腰をくねらせ、締まったくびれに  
そして胸へと、指先がボディラインを撫でて進んでいく。

（おお…本物だ…！）

そして腋をあげて手で銃の形をつくり…

「セクシービームっ!!」

ズン!!

ゼシカの指からハートが飛んできて…  
俺の下着に触れて爆発する。  
「おうっ! おおおお!!」

1ヶ月我慢した精液は、いよいよ暴発する。  
爆発で薄くなった生地を龟头が突き破り、  
溜まりに溜まった精液が爆ぜる。

「あぁっ…ゼシカ様…! あぁっ!!!!」

ブル  
ブル…!



「えっ」

どびゃるる!!

どびゃう!!

スポッ!

どびゃう!!

勢い良く出た精液は、  
真っ先にゼシカの方へ…

「あああつゼシカ様っ！  
気持ちいいよお！ああああ！」  
「ちよつと…ひゃあつ！」




ゼシカの胸に、精液が大量に付着する。  
なおも射精は終わらない。

「ああっ！気持ちいいっ！  
ゼシカ様のセクシービーム最高っ！！！」

「ちょっと…」

信じられない事態に、ゼシカの思考が停止する。  
ゼシカの白い胸元に黄ばんだ子種汁が糸を引いて  
ベチャベチャと落下した。



全ての射精を終えた頃…。  
ゼシカの胸には大量の精液。

「あ…ゼシカ様…違うんです  
決して狙ったわけじゃ」

「……………」

「いやああああああああっ！！！」

「はっ！はあっ…はあ！はあ…！  
最っ低…！！いやっ！

もう我慢出来ない！気持ち悪い！  
服にもびっちゃり！！」



なんとゼシカは気が動転するあまり、  
精液が掛かった服を引きちぎった。  
するとゼシカの爆乳がぼーん…！

はっ!!

ぼん!!





「! ???」

俺は一瞬目を疑ったが、その光景は事実だった。

「はやく…はやくどうにかしなきゃ…！」

ゼシカはとにかく混乱している。

ふ、ふん  
ふ、ふん…♡



「ああ…っ！ゼシカ…！！！！」

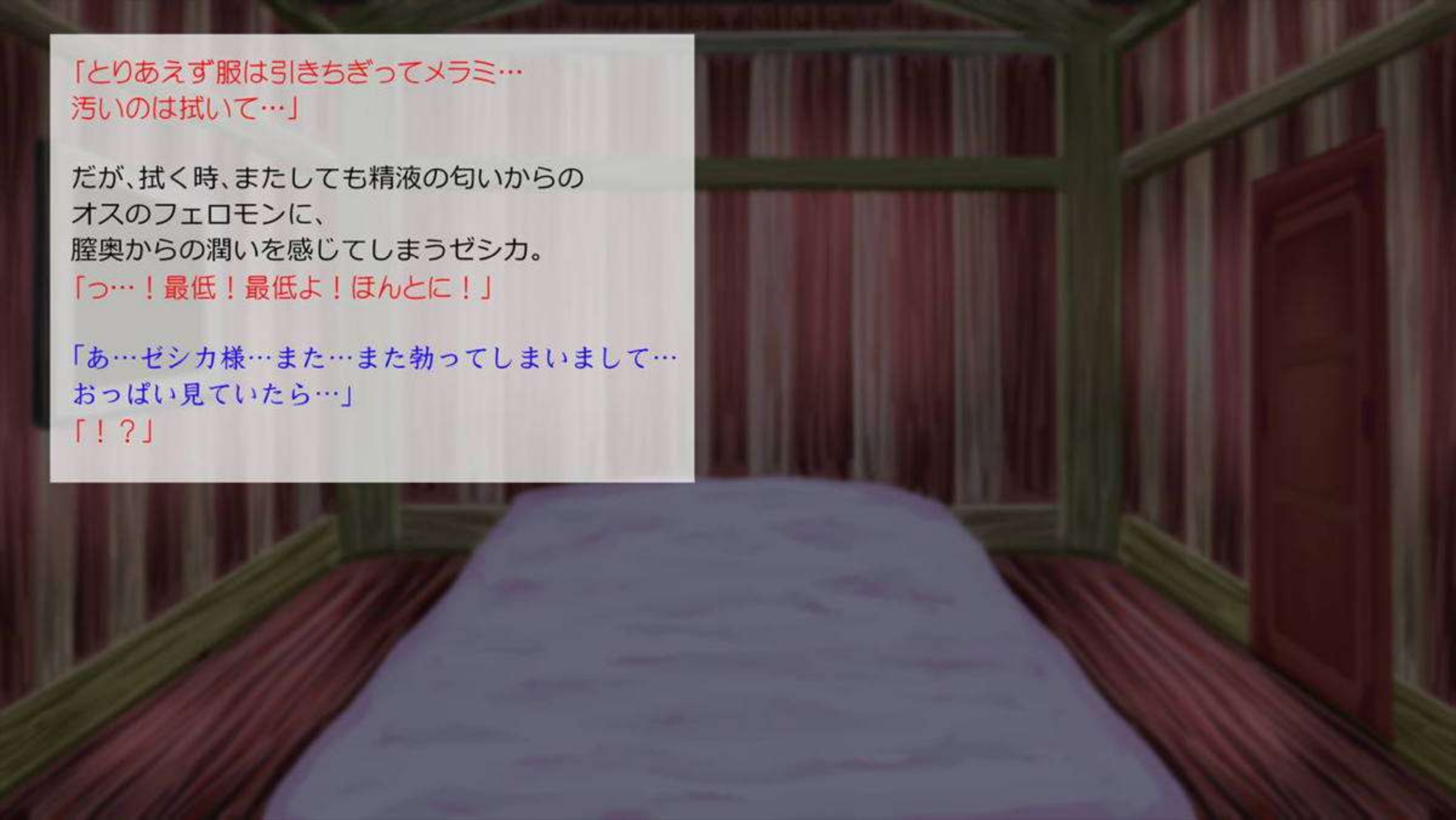
その時自分のペニスはゼシカの  
本物生おっぱいを見て、  
再び勃起してしまった。

ぷるん♡

たぷん♡

あんなに露出した服を着ているのに  
決して見れなかったゼシカの  
生おっぱいが今目の前に…！！

たぷん♡



「とりあえず服は引きちぎってメラミ…  
汚いのは拭いて…」

だが、拭く時、またしても精液の匂いからの  
オスのフェロモンに、  
膣奥からの潤いを感じてしまうゼシカ。

「っ…！最低！最低よ！ほんとに！」

「あ…ゼシカ様…また…また勃ってしまいまして…  
おっばい見ていたら…」

「!？」

「あっ！あんた！何見てんのよ！

ふざけんじゃないわよ！！

ちょっと…ホントにその汚いやつ

ムチで縛り上げるわよ！！！」

「いや…見えちゃったから…そしてとにかくまた

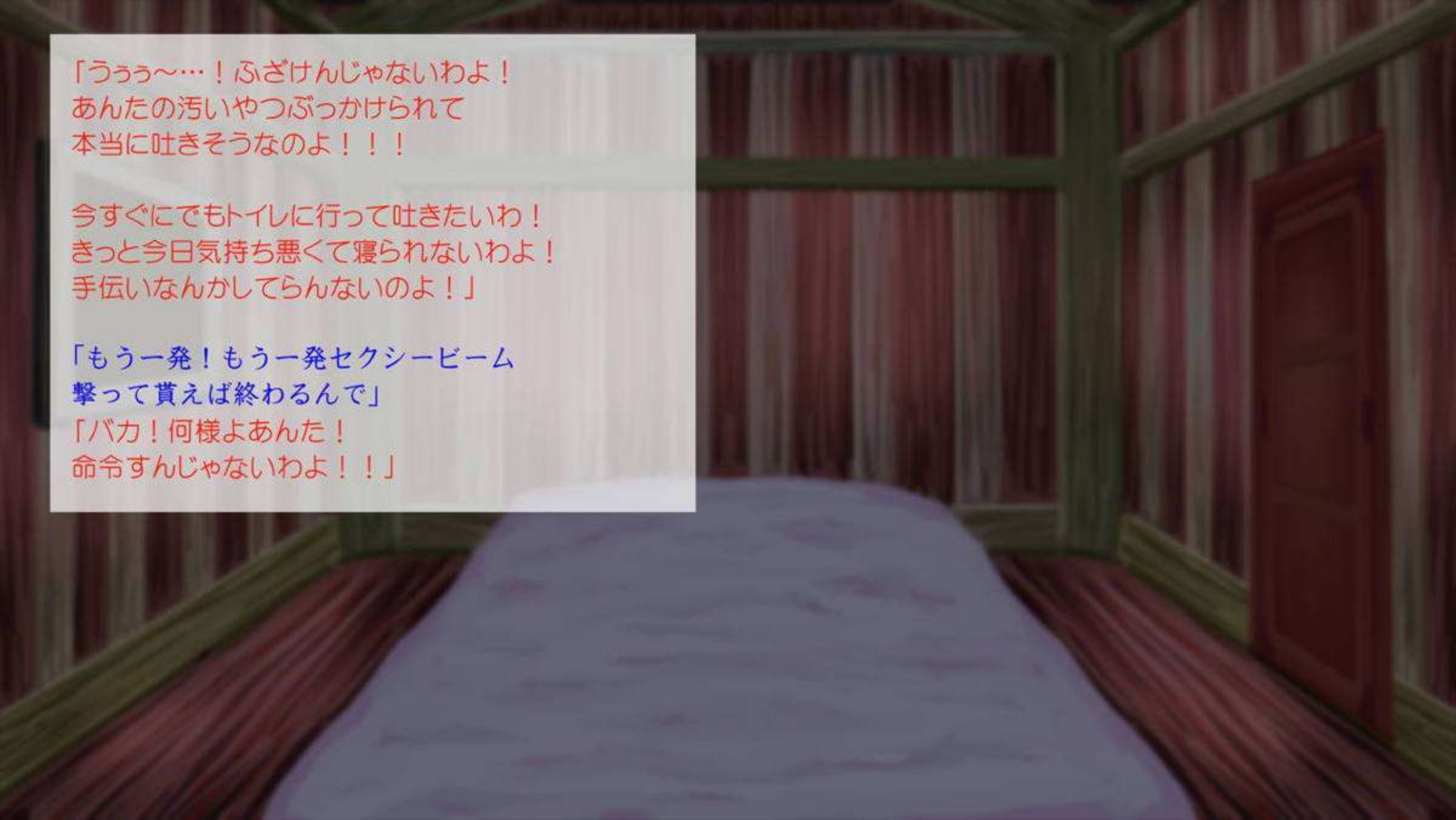
勃っちゃったから…」

「はあ！？？だから何よ！」

「抜かないと一ヶ月持たない」

「はあ！？？？さっき出したでしょ！」

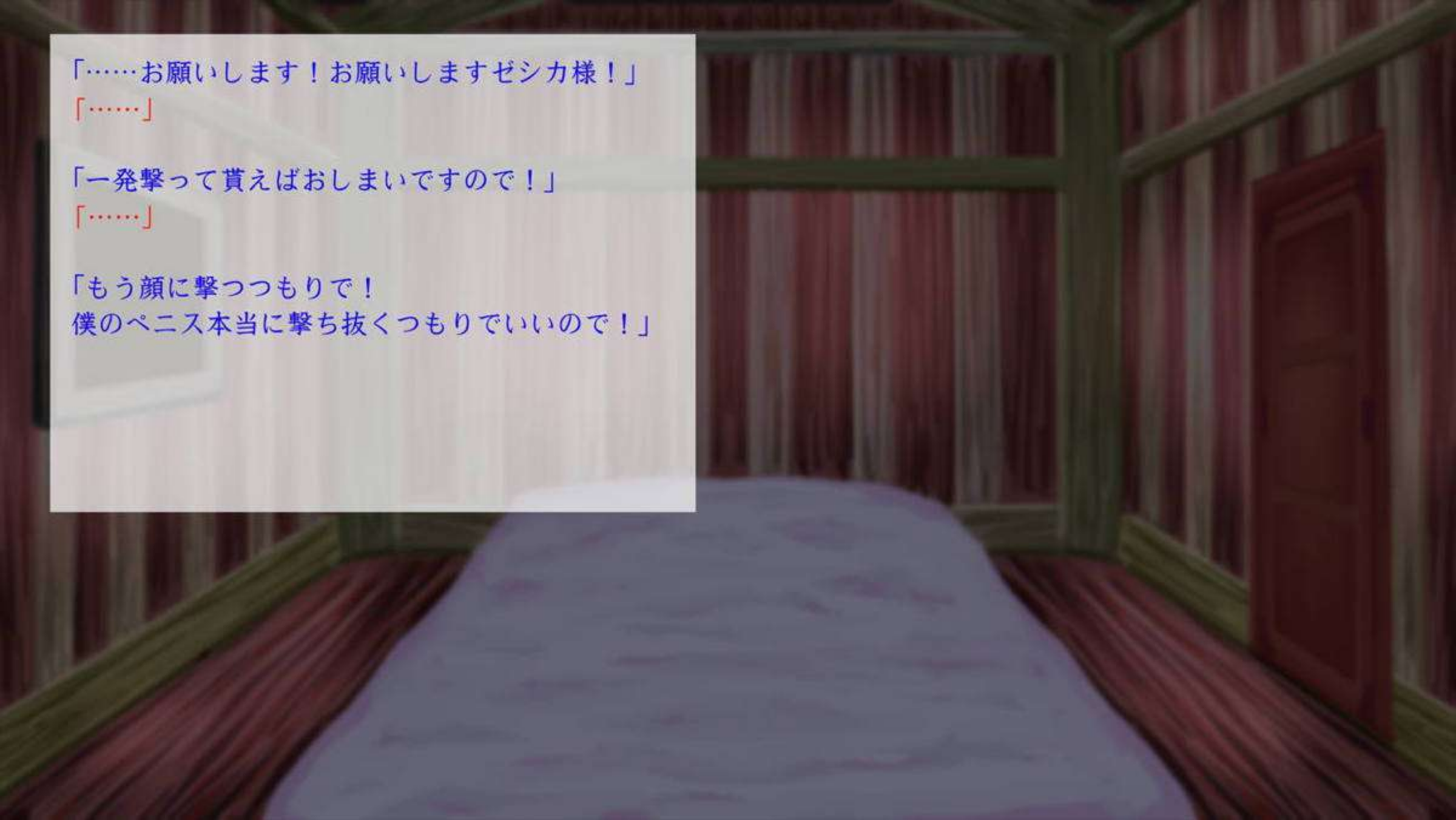
「また勃っちゃったから」

A bedroom scene with a bed in the foreground, a window with red curtains in the background, and a wooden door on the right. The room is dimly lit.

「ううう～…！ふざけんじゃないわよ！  
あんたの汚いやつぶっかけられて  
本当に吐きそうなのよ！！」

今すぐにでもトイレに行って吐きたいわ！  
きっと今日気持ち悪くて寝られないわよ！  
手伝いなんかしてらんないのよ！」

「もう一発！もう一発セクシービーム  
撃って貰えば終わるんで」  
「バカ！何様よあんた！  
命令すんじゃないわよ！！」

A dimly lit room with a bed and a window. The room has dark wood paneling and a window with red curtains. A bed with a blue blanket is in the foreground. A white text box is overlaid on the left side of the image.

「……お願いします！お願いしますゼシカ様！」

「……」

「一発撃って貰えばおしまいなのです！」

「……」

「もう顔に撃つつもりで！」

「僕のペニス本当に撃ち抜くつもりでいいのです！」

「……覚悟するのね」

「はっ…はいつ…!!!」

ゼシカは上半身を露出したまま、  
セクシービームの艶めかしい動作を始める…

そのパーフェクトボディをなぞるように指先を動かし…  
腰、くびれ、そして胸元に指が撫でられ…

美しい裸の乳房を通過して、綺麗な腋と腕をあげて  
手で銃を作り、再び…



「セクシービームっ!!!!!!」  
覇気を感じる特大のセクシービームのハートが、  
本当にこちらの顔をめがけて飛んできた。

が、ペニスはフルに勃起し、特大だったため、  
顔へ到達する前にペニスではじける…。  
今度は生のままで……！





ごぼっ!!

ぶびよ  
おおっ!!  
どぶ!!

生のペニスに、ハートが弾けて、  
強い刺激と、甘い快感が炸裂した。

「おおっ！おっ！おふううううっ！！」

その瞬間、この日すぐの二発目だというのに、  
さすがは1ヶ月溜まった精液、大量の白濁液が  
宙に舞った。

「ああああっ！あーっ！！」

「んんっ！！！？速っ…！！！？？」



ゼシカはさっきより警戒し、  
身をかわす用意ができていた。

それなのにもものすごい勢いで、  
精液がゼシカにぶっかったのである。

「あああゼシカ様っ気持ちいい！  
いっぱい出るっ！  
気持ちいいっ！おあーっ！！！」  
「う…うそでしょ…」

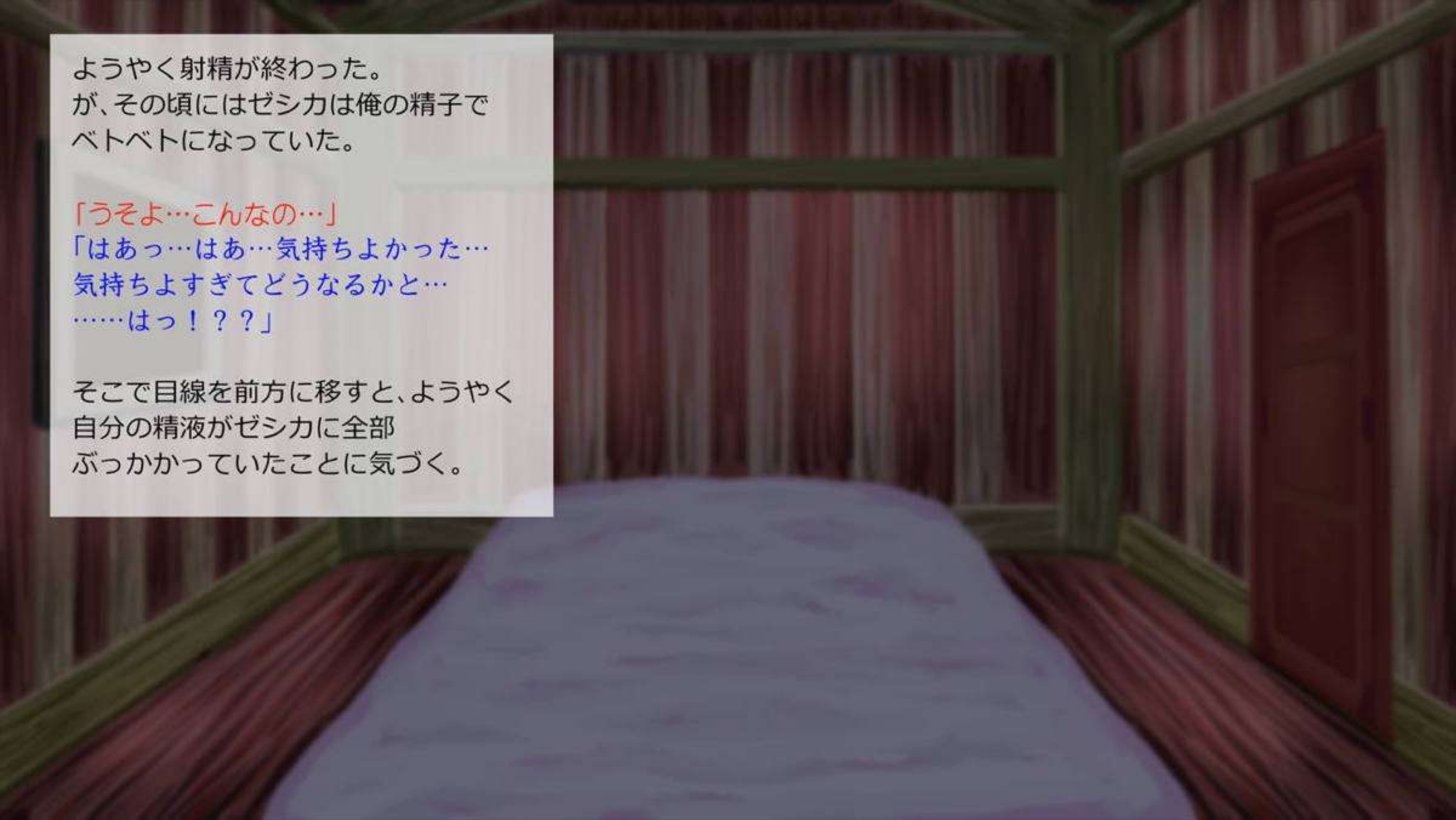
「ああっ！ゼシカ様！気持ちいい！  
セクシービームオナニー最高ですっ！」

「うそ…」  
ゼシカはショックで茫然自失である。

ビクッ!

ビュッ!

ビュッ!



ようやく射精が終わった。  
が、その頃にはゼシカは俺の精子で  
ベトベトになっていた。

「うそよ…こんなの…」

「はあっ…はあ…気持ちよかった…  
気持ちよすぎてどうなるかと…  
……はっ！??」

そこで視線を前方に移すと、ようやく  
自分の精液がゼシカに全部  
ぶっかかっていたことに気づく。

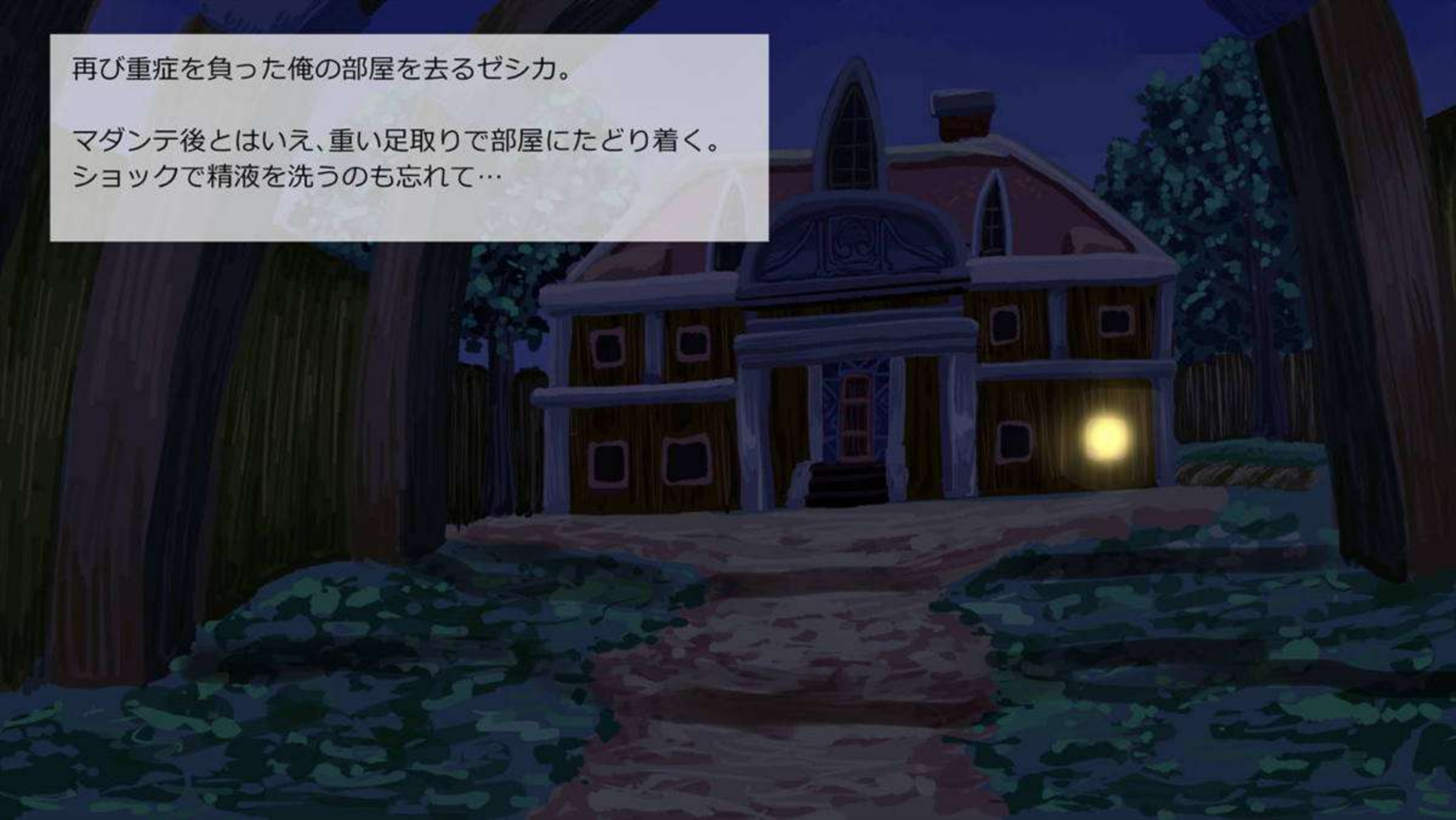
「あ…ゼシカ様…こ…これは…  
つい…ゼシカ様のことが好きすぎて…  
無意識にその…」

「言い訳なんか聞いてない…」  
「や…やばい…こんどこそ…！！」

「マダンテ！！！！」  
「ぐわーっ！！！！」

再び重症を負った俺の部屋を去るゼシカ。

マダンテ後とはいえ、重い足取りで部屋にたどり着く。  
ショックで精液を洗うのも忘れて…



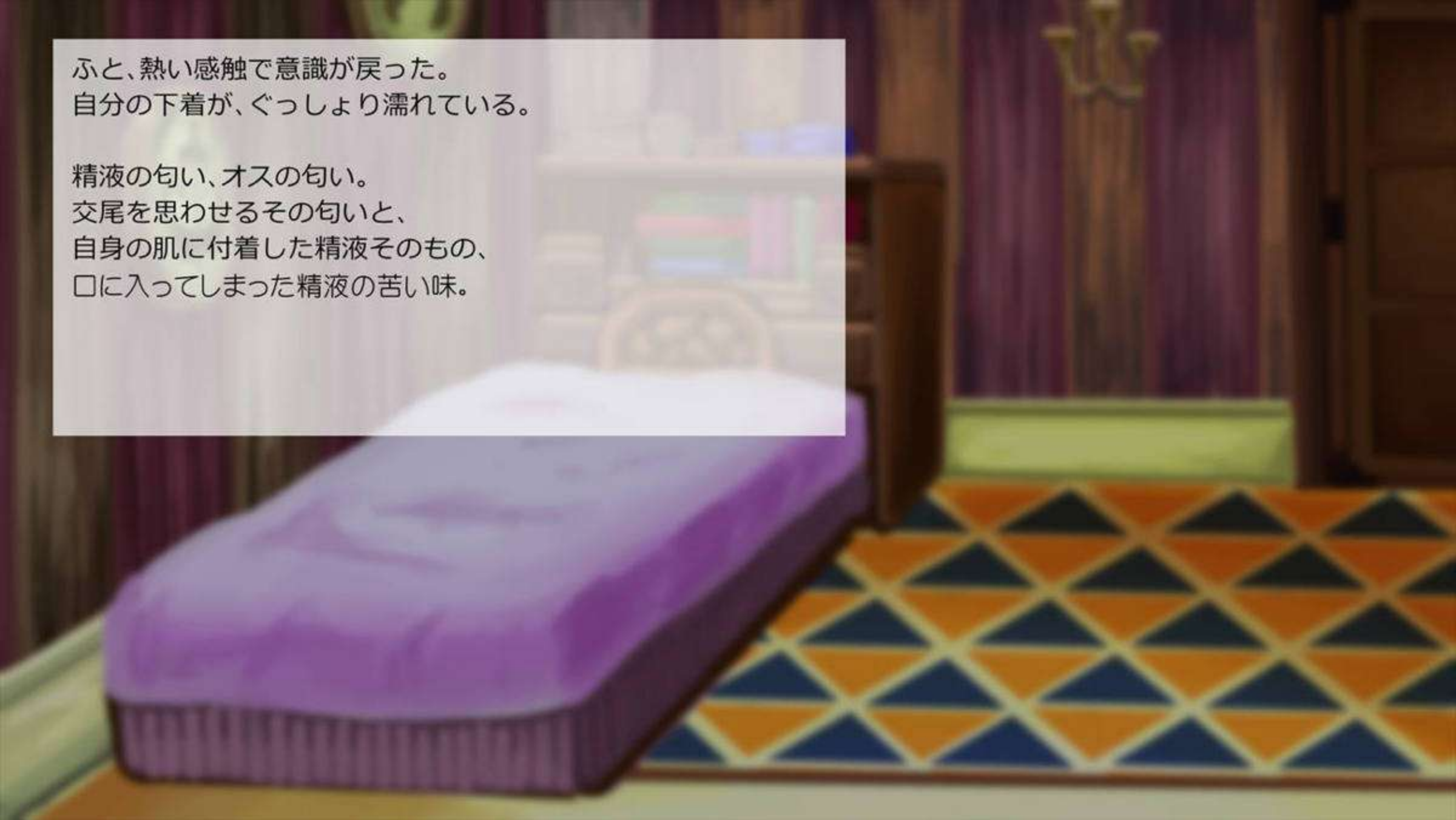
ベッドに座るゼシカ。

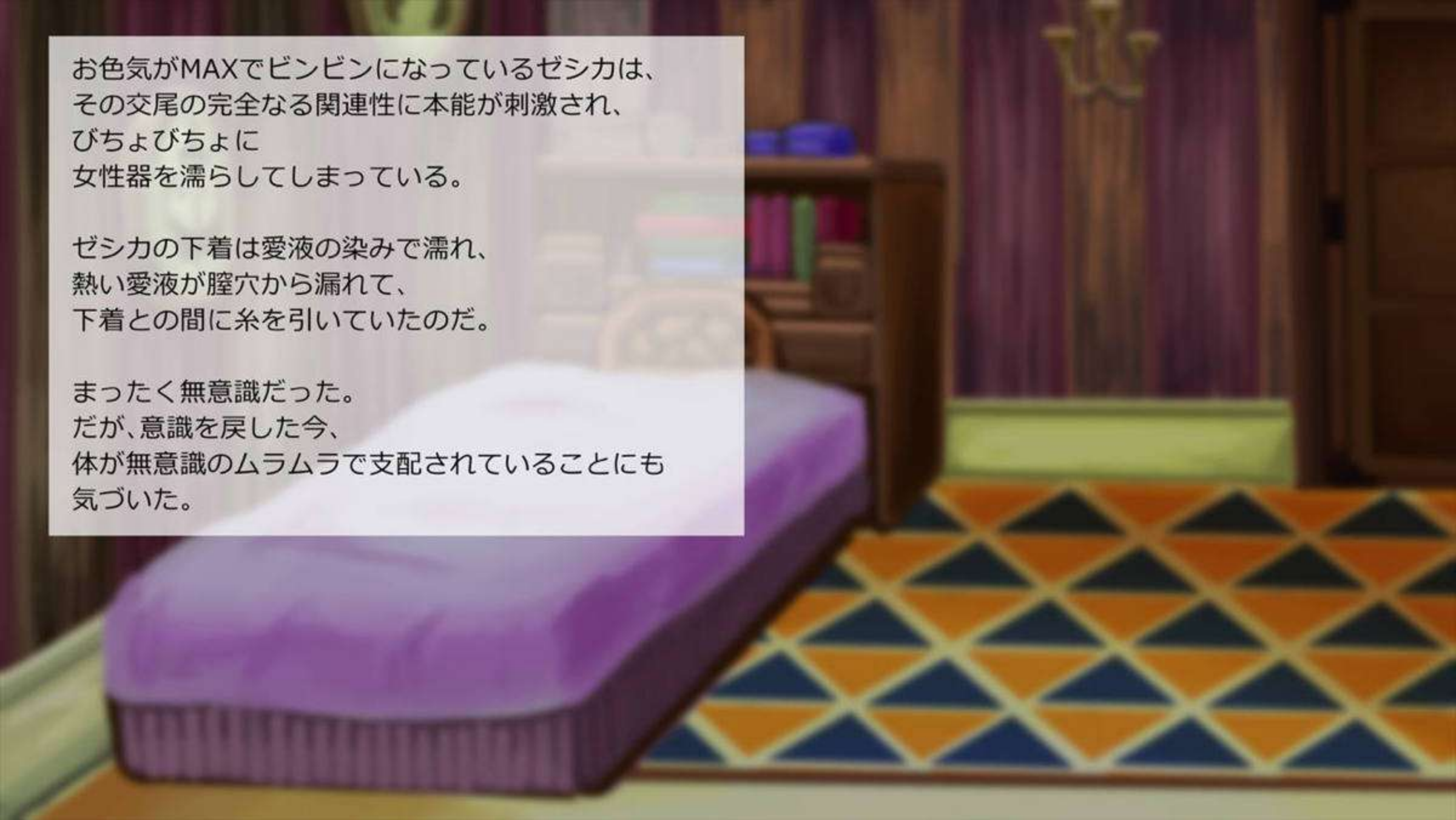
しばらく、呆然とすることしかできない…  
唇に精子がつたり、口の中に入ってしまう。  
精液は、可愛い顔や綺麗な体中を汚している…



ふと、熱い感触で意識が戻った。  
自分の下着が、ぐっしょり濡れている。

精液の匂い、オスの匂い。  
交尾を思わせるその匂いと、  
自身の肌に付着した精液そのもの、  
口に入ってしまった精液の苦い味。



A bedroom scene with a bed, a bookshelf, and a patterned rug. The bed has a purple blanket and a white pillow. The rug has a blue and orange diamond pattern. A bookshelf with books is visible in the background.

お色気がMAXでビンビンになっているゼシカは、  
その交尾の完全なる関連性に本能が刺激され、  
びちょびちょに  
女性器を濡らしてしまっている。

ゼシカの下着は愛液の染みで濡れ、  
熱い愛液が膣穴から漏れて、  
下着との間に糸を引いていたのだ。

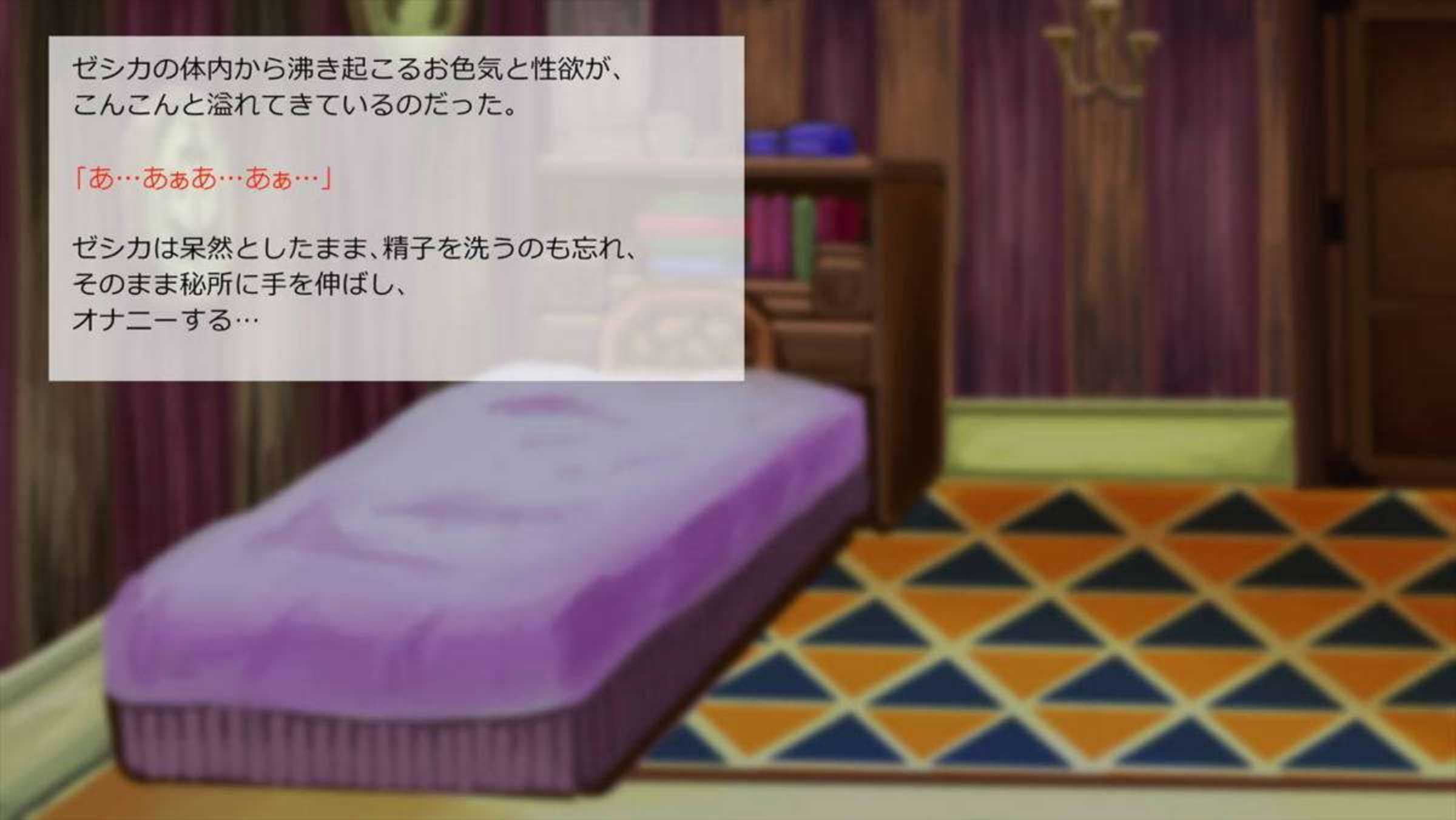
まったく無意識だった。  
だが、意識を戻した今、  
体が無意識のムラムラで支配されていることにも  
気づいた。



ゼシカの体内から沸き起こるお色気と性欲が、  
こんこんと溢れてきているのだった。

「あ…あぁあ…あぁ…」

ゼシカは呆然としたまま、精子を洗うのも忘れ、  
そのまま秘所に手を伸ばし、  
オナニーする…



「ひうっ…ひぐっ…あぁっ…気持ちいい…」

すでに愛液で溢れている陰唇から泉のように熱い汁が溢れてくる。

「あっ…こんな…なんでこんなに気持ちいいの…  
すごく…エッチな気分になる…」

ゼシカは、顔に垂れている精液も感じていた。

ほうきの柄でおしつけ、いやらしい  
まんこを愛液まみれにして  
陰核を圧して快感を得る。

「すごくエッチな匂い…エッチな感触…エッチな温度…  
エッチな…味……」

ほうきでこする動きが速くなり、そして…。

びしょっ!  
ぎゃほっ!

ぷんぷん♡

ぎゃほっ♡

グイッ♡  
グイッ♡

ぬちゅっ

ぬちゅっ

ゼシカはすぐに絶頂に達する。

「あふううっ！んうう！！」

処女の膣口から、処女膜を通過して  
熱い熱い愛液が噴出する。

びくっ♡

「んんっ！！ああっ！！気持ちいい…っ！！」

絶頂しているのに、ほうきを動かすのはやめられない。

フミッ！

「はああ♡エッチなのやめられないっ♡

エッチな所にほうきをコスるの♡ いやらしくてみっともないのに♡  
エッチな気持ちが抑えられない♡」

びくっ♡

フミッ！

ほうきの柄にはゼシカの処女愛液が熱く染みている。

絶頂を終えても、ほうきを動かし続けるゼシカ。

「はあ…はあ…すごい…すごいボーンとする…  
なんなのこれ…なんなの…あっ♡きもちいい♡」

愛液は止まらず、なおもほうきを激しく動かす。

ズリ♡ズリ♡

くちゅ♡

くちゅ♡  
ぬちゅ♡

くちゅ♡


ぬちゅ♡

「ああああ♡へえああ♡気持ちいいのお♡  
いやらしすぎるっ♡お股全開に開いて♡  
オナニーなんて下品すぎてっ♡興奮しちゃう♡」

「まだ足りない…もっとオナニーしなきゃ…」  
ゼシカはそのままオナニーを続けて  
夜を明かしてしまった。

びく

びく♡



朝、我に返ったゼシカは大急ぎで精液を拭い、  
トイレに駆け込んだ。

「おえええ〜っ！何で私あいつの  
精子なんか…おえっ」

だが自分があの男のせいで  
オナニーしたのは事実。

そしてそれがどうしようもなく  
気持ち良かったことも事実…

そのころゼシカにより怪我を追った男は、  
他の召使いにより介抱されていた。

ゼシカは怪我を負わせたことでまたしても  
母親に叱られるのだが、昨日のことで溢れかえった  
ゼシカのお色気はさらに限界を突破し、

絶えず女性器が濡れているような状態になってしまっていた。



それからというもの、ゼシカは毎日、  
暇さえ見つければオナニーを  
するようになってしまった。

机のかどや掃除のほうきの柄、  
階段の手すりなどでも…





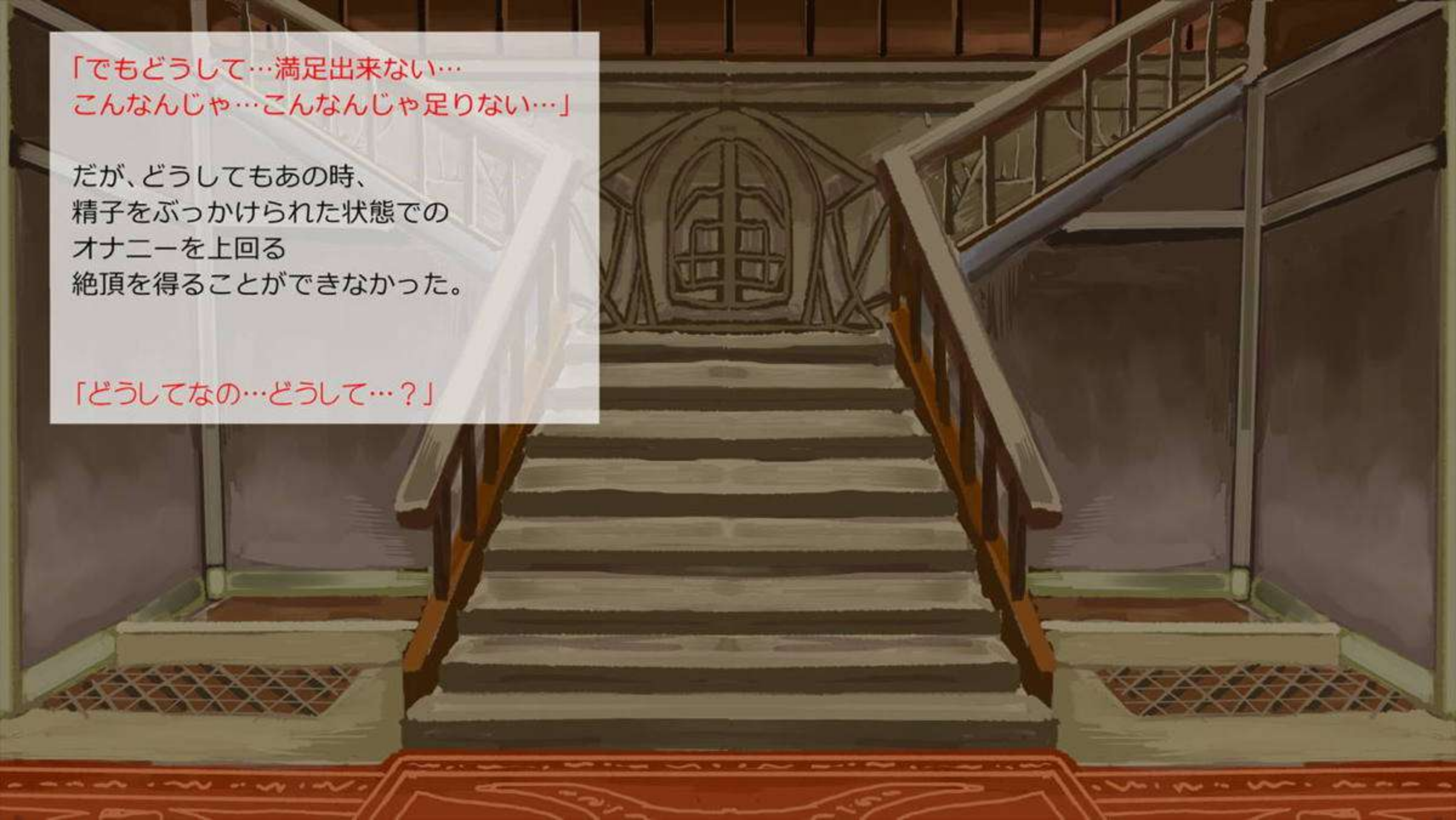
「あああつ…！あ…！  
気持ちいい 気持ちいい！

オナニーするのっ…やめられない…！  
はああ…はうううっ！！」



「こんなはしたない事もお…  
がとか手すりとかでも…！  
オナニー気持ちいいいい…！  
あああん…あはああうっ！！」





「でもどうしても…満足出来ない…  
こんなんじゃ…こんなんじゃ足りない…」

だが、どうしてもあの時、  
精子をぶっかけられた状態での  
オナニーを上回る  
絶頂を得ることができなかった。

「どうしてなの…どうして…？」

あれから1ヶ月。

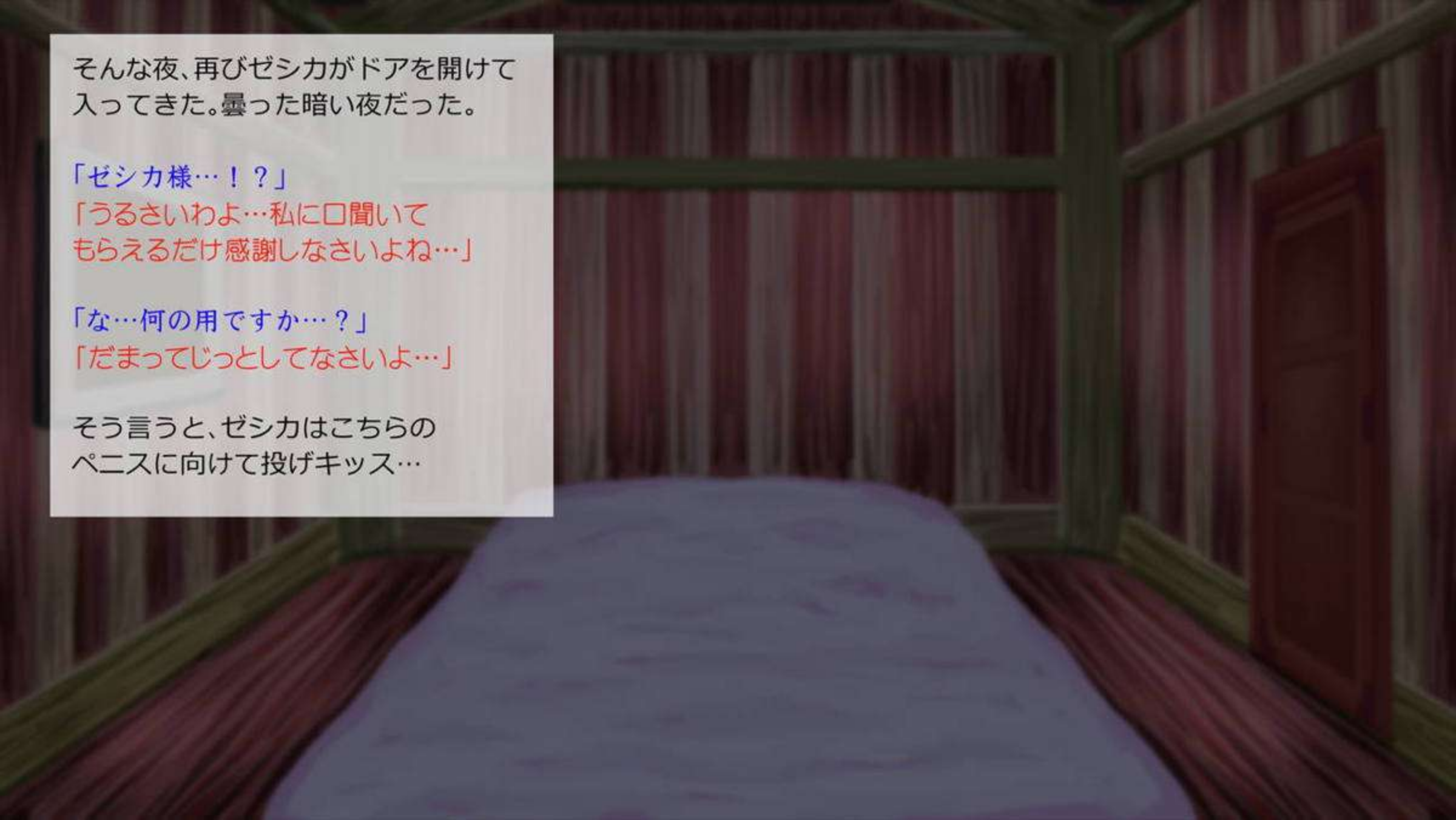
少しずつ回復に向かっているものの、  
まだ手も足も動かさない。

案の定ペニスだけは回復して、  
オナ禁に耐えているのだが。

あれからまた1ヶ月も射精していないのか。  
ゼシカのことを考えるだけで勃起するのだが、  
射精だけは自力でできない。

さすがに1ヶ月も射精していないのは  
本当にきついのだが…





そんな夜、再びゼシカがドアを開けて  
入ってきた。曇った暗い夜だった。

「ゼシカ様…！？」

「うるさいわよ…私に口聞いて  
もらえるだけ感謝しなさいよね…」

「な…何の用ですか…？」

「だまってじっとしてなさいよ…」

そう言うと、ゼシカはこちらの  
ペニスに向けて投げキッス…

投げキッスが弾ける。

「おふうううっ!!」

突然のことに、ゼシカが部屋に入ってきた時点で勃起していた自分は射精しそうになったが、とどまった。

いきなりゼシカが投げキッスするなんて何かおかしい。



「！？なんで出ないの？」

「ゼ…ゼシカ様突然何を…」

「じゃあ仕方ないわ…」

ゼシカは腰をくねらせ、指を銃の形へ…

「セクシービーム！」



「ううううっ!??」  
こちらも勃起でギンギンになっていた  
ペニスに命中。  
が、ゼシカの意図がわからない以上、  
安易に射精するのは勿体無い…

ものすごく気持ちよかったが  
ギリギリで射精をこらえた。



「セクシービームでも駄目!？」

「ゼ…ゼシカ様…一体…!？」

「…これだけは…嫌だったんだけど…」

ゼシカは服を脱ぐ。  
「!????」  
俺の勃起が硬くなる。

「前はこれで出したもんね…  
オーケーよね…」

ぷるんっ♡

ゼシカの美しい爆乳を見て、  
俺はそれだけで射精しそうになった。  
そしてゼシカはその状態でまた…



「セクシービーム！」

「あああああああっ！ぐっ…！  
く…！おおおおおっ…！」

ものすごい快感が押し寄せて、  
今にも射精しそうだった。  
しかしとどまった…！

「おぐっ…ぐ…おおお…  
あああああ…う…！」

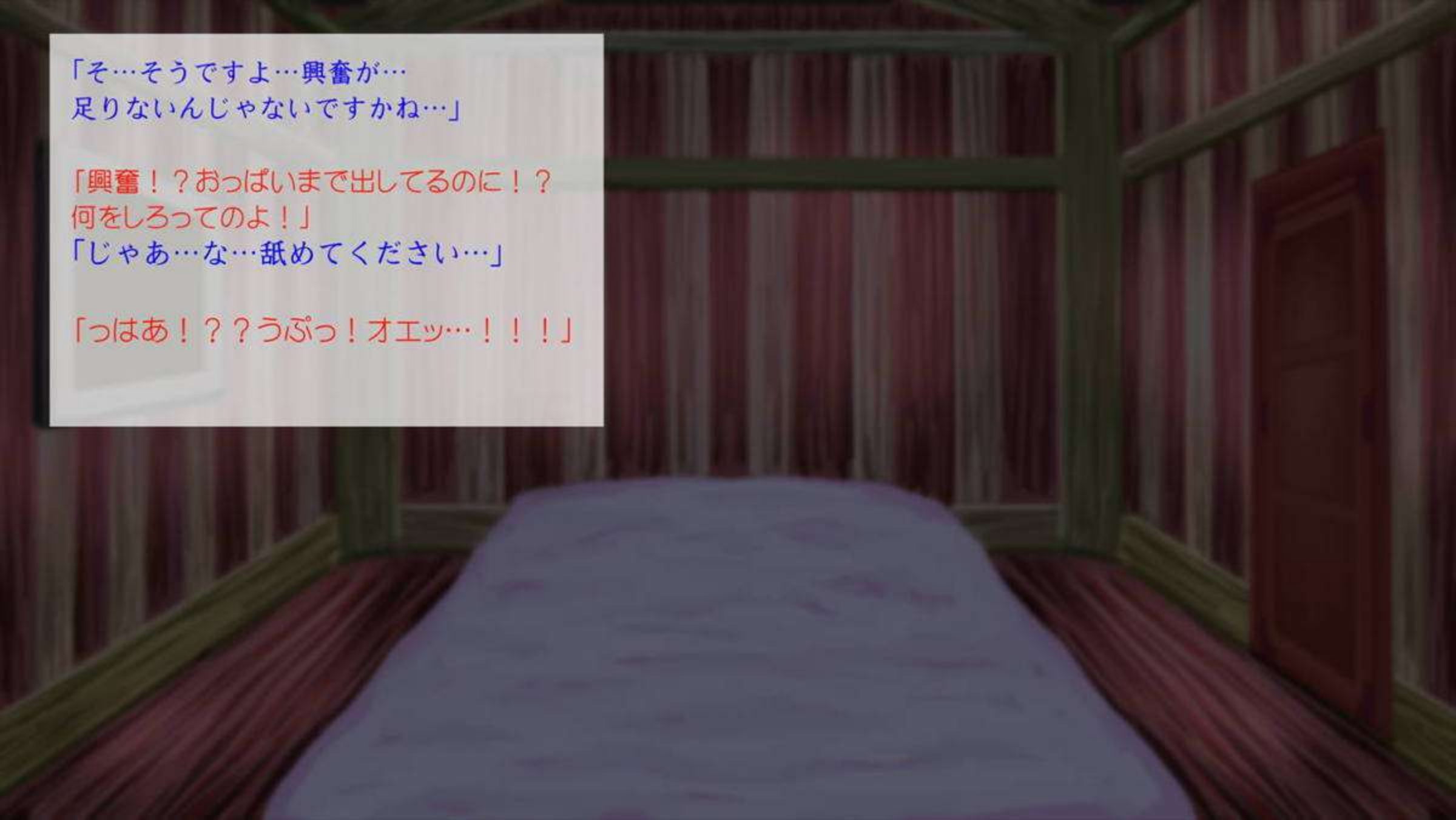


「こっ これでも駄目なの!？」

俺は察した。ここで我慢すれば、  
一段ステップを進めるのではないかと。

何故ゼシカ様が射精を積極的に  
求めているのかは謎だけど。

「はあっ はあっ はあっゼシカ様…!  
気持ちいいです…  
気持ちいいけど…何故か出ないな…」



「そ…そうですよ…興奮が…  
足りないんじゃないですかね…」

「興奮！？おっぱいまで出してるのに！？  
何をしろってのよ！」

「じゃあ…な…舐めてください…」

「っはあ！？？うぷっ！オエツ…！！！」

「……………」

「あぶなく吐くところだったわ…  
ごめん…それは無理。

どうしてもラグサットを  
思い出しちゃって無理。  
あいつの舐めてるみたいになっちゃう」

「…じゃあ触ってしごいてほしいんですが…」  
「うぶっ…！！オエっ…！！！！」

「……………」

「ごめん…それ…もっと無理かも…  
ラグサットのを触ってるみたいで」

「…じ…じゃあ僕とキスしてくれれば…」

「…うぶっ！！うぐっ！！ぶ…！！…」

「……………」

「ごめん…それも同じ理由で無理だわ…ある種一番きついかも…」

「……………」

「じゃあどうすればいいのよ！  
どうすれば射精するの！？」

(この際、ゼシカが何故射精を求めているのかは聞かないようにしよう…)

「…セックス…ですかね…」

「セツ…！」

ゼシカは赤面し、トイレへ。

「…危なく吐くところだったわ…  
あんたいい加減にしなさいよ！  
ハードル最大に上がってんじゃないのよ！！！」

他の方法で出しなさいよ！  
さっさと興奮してさ！さっさと！  
他の方法はどうなの！」

「じゃあぱふぱふはどうですか…？」  
「ぱっ…！！！！」

ゼシカは更に赤面する。  
「今までモンスターとかには  
やってきたんですよね？」  
「そっ…そうだけど！て…なんで知ってるのよ！  
人に聞いたわけ？」

「僕の扱いなんてモンスターみたいなもんですし  
ばふばふする対象になるんじゃない  
ないんですかね？」

「そういう問題じゃないでしょ！！！」  
「ゼシカ様の美しいおっぱいも……  
オナニーも…下の方だって  
見てしまったのですから…  
ばふばふくらい余裕ではないでしょうか？」

「あれはあんたが覗いたんでしょ！  
それは関係ない！」  
「ばふばふは技ですよ？  
技ですよ技！エッチな行為じゃないんですよ！」

「え…そ…そうなのかしら…」



「ああ～ばふばふされると思ったら  
射精しそうになってきました…あ～…  
ばふばふされたらイっちゃいそうです～…」

「いやよ…いやなんだってば…！」

だがここまでのやりとりで、  
ゼシカは強烈な嫌悪感と同時に、  
性器がビショビショに濡れてしまっていた。

近づいたら愛液の匂いがしてしまうのは  
確実なくらい、下着に水たまりができています。

(く…くやしいけどこのムラムラを  
解消できるのはこいつだけ…

舐めるのも触るのも嫌だけど  
おっぱいならまだマシなんじゃないかしら…？

少なくともあの汚いモノに触るよりはましよね…  
顔も嫌だけど ちんこよりは…


魔物には何百回もしてるし…  
なんなら海賊とかの人間にもしてるし…)

A dimly lit room with a bed in the foreground and a door on the right. The room has dark wood paneling and a window with curtains in the background.

「い…一回だけよ…」

「えっ!??」

「一回だけ…なら…いいわ…よくないけど…  
絶対射精するのよ…いいわね…」



ゼシカを追い詰めたものの、  
まさか本当にしてくれるとは思わなかった。

「はあ…はあ…ゼシカ様…！」

「はあ…こいつは魔物…こいつは魔物…  
人間じゃない…人間じゃない…！」

「はあ…はあ…ゼシカ様！！」

「いくわよ…」

しっとりとしたゼシカ様の肌の感触が俺の肌に…！

「はあ あったかい！ゼシカ様！  
射精しそう！もう射精しそう！」

さらに、重みとやわらかさも感じる天国！！  
「だったら早く出さないよな…本気で  
最悪なんだから…」

「いくわよ…ぱふぱふ…ぱふぱふ…」  
「おおおおっ！」

男はきもちがよさそうだ…

「ぱふぱふ…ぱふぱふ…」

「ああ出るっ！出るゼシカ様っ！もう出ちゃう！」

(なにこれ…嫌なのに…顔にあたる感触が気持ちよくて…  
それに…乳首が…ちょっと当たっちゃって…  
最高に嫌なのに自分で触ると全然違くて…)

ゼシカの爆乳が顔に当たる面積を増やしたり減らしたり…  
上下したり左右したり…なによりその量感！暖かさ！  
やわらかさ！これは行動不能になる！

「ぱふぱふ…ぱふぱふ…」  
(ゼシカの乳首も当たってる！乳首舐めたい！触りたい！)  
(吐きたいくらい嫌なのに…！んっ…感じちゃってるし…)

すごい濡れてる…気持ちよくなってる…私…！  
どんだけはしたない体なの…私…)

「だめっ…乳首が当たる度に…体がビリビリきて…！！！」  
「あああゼシカ様我慢出来ないっ！！んんっ！」

ビーン  
ビーン!

い  
い♡

い♡  
い♡

もぞ!  
もぞ!

じわ  
じわ

おんんん!

俺はぱふぱふの合間に首を回して  
ゼシカの乳首を吸って舐めた。

「あふうちうんっ！」

あは  
じゅるっ!

あ♡  
あ♡  
あ♡

やさ  
やし

しゅる  
しゅる

しゅる  
しゅる

「おおっ! おっ! べろっ! べろべろべろっ!  
うまっ! そして柔らかいのにコリコリしてて  
甘いっ!! おおおお!!」

「いやあああっ…気持ちいいっ!??  
こんなの…だめっ…あああっ!」

「もう出そうですううう! ゼシカ様! 出ますよおおお!  
俺はぱふぱふと乳首で、ついに…」

「おおっ！おおおおっ！」  
「はうううっ！はうっ！」  
あうううう！！

ゼシカもその場でうつむいたまま絶頂し、  
下着から愛液が  
漏れ噴き出すほど、絶頂汁を噴出している。

「ああー！ゼシカ様っ！気持ちいいっ！気持ちですううう！  
最高ですよゼシカ様のばふばふ！おっぱいいいいいい！」

「ああああっ！いやっ…いやあ…こんなやつと  
一緒に気持ちよくなってるなんて…！」

ドク！！  
ドク！！  
ドク！！

グシヤッ♡



なおも続く射精。1ヶ月分の精液で  
全身がベチャベチャに。  
「おふっ！おふ！ゼシカ様の体に！」

「んあつ…んあ…！あうっ…  
うっ…はあ…はあ…」

「はあ…気持ちよかったああ…  
最高でしたゼシカ様…」

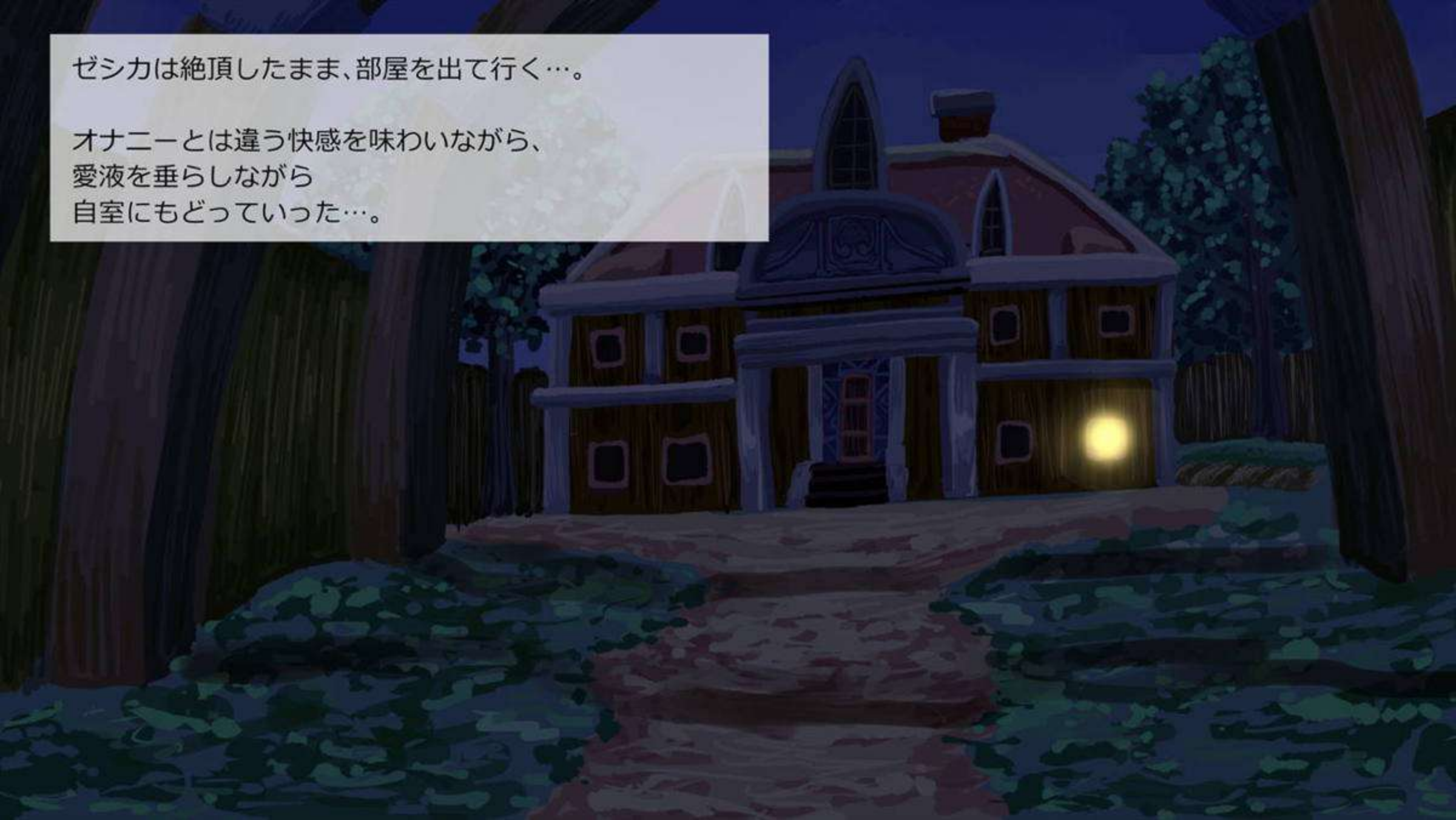
「はあ…はあ…最低…最低よ…  
あんたにはふはふしたなんて…」

だが、男が射精を終えてもゼシカは絶頂していた。  
事実、まるで放尿しているかのように、  
絶えず絶頂汁が膣奥から漏れ続けているのだった。

「うっ…んんっ…あうっ…！」

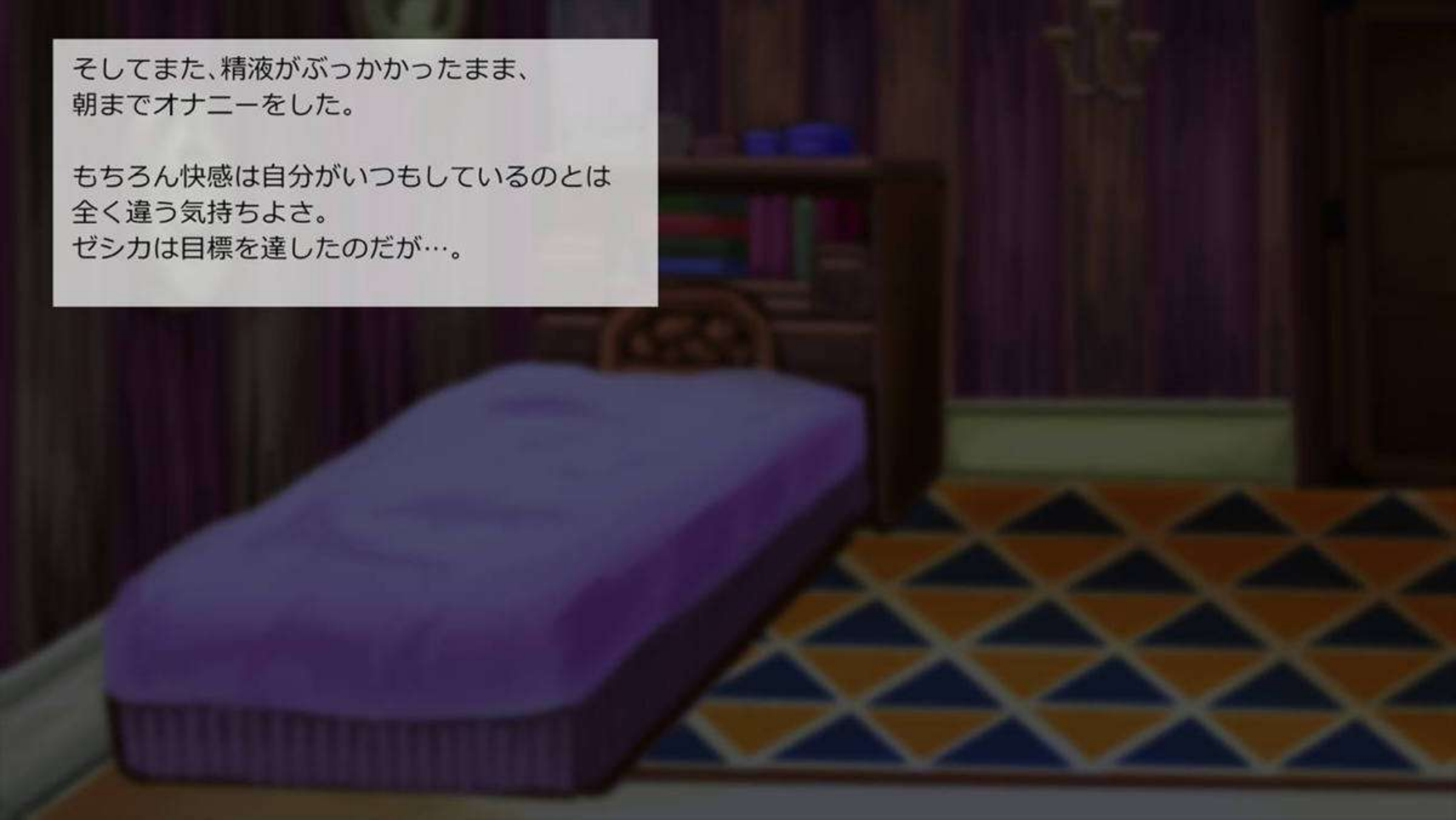
ゼシカは絶頂したまま、部屋を出て行く…。

オナニーとは違う快感を味わいながら、  
愛液を垂らしながら  
自室にもどっていった…。



そしてまた、精液がぶっかかったまま、  
朝までオナニーをした。

もちろん快感は自分がいつもしているのとは  
全く違う気持ちよさ。  
ゼシカは目標を達したのだが…。



ゼシカは乳首を舐められたときの  
衝撃が忘れられない。

いつも指でしているオナニーも、  
舌でももらったらどんな感触なのだろう。

そんなことを考えたら嫌悪感に  
震えながらも興奮してしょうがなかった。

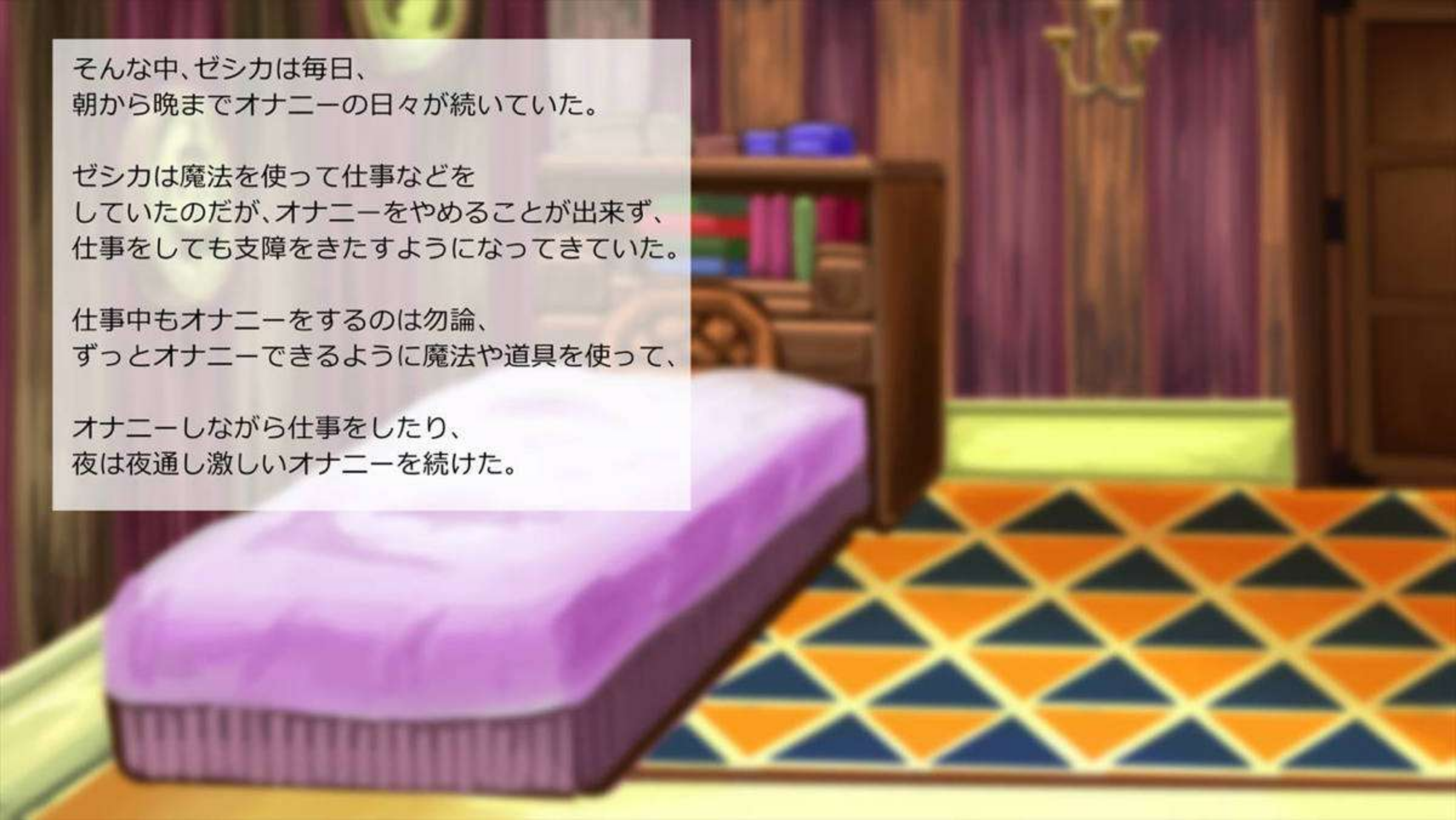


更に1ヶ月が経った。

いよいよ俺の体も回復に向かっていっている。

あと1ヶ月もすればだいぶ動けるようにはなるという。



A bedroom scene with a bed, bookshelf, and patterned rug. The bed has a purple blanket and a white pillow. The bookshelf is filled with books. The rug has a blue and orange diamond pattern. The room is lit with warm, yellow light.

そんな中、ゼシカは毎日、  
朝から晩までオナニーの日々が続いていた。

ゼシカは魔法を使って仕事などを  
していたのだが、オナニーをやめることが出来ず、  
仕事をしていても支障をきたすようになってきていた。

仕事中でもオナニーをするのは勿論、  
ずっとオナニーできるように魔法や道具を使って、

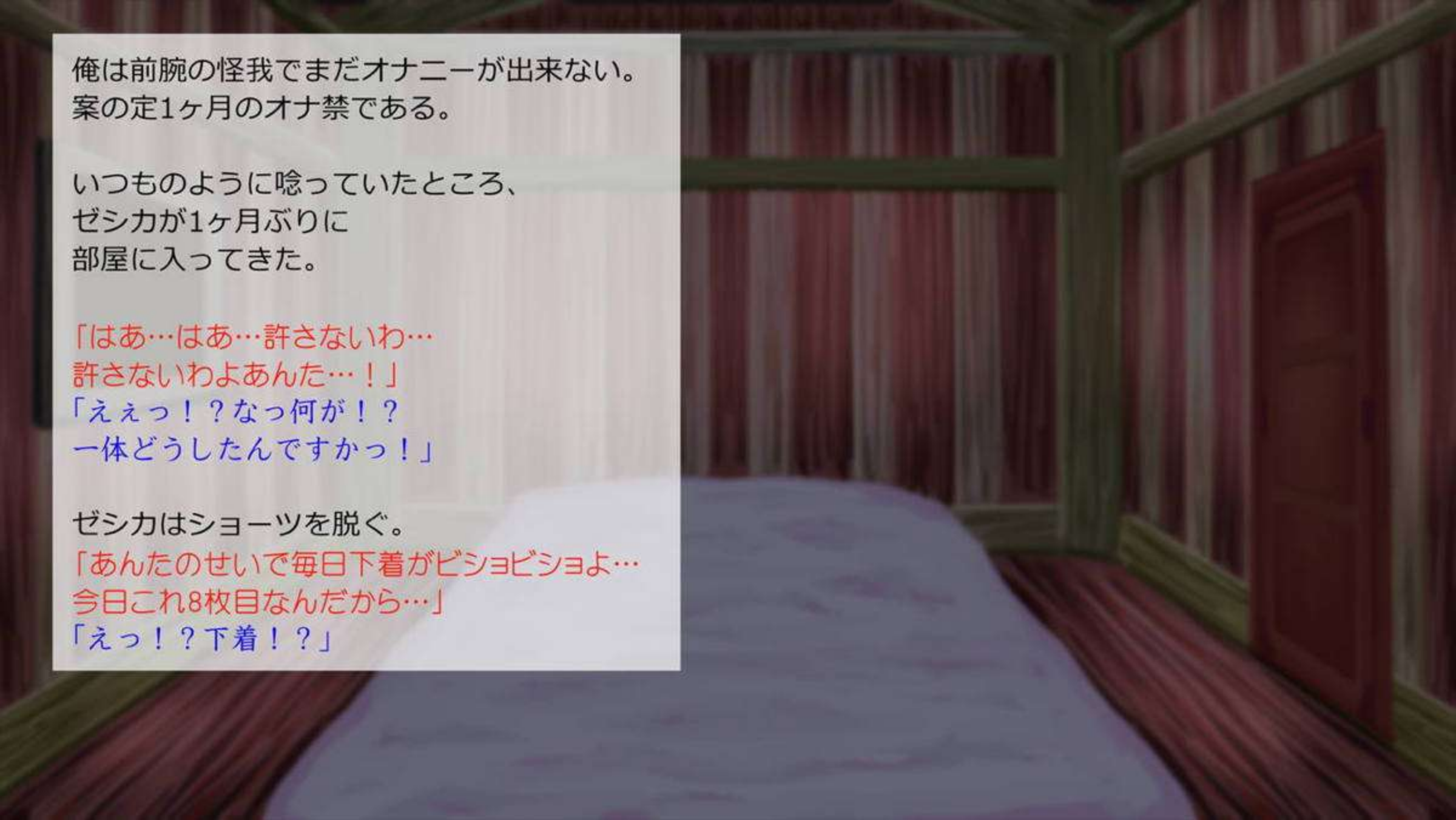
オナニーしながら仕事をしたり、  
夜は夜通し激しいオナニーを続けた。

いつかは静まるかに思えた性欲。  
だが、それは収まるどころを知らなかった。

ゼシカは困り果てた。オナニーをしながら。  
ベッドは愛液でべちょべちょである。

「私がお色気がマックスでエッチに  
なっただけじゃないわ…  
あいつのせいよ…あいつが来て…私を覗いて…

ちんこなんか立たせて…  
私にいろんなことをさせて…  
こんなになってるのはあいつのせいよ…」



俺は前腕の怪我でまだオナニーが出来ない。  
案の定1ヶ月のオナ禁である。

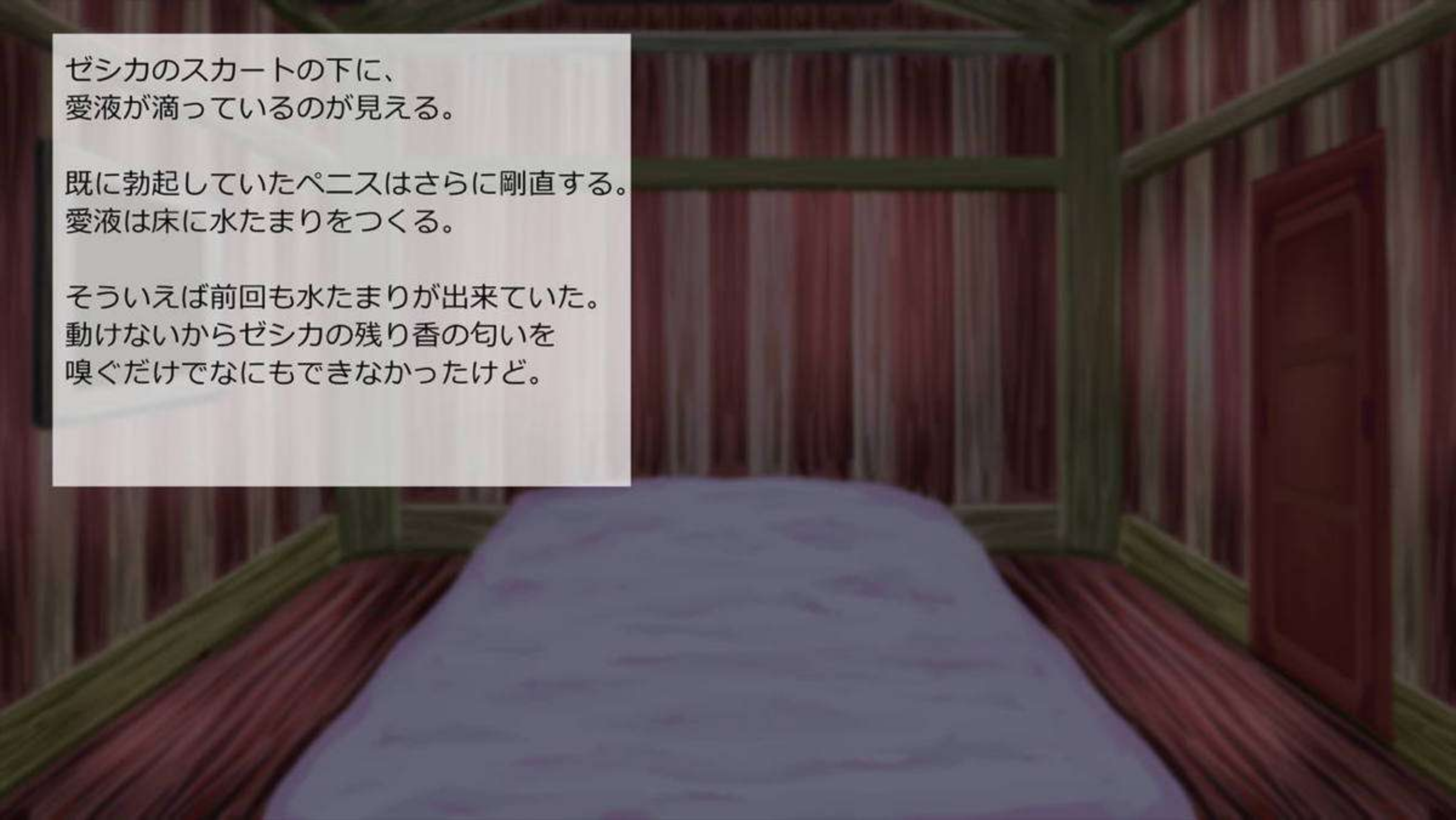
いつものように唸っていたところ、  
ゼシカが1ヶ月ぶりに  
部屋に入ってきた。

「はあ…はあ…許さないわ…  
許さないわよあんた…！」  
「ええっ！？なっ何が！？  
一体どうしたんですかっ！」

ゼシカはショーツを脱ぐ。

「あんたのせいで毎日下着がビショビショよ…  
今日これ8枚目なんだから…」  
「えっ！？下着！？」



A dimly lit room, likely a bedroom. In the foreground, a bed with a light-colored, textured blanket is visible. The background features a window with dark, heavy curtains. The walls are a dark, muted color, and a door is partially visible on the right side. The overall atmosphere is dark and somewhat somber.

ゼシカのスカートの下に、  
愛液が滴っているのが見える。

既に勃起していたペニスはさらに剛直する。  
愛液は床に水たまりをつくる。

そういえば前回も水たまりが出来ていた。  
動けないからゼシカの残り香の匂いを  
嗅ぐだけでなにもできなかったけど。

「あんたがこの屋敷にまた来て  
覗きをしたりしなかったら  
こんなことにはならなかったのよ！」

そしたらどんどん変なことばかり！  
エッチな気持ちが始まらないのよ！  
好きでもないのにどうしてくれんのよ！」

「どうしてくれると言われても…」  
「どうにかしなさいよ！このまんこの  
ビシャビシャどうにかしなさいよっ！」

「まっ…！」  
ゼシカの口から下品な言葉が…！  
そこまで必死なのか…！

と言うと、ゼシカは俺のベッドに乗ってきた。

「えっ！？ゼシカ…様…！？」

「どうしてくれるのよこれ…

どうにかしてみなさいよ！」

ゼシカは股を開き、俺の視界の上へ！

「ぜっ…！！！」

射精しそうなのをこらえる。

「ほら！自分がしたことを実感しなさいよ！！」

ゼシカは、そのまま大きい尻を俺の顔へ！！！！

「うおおおおおおおおっ！????」

なんとゼシカのまんこが  
俺の顔にべっちゃりくっついた。

「どうかしなさいよ！あんた！これ！  
べちゃべちゃじゃないのよ！  
あんたがこうしたのよ！！！」  
「むぐっ！うううっ！ゼシカ様っ…むぐ！！」

酸っぱくて甘い愛液の味を感じる。  
(重みと温かさ。目の前でヒクヒクうごく肛門…！！！！)

今の俺のペニスは、何かが当たろうものなら  
それだけで射精しそうなくらい興奮している。

ずしょ♡

ひく  
ひく♡

ズニ  
ズニ…♡

ん  
ん

ん  
ん!

(俺は居ても立っても居られず、  
ゼシカの温かいまんこを舐めた。)  
「べろっ！べろべろっ！べちよべちよべちよっ!!!」

「はうっうんっ！あうっうん！  
あああっ！？いやあああっ！」  
ゼシカの予想を上回るような  
舌による舐めの快感。

(なにこれ…こんなに凄いの…っ！！??)  
ゼシカがはだんだん泉のように  
愛液が湧いてきてしまう。

「おおっ！ゼシカ様のまんこ柔らかくて  
弾力があってきもちいですっ!!!」

ゼシカの目の前には男のペニス。

今一番キレイな奴の子〇ポだが、  
これのせいで今の辛さがあるのだ。

「これが…！こいつがいけないのよ…！」

べろっ！  
べろべろっ！  
べちよべちよ  
べちよべちよ！  
ちゅる ちゅるっ！

ちゅるっ！  
ちゅる

あぁ  
あぁ  
あぁ

びんびん  
びんびん

ペニスを握りしめるゼシカ。

「いっ痛いっ！苦しいっ！気持ちいいけど強すぎる！！」

「汚いっ…！めちゃくちゃ汚いし引きちぎってやりたいわ…！」

ゼシカがどれだけ怒りを持って俺のペニスを握りしめてても、俺にはむしろご褒美だった。


こんな形とは言え、ついにゼシカにペニスを触ってもらったんだから…。

「じゅるっ！じゅるじゅるじゅるっ！」

俺はゼシカのまんこ、そしてアナルまでもを果実をむさぼるように吸いまくる。

「はあううんっ！ああああ！そんなっ…とこまで…！！」

アナルまで舐められて身を悶えさせて感じるゼシカ。甘い！甘くてしょっぱいゼシカの本気汁が俺の口に。



俺はそれだけでは勿論飽き足らず、ゼシカの膣内に舌を突っ込む。…目で確認できないが、壁に跳ね返される。  
「むぐっ…し…処女膜…!？」

喉にどんどん流れる愛液を飲みながら、思わぬ形でゼシカの処女を確認。

「あああっ! だめええ…! なんか…きちゃう…気持ちいいの…あああっ」

俺は更に舌を伸ばし、ゼシカの硬くなったクリトリスをねぶる。

「ああああっ! そこっ…だめっ…! いっちゃう…いっ! ああああっ!」

ゼシカがペニスを握りしめるのが強くなる。俺ももう我慢の限界。

「はあああっ駄目だっ! ゼシカ様っ! 出るっ! 出ますううう!」



「おおおっ！おふおおおっ！おおおお！」  
「きゃっ！やあああつ…あつ…あああつ！」

「ゼシカ様っ！おおおっ！気持ち良すぎですっ！  
ゼシカ様のまんこ汁飲みながら  
チ○ポ握られて射精できるなんて！！」



「はあぁっ…！あ…！気持ちいいっ…！  
うそでしょ…こんなに…ああああ！」  
ゼシカはクンニによる絶頂の凄さを感じていた。





俺は射精したところでゼシカの本物まんこが乗っかっている  
現実に舌を止めることが出来ない。

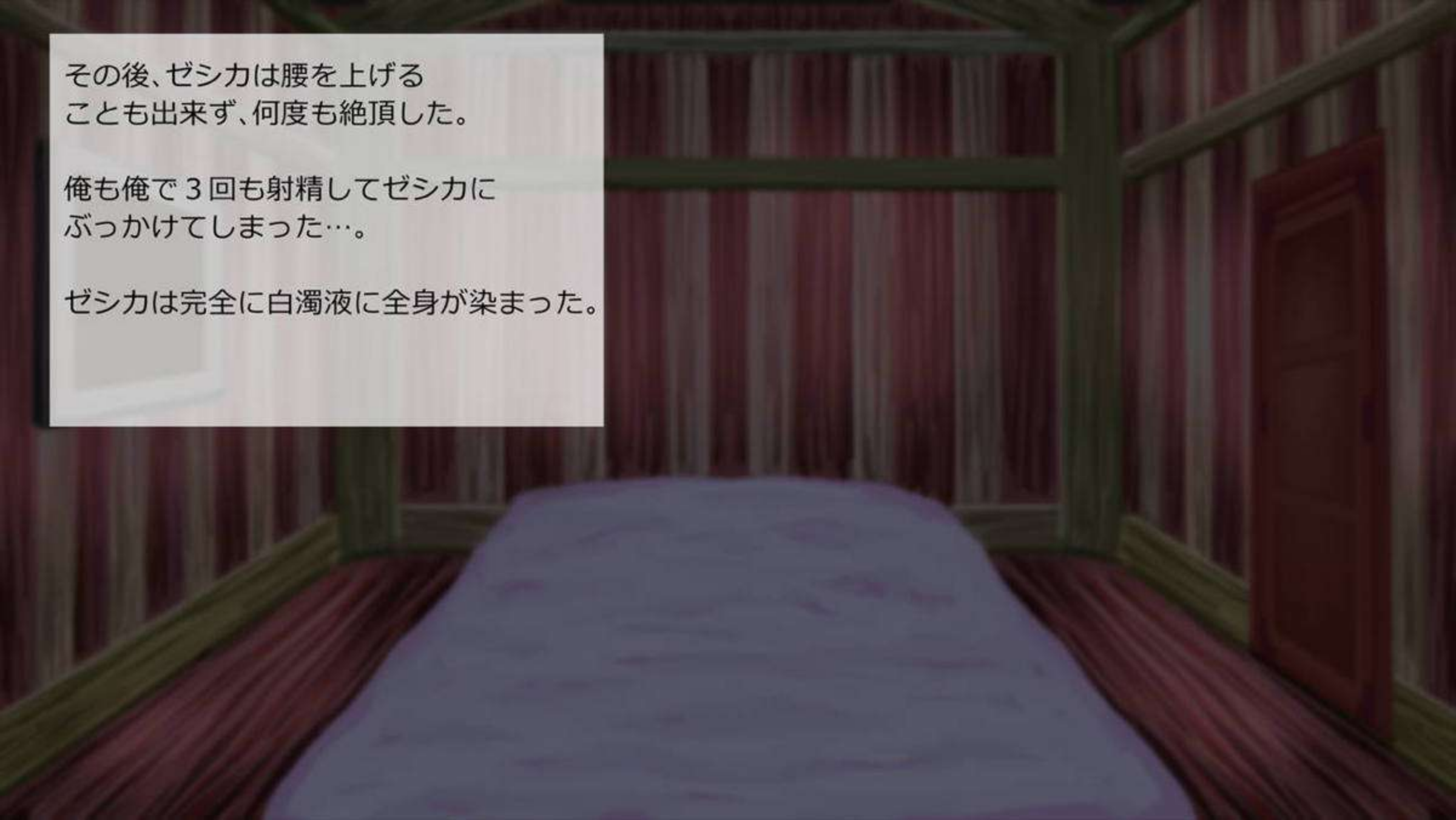
「じゅるっ! じゅぶじゅぶ! ぐんぐんぐっ! ぐんぶっ!  
ゼシカ様っ! はああっっゼシカ様!!! ぶじゅぶじゅっ!!」

「最悪っ…こんなに気持ちいいなんて…! 最悪だわ…!  
舐められるのがこんなに…すごいなんて…!」

「ゼシカ様のまんこ! ゼシカのまんこ美味くて最高っ!  
一生舐めてたい…ゼシカのまんこ汁ずっと飲みたい…」

「やめ…やめなさいよあんだ…窒息させるわよ…!」  
だがゼシカのお尻は完全にご褒美だった。  
俺はそのまま何度も射精しつづけた…。



The background image shows a room with a bed in the foreground, covered with a light-colored sheet. The room has dark wood paneling on the walls and a window with dark curtains in the background. The lighting is low, creating a somber atmosphere.

その後、ゼシカは腰を上げる  
ことも出来ず、何度も絶頂した。

俺も俺で3回も射精してゼシカに  
ぶっかけてしまった…。

ゼシカは完全に白濁液に全身が染まった。

「うっ…うう…」

ゼシカは精液まみれの体で  
自分のベッドに戻ってきた。

だが、真っ先にすることは、  
自分の愛液まみれのまんこをいじることだった。

「あああああ…んっ…！すごっ…！  
すごおおお…まんでまんここんなに  
気持ちいいの…！舐められるの…

凄すぎて…まだ…感触が残って…！」

結局朝になるまで5回オナニーを繰り返し、  
ゼシカはこの日は2時間ほどしか眠れなかった。

魔法を使って普段は仕事をしていたゼシカだが…

……………いよいよオナニーに行動を支配されて  
その仕事も出来なくなってしまった。



「あああ♡でちゃう♡また潮噴いちゃう♡  
ベッドが私の潮でべちょべちょ…  
でも気持ちよくてやめられないのお♡」

「イクのと一緒に潮噴くのがあ♡  
エロすぎてやみつきののお♡」

イル  
イル  
イル  
イル

ヒキ  
ヒキ  
ヒキ  
ヒキ

くちゅ  
くちゅ  
くちゅ  
くちゅ

ズ  
ズ

あはあ♡

べっしょ

あゝ

あゝ

あゝ

「ああああ♡出るっ♡  
でちゃうっ♡きちゃうっ♡  
エロまんこから潮噴いちゃうっ♡」

「イクっ!いぐ!いぐっ!  
潮噴いちゃう♡まんこから  
気持ちいいのりゅっ♡!!!!♡」

「あああああああ♡スケベ潮出るううう♡  
エロまんこ触ってえ♡エロ汁いっぱい  
出るのおおお♡」

イッパツ  
イッパツ  
イッパツ

びちゃ  
びちゃ  
びちゃ

ムズ  
ムズ  
ムズ

ビクッ!  
ビクッ!

ビクッ!

「気持ち良いいい♡まんこおお♡  
オナニあああああ♡」

「ああっ♡ああああ♡  
きもっ♡ちいっ♡きもひいいのおおお♡  
あああっ♡」

「はあ…はあ…はあ…♡」

絶頂後もすぐにオナニーを継続するゼシカ。

「えへへ♡もっと触りたい…  
もっとまんこいじりたいのお♡」

「もうオナニー以外何もできない…♡  
エッチなこと気持ちよすぎるよお♡あはああああん♡」

あは♡

あは♡

LoLo

へへ

ピュッ♡

ピュ♡

こんなじゃなかったのに…  
でも…気持ちよすぎてえ…♡」

ビクン

ビクン!♡

「あいつ…全部あいつのせいよお…  
こんな体にしちゃってえ…」

ベッドから起き上がることが出来ず、  
起きるなりオナニー。一日中オナニーして、  
寝るまでオナニーした。

夢の中でも…。この日は男の精液を洗うのも忘れ、  
無我夢中でオナニーをしまくっていた…。

「ああああ♡オナニーするのやめられないっ♡  
夢の中でもエロいことで頭がいっぱいなのお♡」

「まんこ触るのやめられないいい♡  
クリトリスも陰唇もお♡触るの気持ちよすぎるう♡」

「自分のおっぱい自分で舐めるとかスケベすぎいい♡♡  
ああ♡ムラムラとまらないいい♡  
私こんなにドスケベだったなんてえ…」





生活は召使いが面倒を見てくれているが、  
尽きることのない欲望が次々と湧き出し、  
完全に生活に支障をきたしている。

「はあ…それもこれも…あいつのせいだわ…  
もう…もう今度こそ…許さないわよ…」

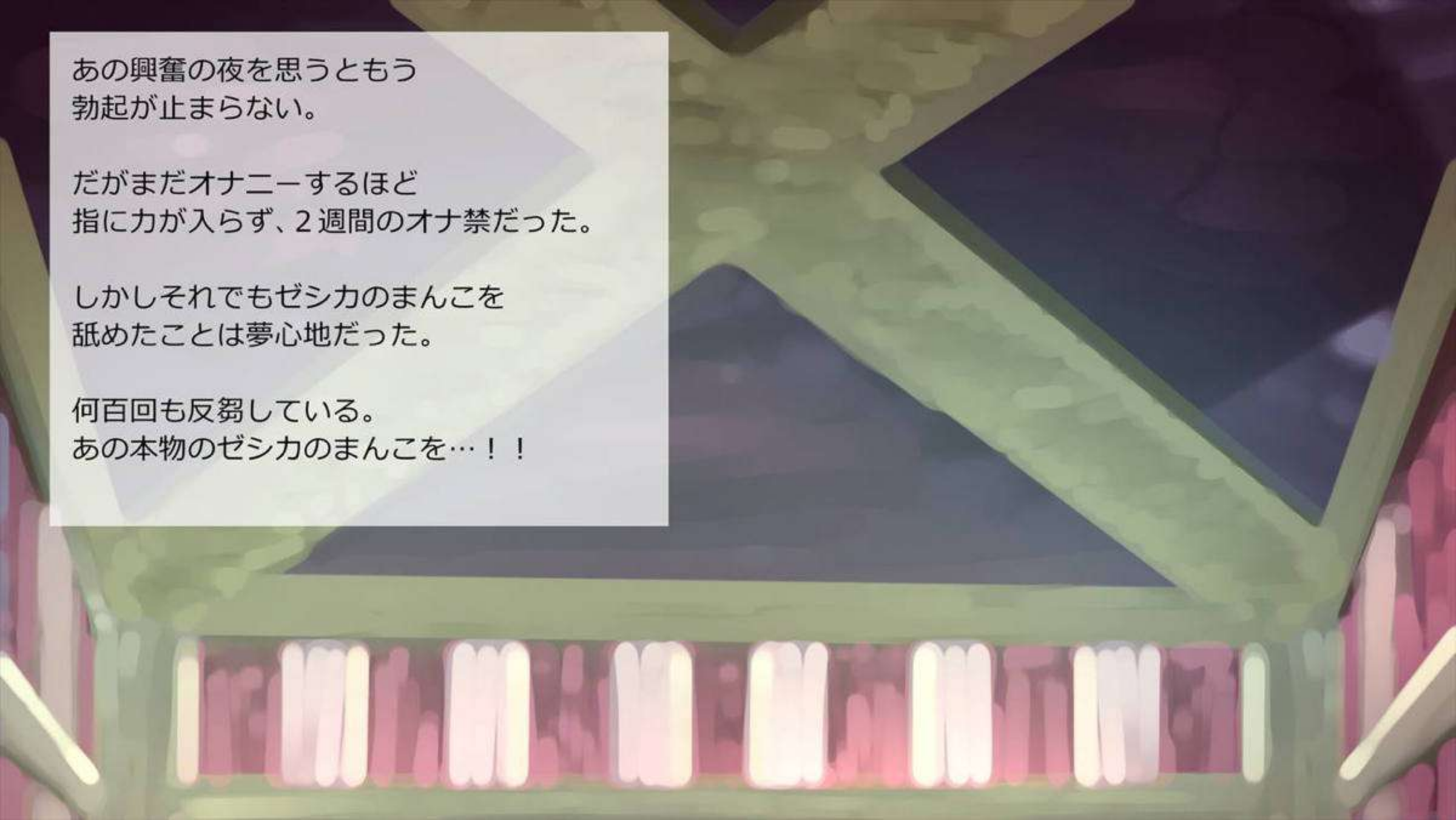


2週間が経った。  
俺の体はだいぶ良くなり、  
足こそ満足には動かないものの、  
手の方は指先はだいぶ動かせるようになった。

もうすぐ治るといふ喜びと、  
治ったらゼシカに追い出されるんじや  
ないかという不安がよぎる。

自分はこの家に居れるんだろうか…。





あの興奮の夜を思うともう  
勃起が止まらない。

だがまだオナニーするほど  
指に力が入らず、2週間のオナ禁だった。

しかしそれでもゼシカのまんこを  
舐めたことは夢心地だった。

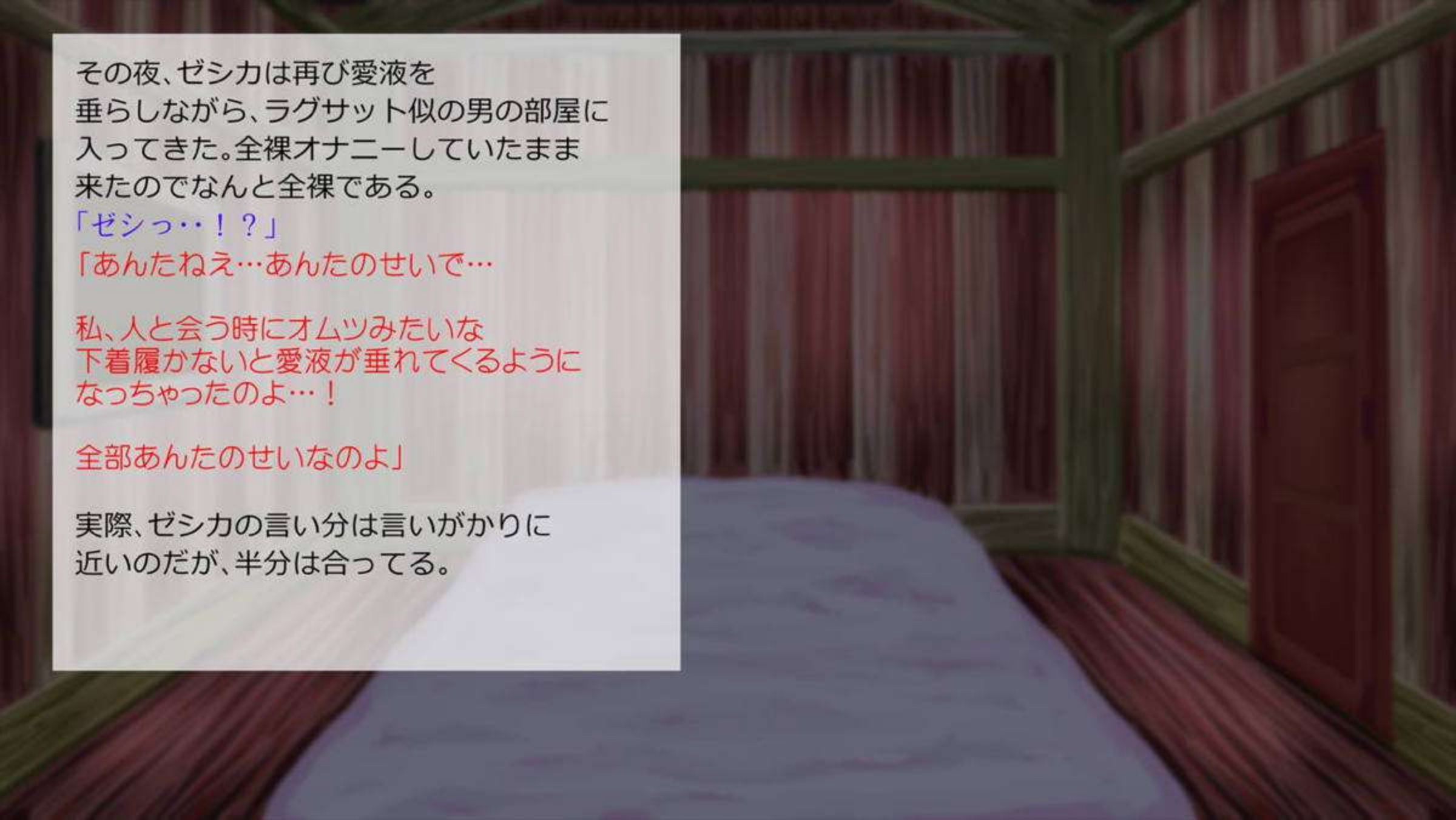
何百回も反芻している。  
あの本物のゼシカのまんこを…！！

愛液で毎日ベチャベチャになっている  
ゼシカの女性器。

オナニー漬けの生活も、快感から、  
またしても「ラグサットに顔の似ている  
召使いの男への怒り」に変わっていった。

「あいつ…治ったら追い出してやるわ…  
どうしてもむかつくのよ…」

でも追い出す前に…もっとお仕置き  
してやりたい…」



その夜、ゼシカは再び愛液を垂らしながら、ラグサット似の男の部屋に入ってきた。全裸オナニーしていたまま来たのでなんと全裸である。

「ゼシっ…！？」

「あんたねえ…あんたのせいで…」

私、人と会う時にオムツみたいな下着履かないと愛液が垂れてくるようになったのよ…！

全部あんたのせいなのよ」

実際、ゼシカの言い分は言いがかりに近いのだが、半分は合ってる。



「ぜ…ゼシカ様っ…!!!」

俺はゼシカを見て即勃起した。

「あんたにはここから居なくなる前に  
徹底的におしおきしてあげるわ」

「へ？居なくなる…？」

ゼシカはベッドに乗り、大股を開く。  
濡れに濡れたまんこが膣口を開けて  
熱いよだれを垂らしている。

「おおっ…！？ゼシカ様…!!!」

「いくわよ…ヒップアタック！」

俺の頭に、すごい勢いで  
ゼシカの尻がぶつかってきた。

「ほげっ！！」

「おしおきっ！おしおきよ！  
このっ！この！この！」

だが、俺は待ちに待った  
再度のクンニタイムに、  
舌を動かすのを忘れない。

ヒップアタックされながら、その度頭に痛みを覚えながらも、  
ゼシカのまんこを1回アタックされるたびにベロベロと舐めると、  
「はんっ…！あん……！！くっ…こいつ…反撃するのね…  
いい度胸じゃない…！…あんっ…！」



「ああああ！ゼシカ様の愛液美味い！甘い！旨すぎる！」  
「覚悟なさいよ…！あんたがギブアップするまで…  
こうして…ヒップアタックして…あんっ！」

「このっ…！こいつ…このちんこもいけないのよ…  
これのせいで…私はめちやくちやに…」  
言うと、ゼシカはチ○ポを口に含んだ。

ドズ…！  
ドズ！

ビグ♡  
ビグ♡

バズっ！  
バズっ！  
バズっ！

なんっ！



「おおおおっ！？おおおおお！んぶっべろべろっ！じゅぶ！」  
ゼシカの口の温かさがいよいよチ○ポに直接伝わった！  
歯こそ立ててないが、口の締め付けが強く、気持ちいいがキツイ。

「うぐっ！！きつっ！べろっ！じゅぼじゅぼっ！！！れるっ！」

ぎゅほ  
ぎゅほ

「このっ…ち○ぽがっ…！うぶっ！おえっ！気持ち悪っ！  
ううう！でもおしおき…！おしおきよ…！」

俺は治りかけた手は添えるくらいしか出来ないが  
初めて手で触ったゼシカの体の  
温かさと柔らかさに感動する。

「ゼシカ様…！おおおお…ゼシカ様…！」

ズ  
ズ

じゅぼ  
じゅぼ

「はあっはあ…！あんっ…！あ…！  
だめっ…！気持ちいい…！  
なんで…なんでえ…！ああああんっ…！あ…」

「ゼシカ様！ゼシカ様の生まんこ！  
ゼシカ様の生フェラチオっ！！！」

「だめっ いくっ いくいくいくうう…！  
いっちゃううう…すごいのきちゃうう…！  
こんなやつに…嫌なのに…  
すごく気持ちいいのお…！」

ビーン！  
ビーン！  
ビーン！

んっ  
んっ  
んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ

じゅっ  
じゅっ  
じゅっ  
じゅっ

「ゼシカ様っ…出ますよっ！ゼシカ様をグニしながら  
ゼシカ様のフェラチオでいっぱい出ますうう！！  
あああああ！」

「はあああっ！あああっ！  
あああっ…！あああ！いぐっ！  
いぐうう！いっちゃううう！あああああ！」

「おほおおおっ！おおおお！ゼシカ様っ！  
あああああ！気持ちいいいいい！」  
「んぐっ！んぶううっ！んんんんいっ…  
くうううっ…！」

ゼシカの口に思いっきり射精して大量の精液が放たれる。  
ゼシカも同時に絶頂を迎え、体全体を震わせる。

「はあああ出る出るっ出ますうううう！  
止まらないですうう！ゼシカ様あああ！」

「はあんっ…ああ…！！  
んひいいいっ…んぐううう…！！  
うえええっ！んぶううっ」

ゼシカは終わらない射精に思わず口を離す。  
と同時に射精の続くチ○ポからは  
大量の白濁液がゼシカの体にぶっかかる…。

どひゃっ!!

どひゃっ!!

どひゃっ!!

どひゃっ!!

どひゃっ!!

「んううう!んあつ…  
んひいいいっ…あああ…  
はううう…!あああ♡」

重なる絶頂に、愛液を噴出させるゼシカ。  
男の顔に熱い熱いトロトロした  
愛液がべっちょり付着する。

「んおお!ゼシカ様の愛液甘いですう!  
甘いしエッチな味があ…!射精が止まらない!」

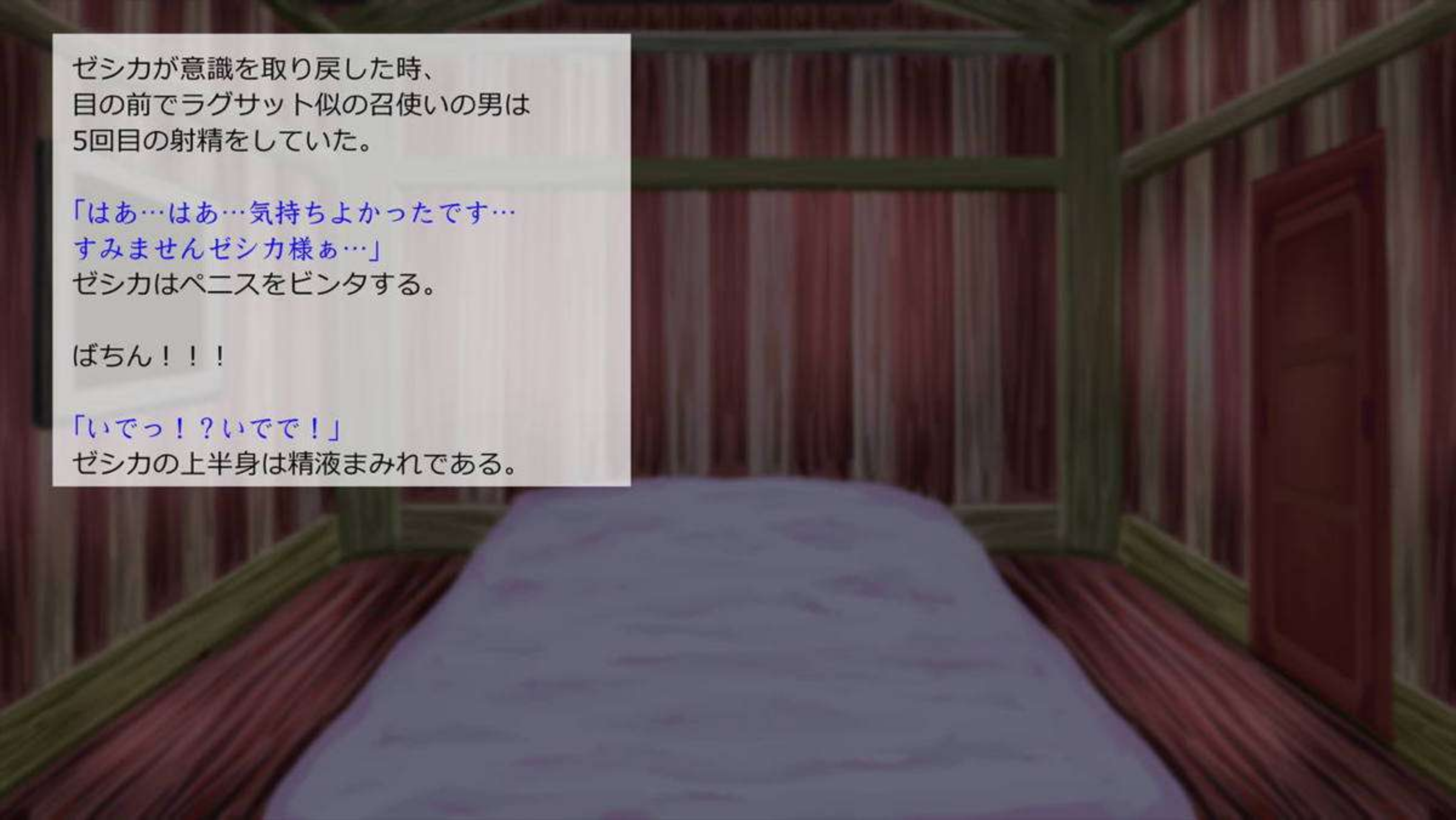
「いやっ…いやあ…こんなに気持ちいいの…  
もうだめえ…ひううっ…んっ…!  
あひいいい…気持ちいいい…♡」

ゼシカはぐったりと力が抜けてしまった。

だが、顔にゼシカのまんこが  
乗っかっている俺は、  
クンニを辞める理由がない。

ゼシカは絶えず絶頂している。

俺はゼシカをクンニしまくり、  
合計5回も射精してゼシカに  
大量に精液をぶっかけた…。



ゼシカが意識を取り戻した時、  
目の前でラグサット似の召使いの男は  
5回目の射精をしていた。

「はあ…はあ…気持ちよかったです…  
すみませんゼシカ様あ…」  
ゼシカはペニスをビンタする。

ばちん！！！！

「いでっ！？いでで！」  
ゼシカの上半身は精液まみれである。

「ううわっ…なにこれ気持ち悪い…  
うぶっ…！！」

だがゼシカはまだ絶頂時のふわふわ感が  
全残体に残っていて、  
まんこも熱い愛液で満ちている。

痙攣のような軽イキも断続的にしていた。

「多少私の気は済んだけど…こんなに出して…  
…あとあんた…完全に治ったらあんた  
もうこの屋敷からは追い出すからね…」

「ええ！？そ…そんな…ゼシカ様…」

「…とにかくあんたがこの屋敷にいると  
迷惑なのよ…今までのことも…  
あとやっぱり顔見ると  
ラグサット思い出しちゃう」

「そ…それは…内面を見て下さいよ…  
素敵なもんでもないですけど…」

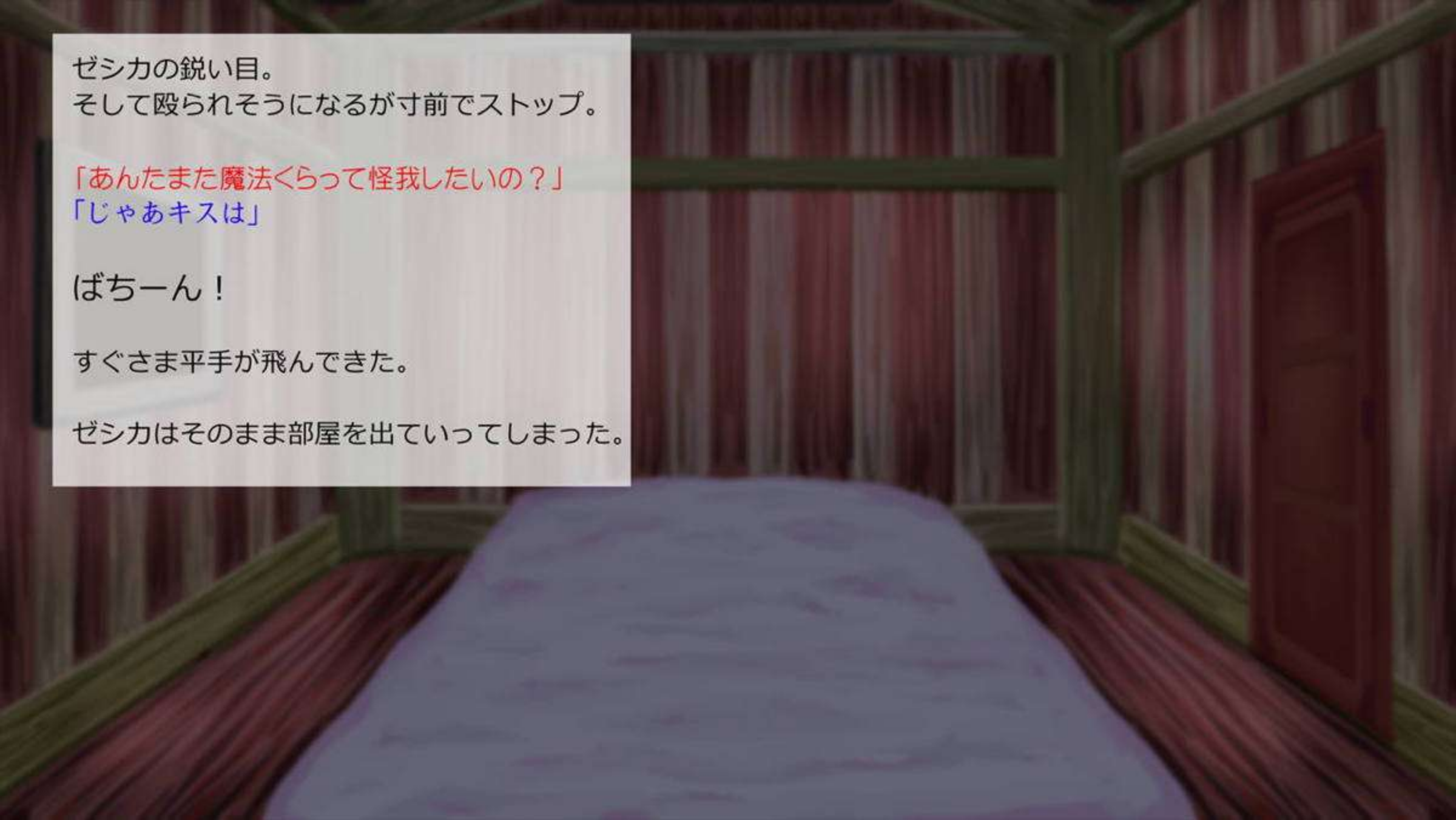
「……じゃあね！あんたと私は  
もうこれでおしまい！」

「そ…そんな…ゼシカ様…」

ここまでエッチなことが出来ただけでも  
嘘のようだが、欲をいえば  
キスとかセックスしたかったに決まってる。

「せめて…せめて最後に1回…セックス…」



A dimly lit room with a bed in the foreground and a door on the right. The room has dark wood paneling and a window with red curtains. The text is overlaid on a semi-transparent white box.

ゼシカの鋭い目。  
そして殴られそうになるが寸前でストップ。

「あんたまた魔法くらって怪我したいの？」  
「じゃあキスは」

ばちーん！

すぐさま平手が飛んできた。

ゼシカはそのまま部屋を出て行ってしまった。

「あああああ♡また出りゅっ♡まんこから  
いっぱい出りゅう♡廊下で何回も潮噴いちゃううう♡  
いやらしいマン汁も垂れ流しちゃうのおおお♡  
あああああ♡まんこおお♡おまんこきもちいいのおおおお♡」

「出るっ！出る！出るうう♡  
お潮おもらししちゃううううう♡  
オナニーしてドスケベ汁  
おもらししちゃうよおおおお!!♡」

「いぐっ！いぐうう♡おまんこいぐっ♡  
エロ汁もれちゃううう♡」

あっ♡  
あ〜♡  
あ〜♡

いんこ  
い

ぐい  
ぐい

ぐい  
ぐい

ちゅぽ♡  
ちゅぽ♡

じゅぽ♡  
ちゅぽ

ぐちゃ  
ぐちゃ

ぐい  
ぐい

「っはあああああああ♡あああああーっ！♡あああ♡！」

「ひあっ！ああああああ♡出てる♡  
エロ汁またいっぱい出ちゃってるのおおお♡♡」

「ああああ♡止まらないいいいい♡  
いっぱい出てる♡エロいことしすぎて  
いつもよりもいっぱい出てるううう♡」



「はあ…はあ…びちょびちょ…もうだめえ…♡  
エッチなことしかできない…ゆっくり部屋に帰るしか…」

ゼシカはズルズル這いながら、  
愛液と潮のプールを引きずり前進する…。

「あっ♡クリが床に当たってえ♡またいぐうう♡  
イっちゃうううう♡クリっ♡  
きもちいいいいいい♡すごきもちいいいい…♡」  
こんな調子で部屋に戻るまでに3時間、28回絶頂したという…。

「ああああ♡まんこおお♡  
あいつは最悪だけど舐められて  
気持ちよかったのおお♡まんべんなく舐められてえ♡  
エロ汁いっぱい出ちゃうのお♡」

「あはああ♡自分でするオナニーも最高…♡  
部屋まで待つてられない…♡  
人に見られてもかまわない…  
今ここでオナニーすりゅのおお♡」

「ああ～♡気持ちいい～♡  
何でこんなにまんこいじるの気持ち良いのお♡」



あれから1週間。もう腕はほぼ治ってきて、  
あとは足と足指だけだ。

(はあ…そうだ…俺は…治ったら  
いよいよゼシカと離れなければならない…  
あの様子だと…もう会えないんだろうな…)

俺はゼシカとの日々を反芻して、  
怒涛のようにオナニーしまくった。



ゼシカのおっぱいの感触、  
まんこの感触、味、匂い、  
あえぐゼシカの声。綺麗な裸。

何を想像しても、何回でも抜くことが出来た。

せめてゼシカと同じ屋根の下にいるうちに、  
未練すらも残さぬよう俺はオナニーした。



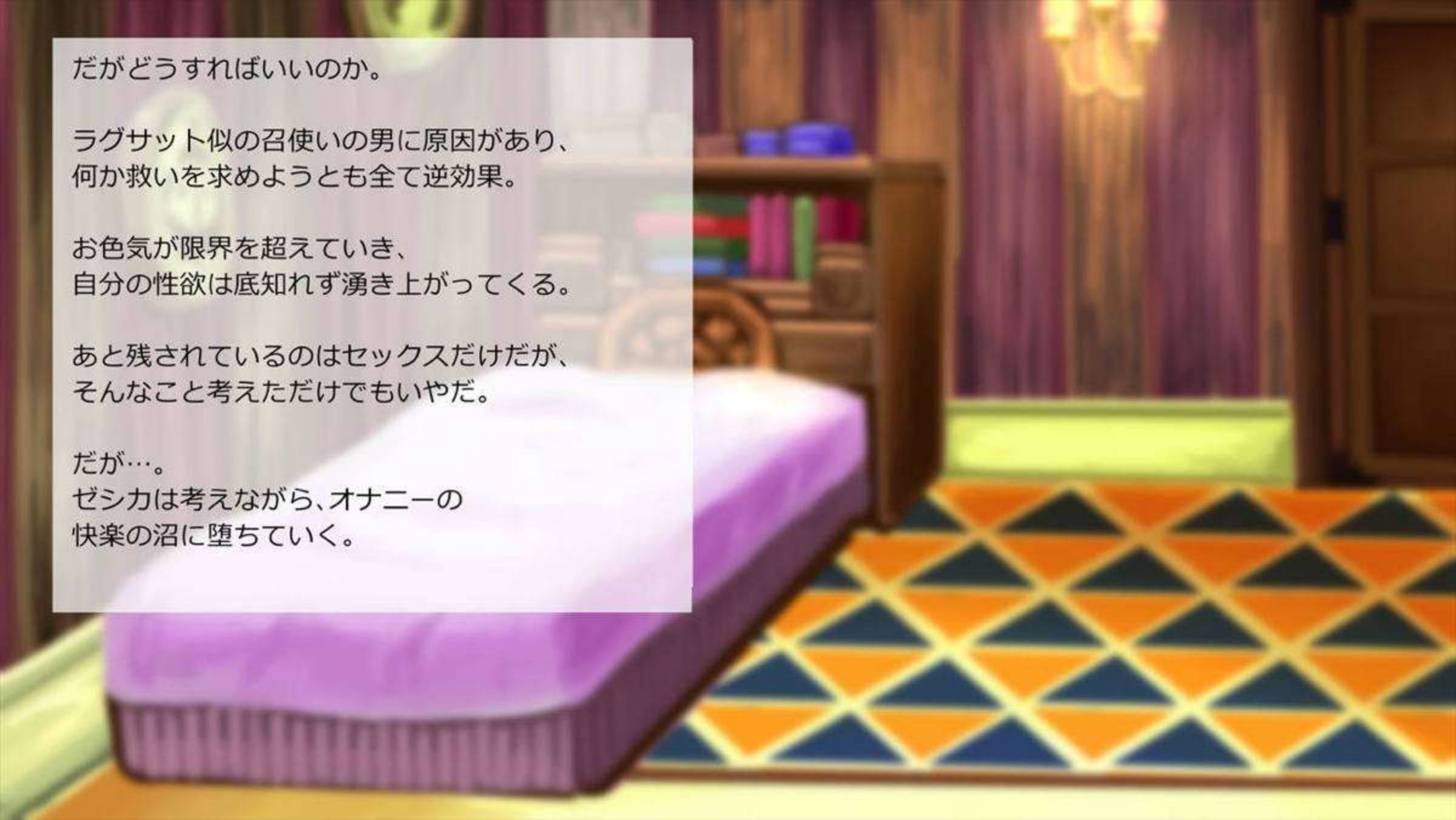
ゼシカの状態はいよいよ酷くなった。  
もうオナニーなしでは全く生活できない。

それどころか朝起きて寝るまで  
オナニーし続け、夢の中でもオナニーし、  
もう何がなんだかわからなくなってきていた。

まずい、このままでは完全にまずいことになる。





A bedroom scene with a bed, a bookshelf, and a patterned rug. The bed has a purple blanket and a white pillow. The bookshelf is filled with books. The rug has a blue and orange diamond pattern. A chandelier hangs from the ceiling.

だがどうすればいいのか。

ラグサット似の召使いの男に原因があり、何か救いを求めようとも全て逆効果。

お色気が限界を超えていき、自分の性欲は底知れず湧き上がってくる。

あと残されているのはセックスだけだが、そんなこと考えただけでもいやだ。

だが…。

ゼシカは考えながら、オナニーの快樂の沼に墮ちていく。

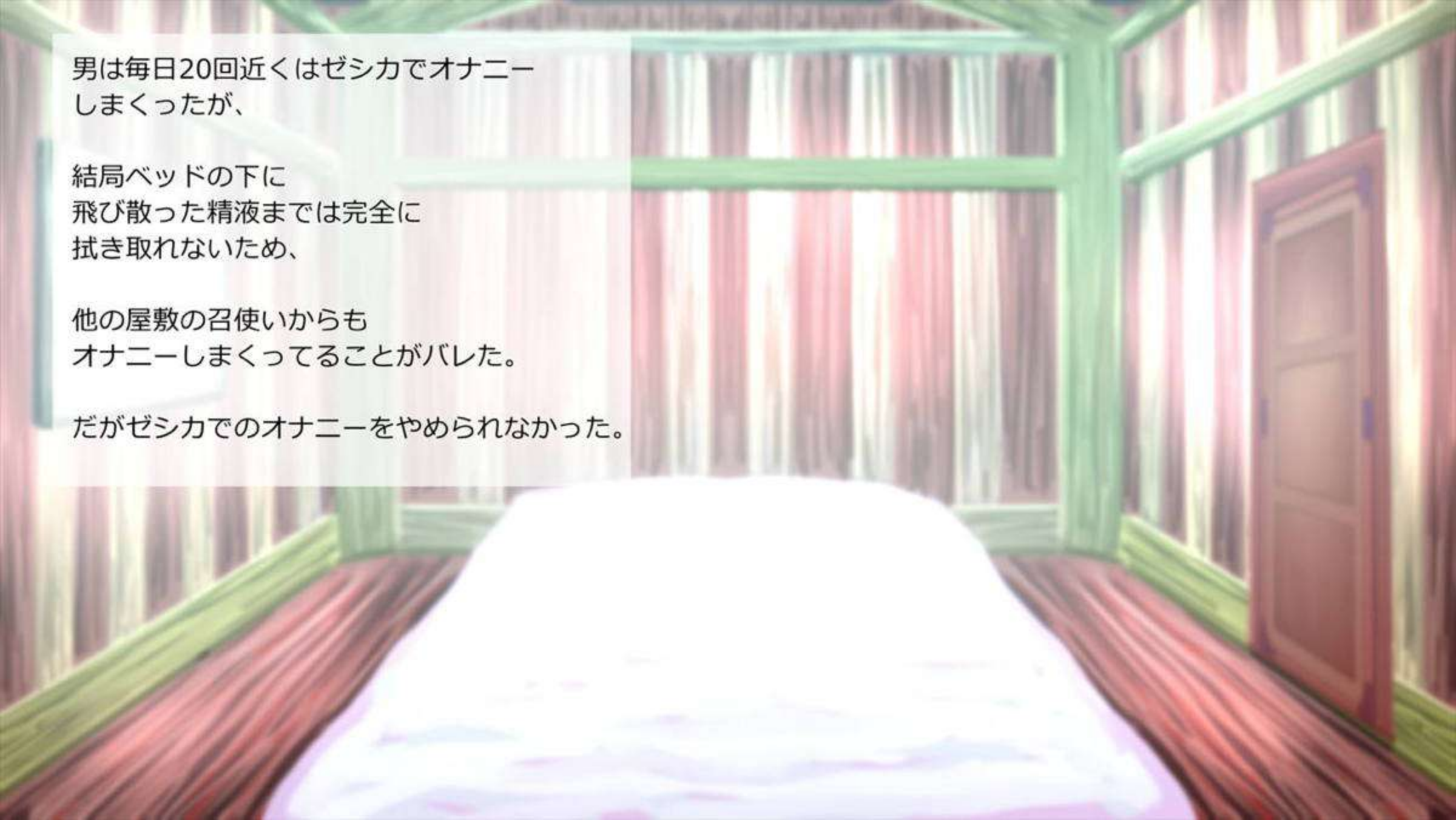
さらに1週間。

男はもう足もだいぶ治ってきて、  
あとは足指だけだが、歩く練習を  
しなければいけないのと、

足指が完治してないため、自由な歩行はまだ困難。

だがそれ以外はもう十分元通りになった。



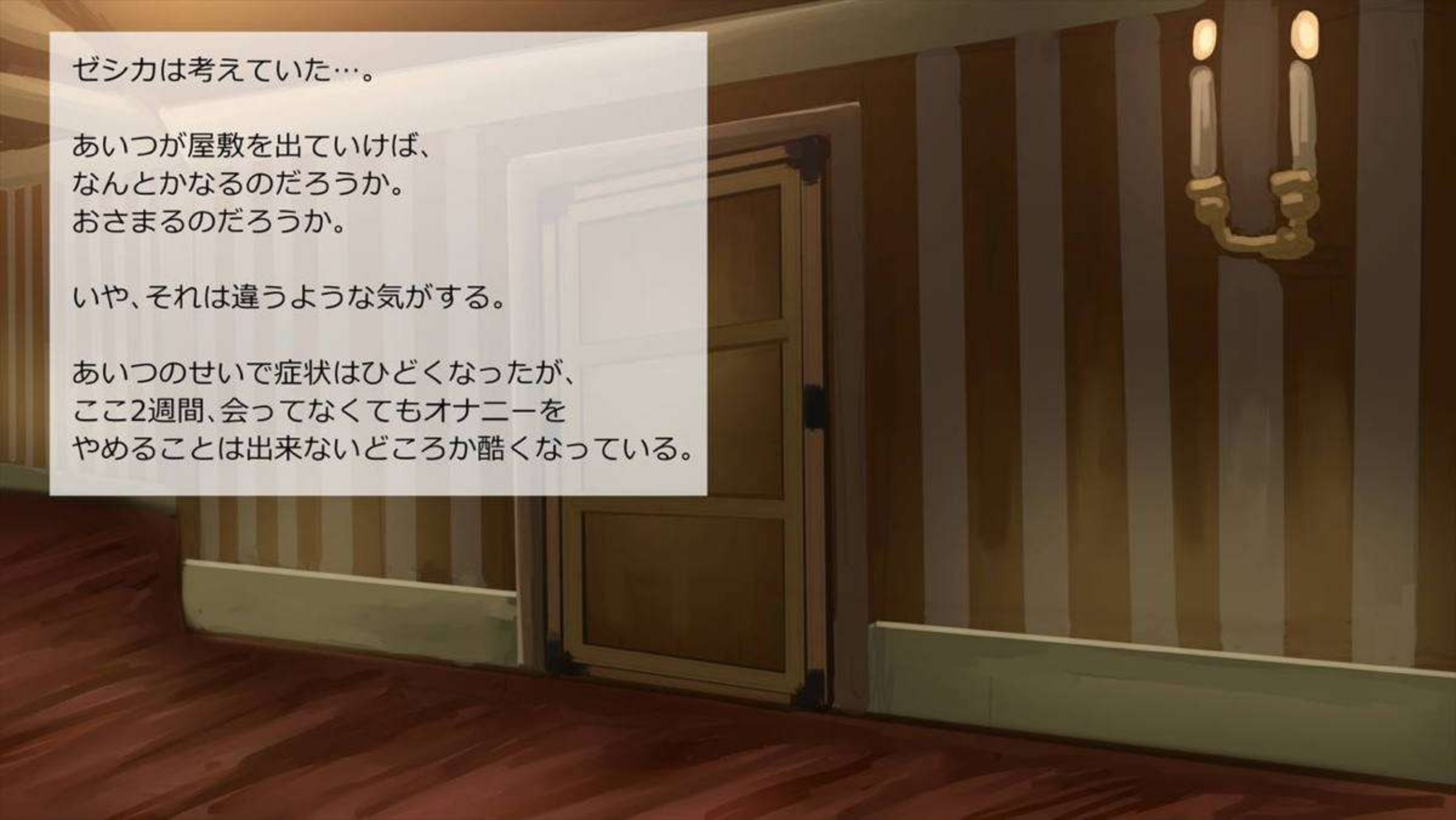
A bedroom with a bed in the foreground, a window with curtains in the background, and a door on the right. The room has a green frame around the window and door.

男は毎日20回近くはゼシカでオナニー  
しまくったが、

結局ベッドの下に  
飛び散った精液までは完全に  
拭き取れないため、

他の屋敷の召使いからも  
オナニーしまくってることがバレた。

だがゼシカでのオナニーをやめられなかった。

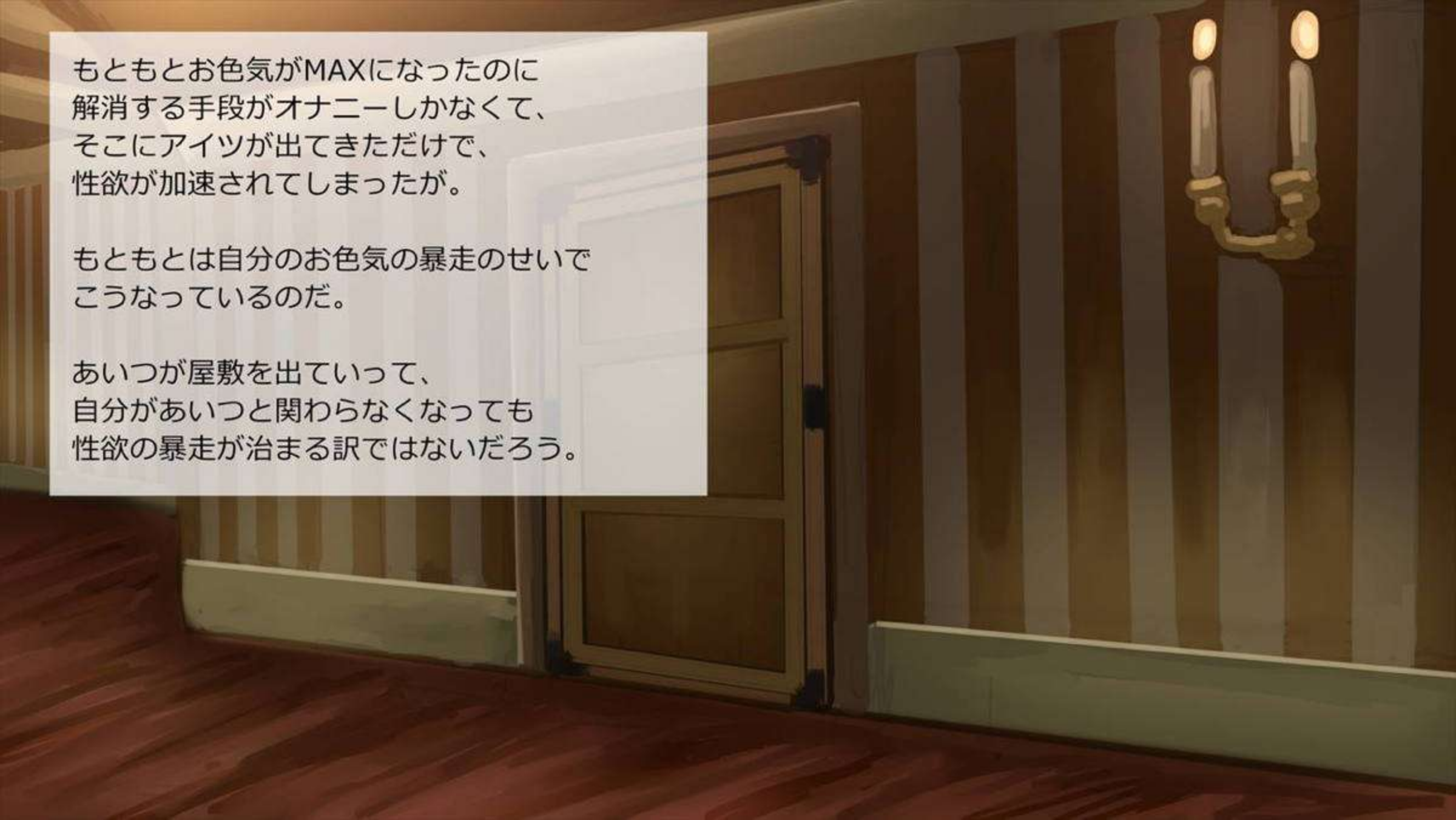
A dimly lit room with a wooden door and a candelabra on the wall. The room has a dark wood floor and a wall with vertical stripes. A white text box is overlaid on the left side of the image.

ゼシカは考えていた…。

あいつが屋敷を出ていけば、  
なんとかなるのだろうか。  
おさまるのだろうか。

いや、それは違うような気がする。

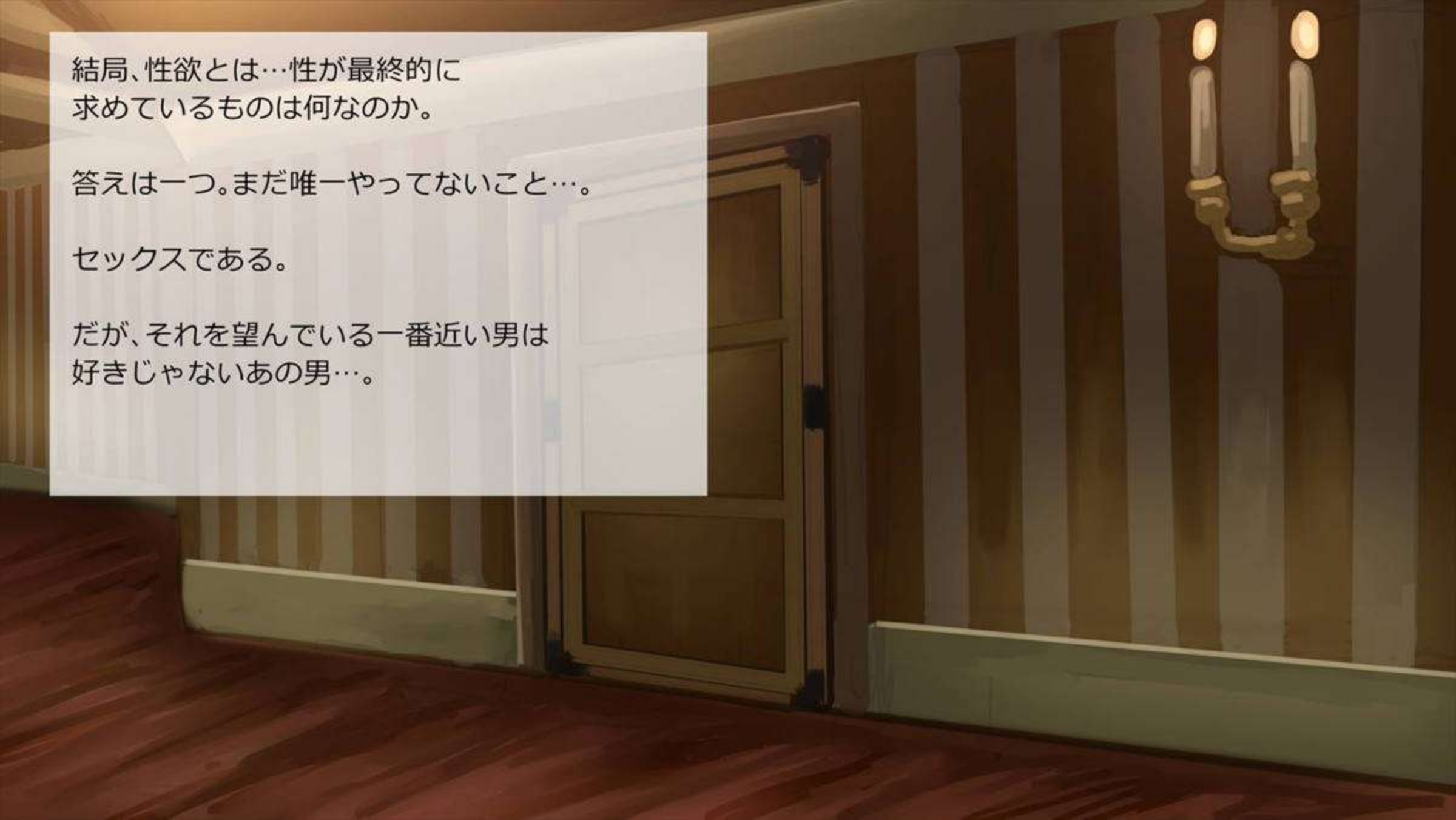
あいつのせいで症状はひどくなったが、  
ここ2週間、会ってなくてもオナニーを  
やめることは出来ないどころか酷くなっている。

A dimly lit room with a wooden door and a candelabra on the wall. The room has a dark wood floor and a wall with vertical stripes. A white text box is overlaid on the left side of the image.

もともとお色気がMAXになったのに  
解消する手段がオナニーしかなくて、  
そこにアイツが出てきただけで、  
性欲が加速されてしまったが。

もともとは自分のお色気の暴走のせいで  
こうなっているのだ。

あいつが屋敷を出て行って、  
自分があいつと関わらなくなっても  
性欲の暴走が治まる訳ではないだろう。

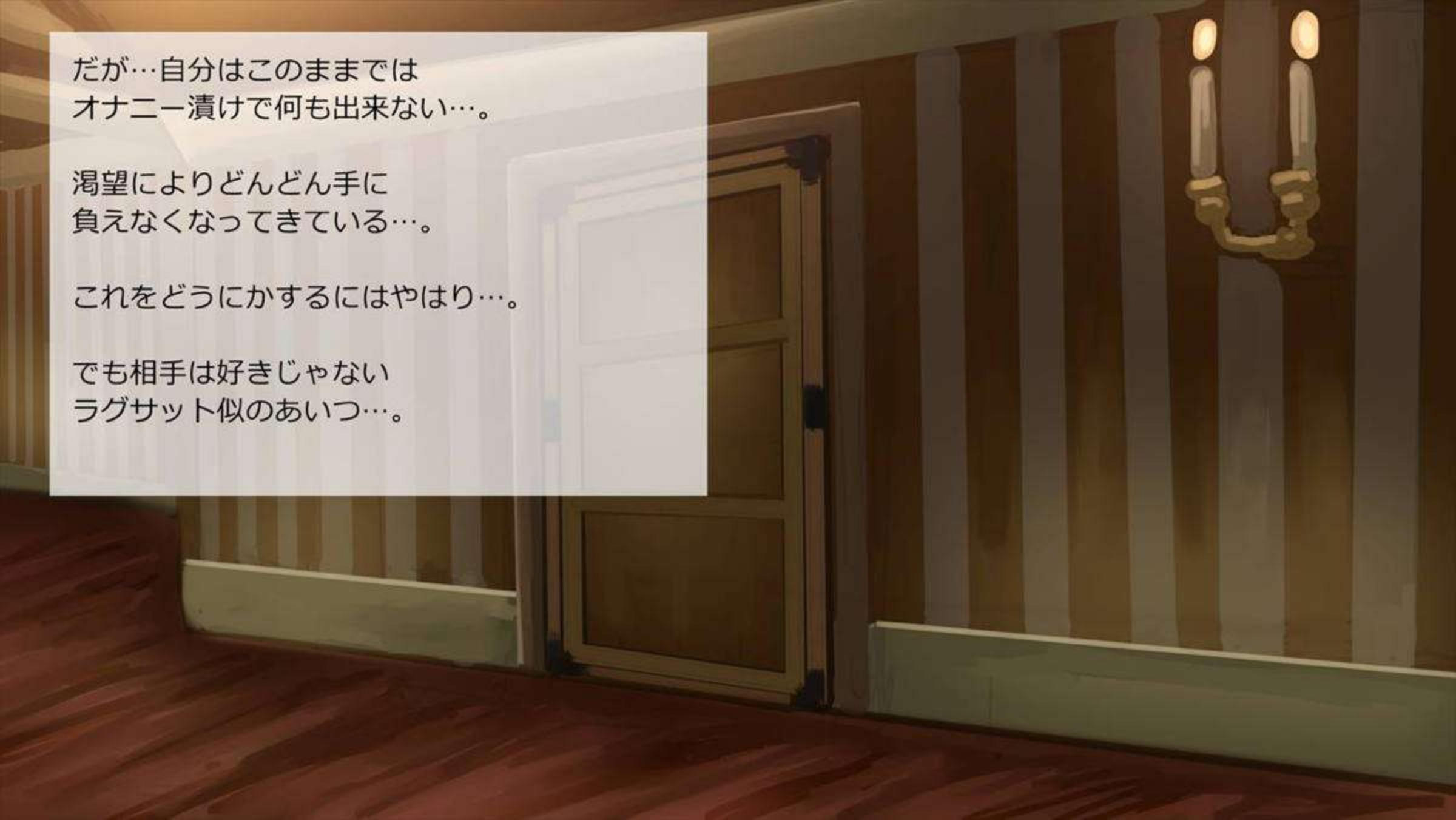
A dimly lit room with a wooden door and a candelabra on the wall. The room has a dark wood floor and a wall with vertical stripes. A white text box is overlaid on the left side of the image.

結局、性欲とは…性が最終的に  
求めているものは何なのか。

答えは一つ。まだ唯一やってないこと…。

セックスである。

だが、それを望んでいる一番近い男は  
好きじゃないあの男…。

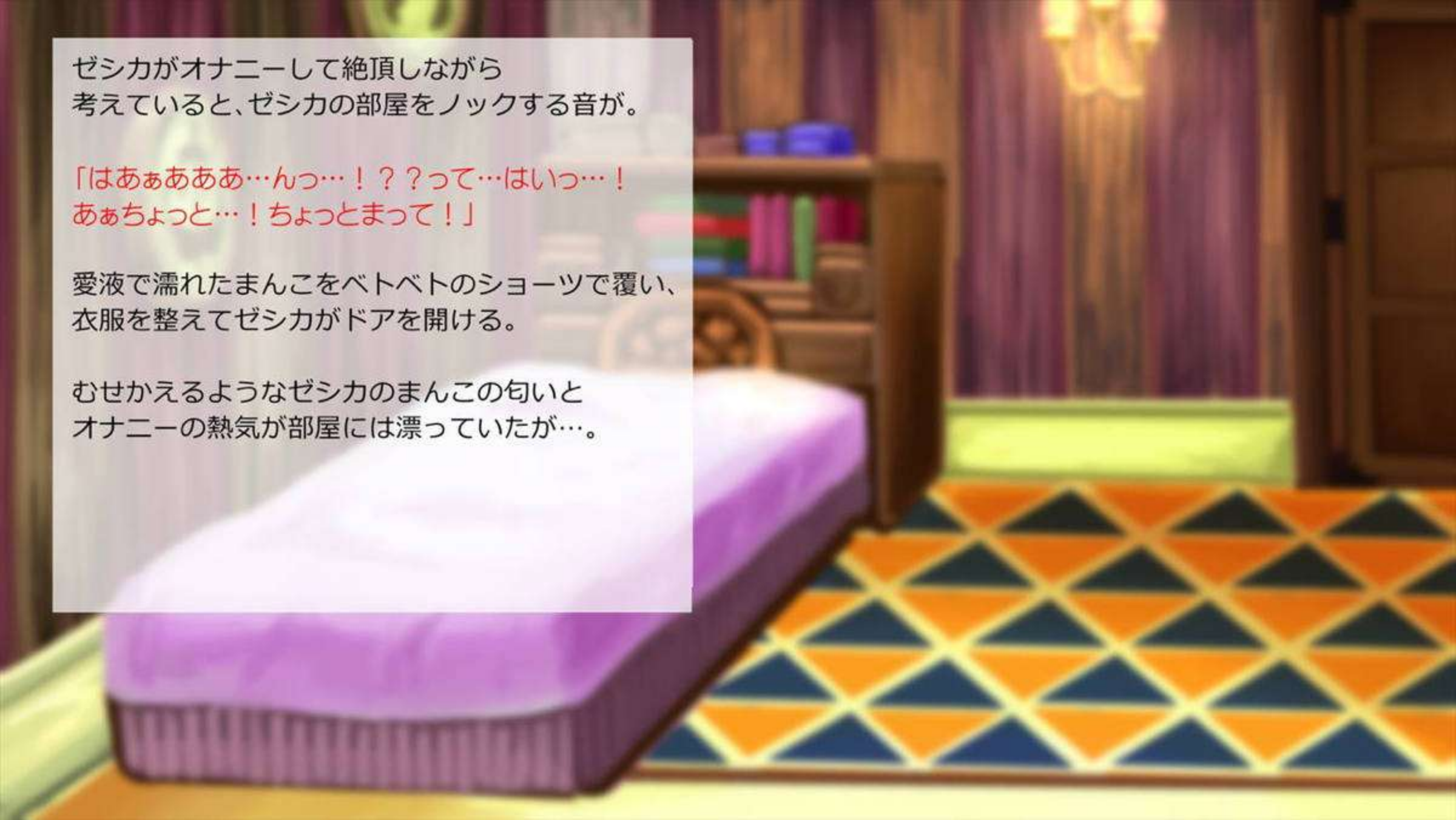
A dimly lit room with a wooden door and a candelabra. The room has a dark wood floor and a wall with vertical stripes. A white text box is overlaid on the left side of the image.

だが…自分はこのままでは  
オナニー漬けで何も出来ない…。

渴望によりどんどん手に  
負えなくなってきた…。

これをどうにかするにはやはり…。

でも相手は好きじゃない  
ラグサット似のあいつ…。

A bedroom scene with a bed, a bookshelf, and a patterned rug. The bed has a purple blanket and a white pillow. The bookshelf is filled with books. The rug has a blue and orange diamond pattern. A door is visible in the background.

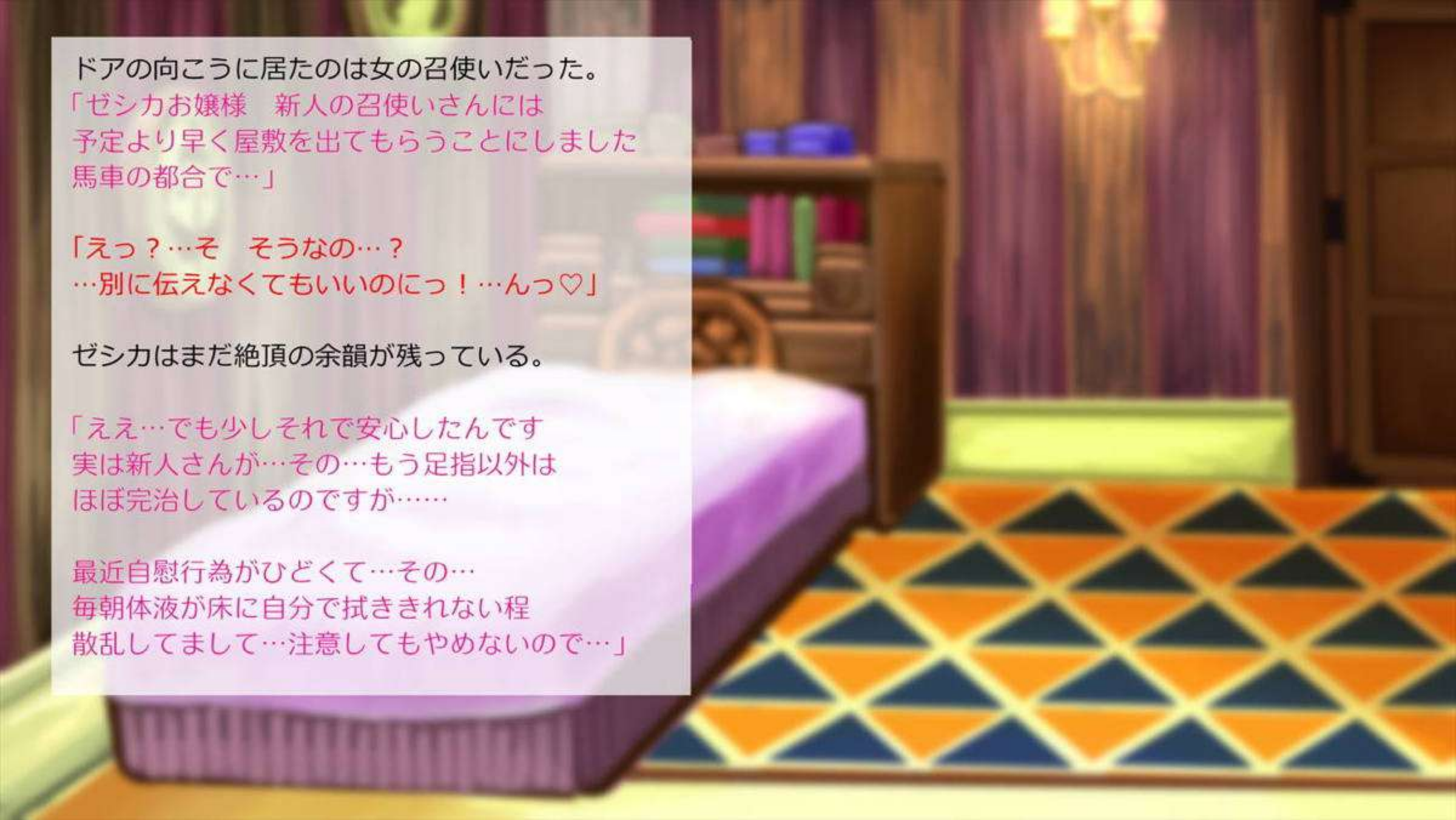
ゼシカがオナニーして絶頂しながら  
考えていると、ゼシカの部屋をノックする音が。

「はあああああ…んっ…！？？って…はいつ…！  
ああちよっと…！ちよっとまって！」

愛液で濡れたまんこをベトベトのショーツで覆い、  
衣服を整えてゼシカがドアを開ける。

むせかえるようなゼシカのまんこの匂いと  
オナニーの熱気が部屋には漂っていたが…。





ドアの向こうに居たのは女の召使이었다。  
「ゼシカお嬢様 新人の召使いさんには  
予定より早く屋敷を出てもらうことにしました  
馬車の都合で…」

「えっ?…そ そうなの…?  
…別に伝えなくてもいいのにつ!…んっ♡」

ゼシカはまだ絶頂の余韻が残っている。

「ええ…でも少しそれで安心したんです  
実は新人さんが…その…もう足指以外は  
ほぼ完治しているのですが……

最近自慰行為がひどくて…その…  
毎朝体液が床に自分で拭ききれない程  
散乱してまして…注意してもやめないの…」

「うわ！オナニーばかりしてるの！  
(って…人のこと言えないか…)…あっ♡」

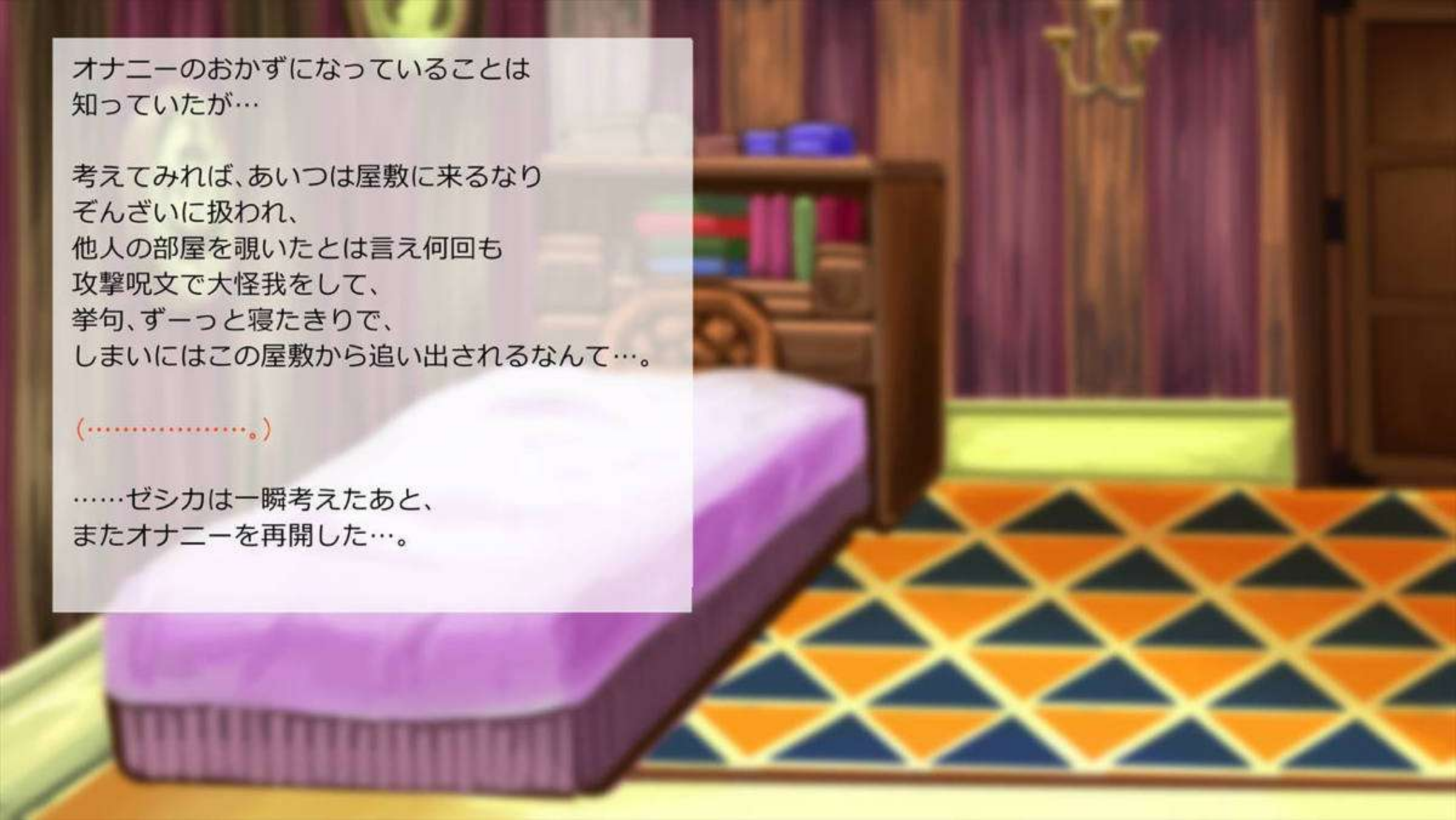
「…ここだけの話ですけど…毎晩お嬢様の  
名前を呼んでるんです…  
きっとお嬢様を想像して…」

「気持ち悪う…そ…そんな事私に伝えなくても…」

「すみません…でもこちらとしても不快ですし…  
もうほぼ治っているので明日の夕方馬車に  
乗せて…出身を教えてくださいなのですが

とりあえずポルトリンクまで  
連れて行ってもらうことにしました…  
そういうことですので…一応報告まで…」

「うん わざわざありがと！」  
そして召使いは扉を閉めた。

A bedroom scene with a bed, bookshelf, and patterned rug. The bed has a purple blanket and a white pillow. The bookshelf is filled with books. The rug has a blue and orange diamond pattern. The room is lit with warm, yellow light.

オナニーのおかずになっていることは  
知っていたが…

考えてみれば、あいつは屋敷に来るなり  
ぞんざいに扱われ、  
他人の部屋を覗いたとは言え何回も  
攻撃呪文で大怪我をして、  
拳句、ずーっと寝たきりで、  
しまいにはこの屋敷から追い出されるなんて…。

(……………。)

……ゼシカは一瞬考えたあと、  
またオナニーを再開した…。

翌日。

夕方、俺は馬車に寄せられ、いよいよ屋敷を  
追い出されることに。

…結局ずっと大怪我して横になっていたのは  
辛かったが、ゼシカと思わぬ形で触れ合えて…

と、結果的にはエロい日々だった。  
考えていたらまた勃起する。

追い出される形の見送りがあったが、  
ゼシカは見送りに来なかった。



これからポルトリンクに行って  
どうしよう。  
港だから何か仕事はあるかなあ。

とりあえず元の世界には帰りたくない。  
…ゼシカの居るこの世界に居たい。



…ああ…でもやっぱり…ゼシカともっと…  
もっと一緒に居たかったなあ…

俺は、馬車まで介助してくれた召使いに  
伝言を頼んだ。

「ゼシカ様に…屋敷の皆さんにも…  
ありがとう…伝えてください…」

「…あなたゼシカ様からすごく  
うとまれてましたよね…？」

「……お願いします…」

「まあいいですけど…お達者で」



夜。

「ええ！？あいつがそんなことを  
言ったの？…んっ♡」

「一応伝えたほうが良いかと思ひまして…」

ゼシカに伝言する召使い。

「まあいいわ私は特に感謝はして…  
ないけど…あんっ！♡」

ゼシカは会話しながらいよいよ小刻みに震え、  
絶頂している。

股の間からは下着を濡らして愛液が糸を  
引いて垂れて、床に水たまりをつくっている。

もはや、女性器と下着が衣擦れ  
するだけでも絶頂するほどになっていた。

「はあ…んっ♡はあ…はあ…」  
「だ…大丈夫ですかゼシカ様？お体の調子が…？」

「んっ♡大丈夫…よ…♡  
大丈夫だから…一人にして…」  
「で…ですが…」

「大丈夫だから！…んっ♡」  
「はっはい…」



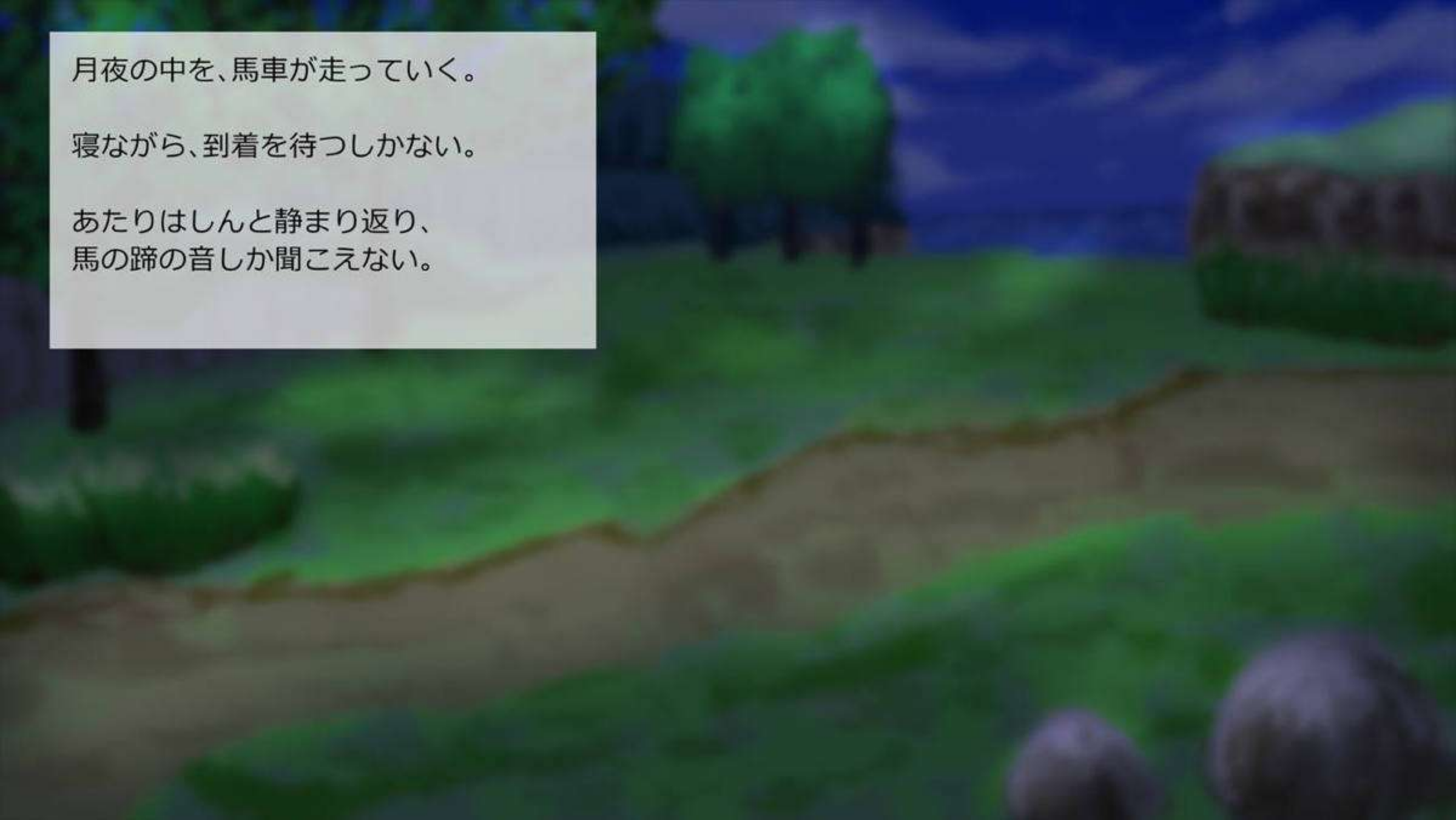
(私もいよいよ重症ね…  
あいつはもう居ない…)

でもやっぱり私はひどくなる一方…  
でも…でも…

それに…あいつ…)

ゼシカは考えながらオナニーした。  
だが、絶頂がおさまる感じがなかった。



A dark, atmospheric landscape at night. A path winds through a field of green grass. In the background, there are silhouettes of trees and a dark, cloudy sky. The overall mood is quiet and mysterious.

月夜の中を、馬車が走っていく。

寝ながら、到着を待つしかない。

あたりはしんと静まり返り、  
馬の蹄の音しか聞こえない。

…が、そんな中、小走りの音が聞こえた。  
その音はどんどん近くなっていく。

…確実にこちらの馬車の方へと向かっていく。  
馬がいなく。

「なっなんだおまえは!？」

馬車を走らせている御者が声を上げる。

「ラリホーマ！」

「くわーっ!!……………すう…」

(えっ!?!えっ!?!なんだ!?)

俺は突然のことに、声を上げることが出来ない。

すると、俺が寝ている部分に  
声の主が乗り込んできた。

「動かないで！！」

「！？」



「ぜ…ゼシカ様!？」

「ゼシカじゃないわ…盗賊よ…」

声の主は、服装や髪型こそ  
変えていたが、ゼシカだった。

「で…でも」


「これからすることは絶対に人に  
言わないこと…」

「な…何を!？」

「良い?今から…はあ♡1回だけ…  
盗賊があんたを襲うわ…」

1回だけよ…終わったらもう2度と  
盗賊はあんたとは会わない…  
いいわね?」





「な…何をするんですゼシカ様」

「盗賊！」

「はっはい…！」

(はあっ！はあっ…はあ…！！  
い…いくわよ…すぐ終わりにするのよ…  
落ち着いて…私…)

と、ゼシカは男の下半身に  
手を伸ばすが…。

「って…勃起じゃないじゃないの！  
…いつでも勃起してるわけじゃないの…？」

「び…びっくりしてて…それに突然で…」

「って勃起って…ええっ！？まさか…！？」  
「まさか勃起じゃないなんて…勃たせないと…！」



ゼシカは男の下着を脱がし、  
ふにやりとしているが大きいペニスに手をかける。  
(ううっ臭あつ…!!ほんとちんこって臭いわよね…)

だが、その臭いでゼシカは興奮もして  
しまっているのを感じる。愛液が漏れる。

「早く勃ちなさいよ…！完全に計算外よ！」

ほっしん

ぐし

ゼシカは嫌いな男のペニスに  
手コキを始める…！

「うえっ…気持ち悪い…今まで会った  
どんな魔物よりも気持ち悪いわ…  
は…はやく勃ちなさいよ…！」

「あああ…！ゼシカ様…！！！」



「ゼシカ様に！ゼシカ様の美しい手で  
触ってもらえるなんて！」

「ゼシカじゃないわ盗賊よ…  
とにかく…早く勃起なさいよ…  
ガチガチに…なりなさいよね…」

「生意気なのよ…私が…  
ちんこ触ってあげてるんだから…  
さっさと勃起しなさいよ…」

ゼシカの体の甘い匂い、髪の毛の匂いはもちろん、  
ゼシカは愛液を絶えず垂らしているので、  
そのかぐわしいメスの匂いが  
発情したまんこ臭が男の鼻にまで届いていた。

「はあ！ゼシカ様…盗賊様のまんこ臭が  
最高にかぐわしくてスケベな香りです！！」

「うるさいっ！！」

恥ずかしそうにゼシカは手コキを続ける。

「こいつ…！吐いても知らないからね…」  
ゼシカは覚悟して男のチ○ポを舐めた。

「ううううっ！??」  
一気に男は勃起する。だがまだフルではない。  
「ううっ！すごいこの味…！えぐい…でも…」

れろ…♡

ビクッ♡

ビキ  
ビキッ！

ビク♡

性器の奥が、じゅんとなった。  
熱い愛液が漏れる。感じてしまう。

「あああ…ゼシカ様…盗賊様…  
口があたたかくて…あああ…！」

「すごい硬い…これなら…  
ああ…すごい…おちんぼ…」

「うっ…うぶ…うっ…うう…んんっ…」  
ゼシカは意を決して龟头にしゃぶりつく。  
「おはあああああっ! ???」

「ううぐえっ…んむうう…!!んんん…!!」  
いよいよフル勃起する。

ゼシカもゼシカで、最高に嫌悪感と  
嘔吐感を感じながらも、  
感じて愛液を噴出してしまう…!

「っはあ…! はあ…ついに勃ったわね…はあ…はあ…  
じ…じゃあ…はあはあ…んっ…避妊具を着けて…」  
ゼシカは避妊具を取り出し、装着する。  
「ぜ…と…盗賊様…!」

し…信じられない…突然のことで  
動揺が大きい、ペニスは完全に勃起。  
まさに今、勃起の務めを果たすべく。

憧れの女性のまんこを貫き、それに包まれるべく  
天を突いている。

ゼシカにゴムまでつけてもらい…夢ではないだろうか。

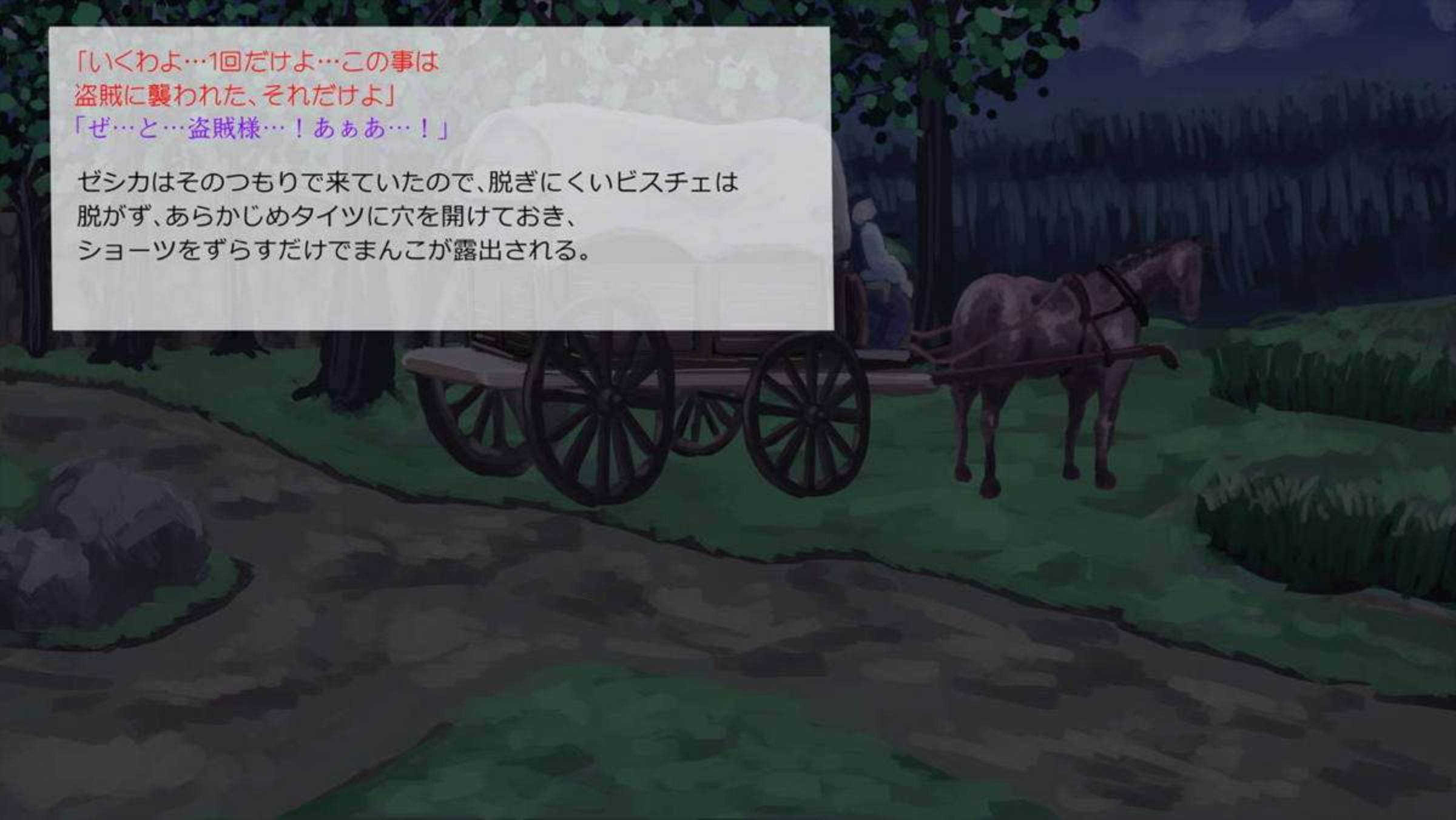
**ついに…ついにゼシカと  
セックスすることができるのだ！**



「いくわよ…1回だけよ…この事は  
盗賊に襲われた、それだけよ」

「ぜ…と…盗賊様…！あああ…！」

ゼシカはそのつもりで来ていたので、脱ぎにくいビスチェは  
脱がず、あらかじめタイツに穴を開けておき、  
ショーツをずらすだけでまんこが露出される。

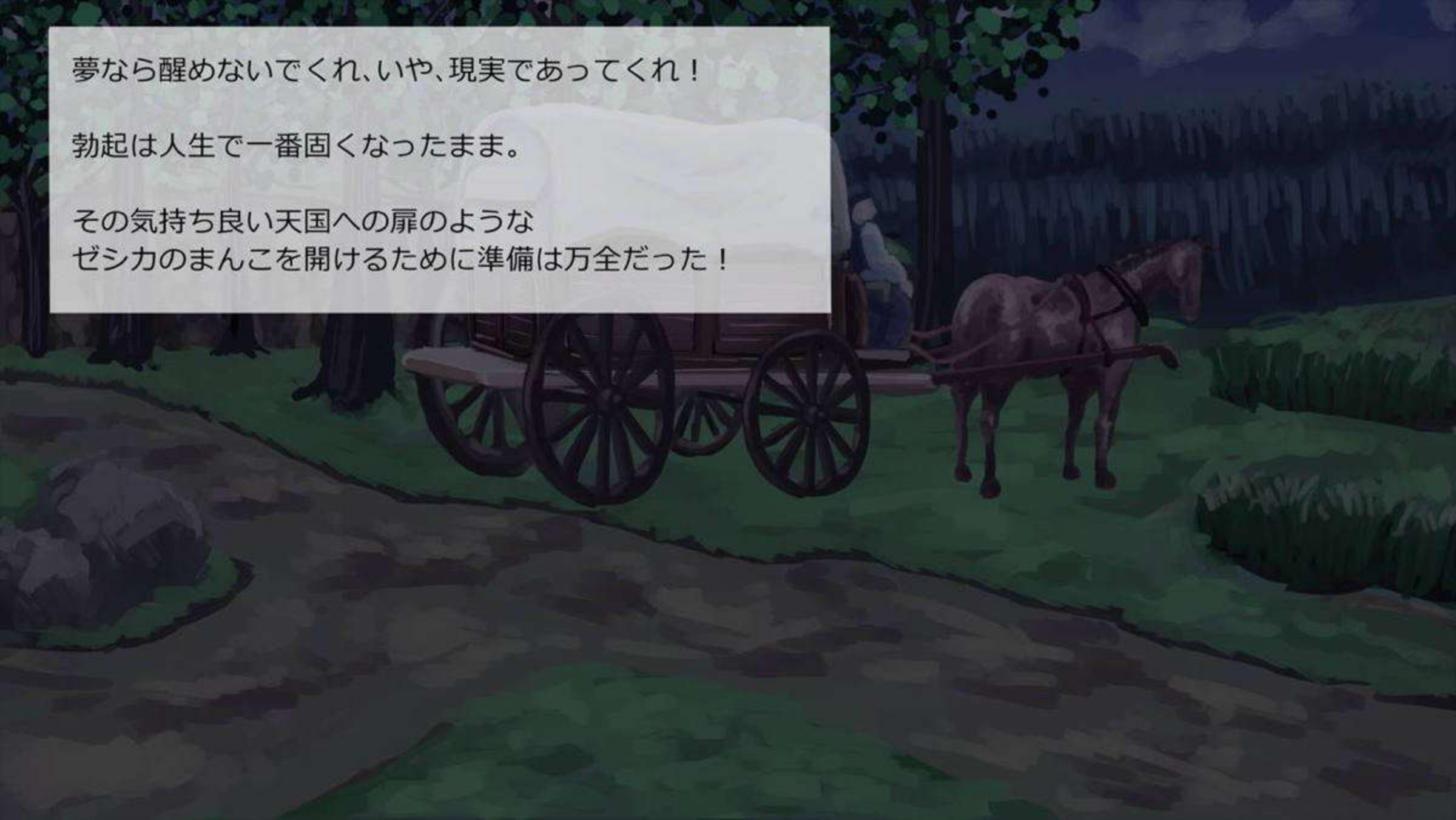


こちらが何度も求めたが断られ、  
ゼシカには一方的に嫌われているのに  
なぜか今、これからセックスできるという状況が！

嘘ではないのか？夢ではないのか？  
このあと夢から醒めるんじゃ？

そう思いながらも、目の前ではまんこを  
むき出しにして、愛液を垂れ流す俺の女神が、  
俺の勃起に股を開き、腰を落とそうとしている！





夢なら醒めないでくれ、いや、現実であってくれ！

勃起は人生で一番固くなったまま。

その気持ち良い天国への扉のような  
ゼシカのまんこを開けるために準備は万全だった！

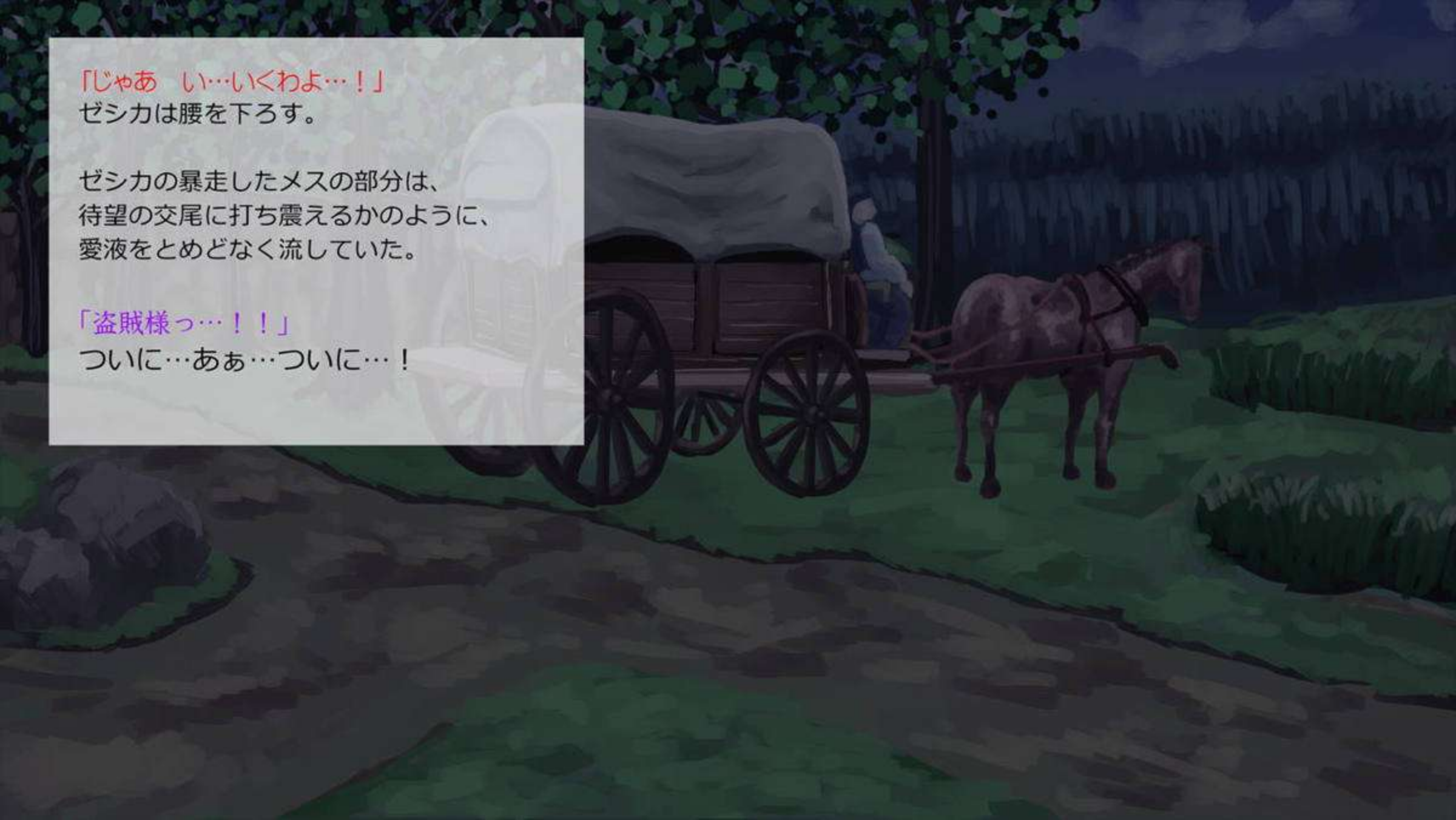
「じゃあ い…いくわよ…！」

ゼシカは腰を下ろす。

ゼシカの暴走したメスの部分は、  
待望の交尾に打ち震えるかのように、  
愛液をとめどなく流していた。

「盗賊様っ…！！」

ついに…ああ…ついに…！





装着完了。

「はあ…はあ…はあ…嫌だけど…最高に嫌だけど…  
挿れるわよ…すぐ…終わりにするから…  
1回だけだから…はあ…んっ…!!」

「ぜ…と…盗賊様っ!?やるんですかっ!?  
本当にやってくれるんですか!?」  
俺は興奮で心臓が早鐘を打ちまくっている。

「やるわよ!襲ってやるのよ!  
もう…誰かのせいで  
準備もできちゃってるんだから…」

ゼシカはショーツを下ろすと、  
それはぐしょぐしょに愛液で濡れ、  
まんこからは愛液が糸を引き…。

「盗賊様…!」  
ついに訪れたゼシカとの  
セックスの瞬間…!!!

ビク!

はあ  
はあ  
はあ

ビク!  
ビク!

ドキ  
ドキ  
ドキ  
ドキ

ウん  
ウん

「あ…ああああ…！盗賊様！  
入っちゃいますよ！良いんですね!!??」  
「い…いいのよお…盗賊の…私が良いって決めたんだから…」  
「本当に入っちゃいますよ！繋がっちゃいますよ！」

「うるさいわね…静かにしてなさ…あつ♡あああああつ！♡」

ついにゼシカの熱いまんこの入り口に、  
亀頭の先がゴム越しとはいえ密着した！！

はあ…♡♡

ブル  
ブル

チ○ポ♡

ズグ…♡

「はあっ！！はうううっ！」  
「んおおおおおおおっ！！！」

じゅぶじゅぶと処女窟に、チ○ポが  
いやらしい水音を立てながら埋もれていく。  
「はああっ！あったかい！！  
僕っゼシカ様と！今っ！」

「痛っ…あぁ♡っ…！あ♡あああつああああ♡」

ゼシカは、亀頭の入るその感触で、絶頂してしまう。  
「ああああゼシカ様のまんこ気持ちいい！あっああああ！」  
「ひいつ…！すごく…気持ちいいっ…んう！」

想像以上の快感に、絶頂しながら  
ずぶずぶと腰を落としてしまうゼシカ。  
「ゼシカ様！ゼシカ様のまんこああああ！」  
「ひう…ひいいい…気持ちいいい…！！」

(ああ俺は！俺は今！俺は今！  
俺は今ゼシカとセックスしている！夢にまで見た！  
本物のゼシカと交尾しているのだ！！  
なんて気持ちいいんだ…！)

「あああったかい！ゼシカの！ゼシカ様のおまんこっ…！  
最高にあったかいですうう！きもちいいいっ…！  
感動っ…！最高！最高です！！ああああああ！」

「何かが…！何かがひっかかっていますっ?!ゼシカ様！」  
「はあ…はあ…んっ…！いま…奥までええええ…！」  
処女膜は、巨大な亀頭によって破られようとしていた。

「いたっ…痛だだ…！はううう…もうすぐ…もうすぐでっ…」  
「ゼシカ様…もうすぐ奥まで…！ゼシカ様…！！」

「はううう痛っ…！ああああ…！」  
ぶちぶちと処女膜が引き裂かれ、  
ペニスがゼシカの甘い膣の奥まで進んでゆく…。

「熱い…ああああっゼシカ様…気持ちいい…！」  
「あああああ！！んううう…入る…奥う…！  
入るううう！痛っあっ！ああああ！」



処女膜がついに貫通する。  
誰も到達した事のないゼシカの膣を  
ペニスが完全に征服した。

「おおおおおっ!!!!」  
「はううううっ! ああああああ!」

「はあっ! 気持ちいいですっ! ゼシカ様奥までっ!  
全部ゼシカ様に包まれて! ひとつになってます!!」

絶頂してしまうゼシカ。  
「はうううう! んんううう!!」

はあっ!!

ズキッ!!

アッ!!



(あああゼシカと！今！セックス！  
セックスしてるんだ…っ！)  
「気持ちいい…！気持ちいいですゼシカ様…！」

ゼシカは、圧倒的な気持ちよさに、  
腰をぶるぶる震わせている。  
破瓜の痛みも薄れていっている…。

「はうっ…！はうっうう…！んううっ！」  
巨尻が震えて絶頂する…

(ああ！俺は！今！ゼシカと！セックスしているんだ！  
ついに憧れのゼシカと！今！  
なんて可愛いんだ！ゼシカの交尾顔！！！)

「んいいいっ…んうううう…すごく良いいいいい…！！」  
そして少しずつ、腰を動かしてゆく…

胸を衣装から掘り出した。  
ゼシカのGからHカップはあろうかという  
爆乳が俺の目の前で揺れる。

(はあ…なんて綺麗なんだ…ゼシカの交尾顔…！)  
「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

ゼシカは快感を我慢するようにしながら、  
しかし体は感じまくっていて、  
こちらのピストンにあわせて  
腰を振ってしまっている。

ぬるっ♡  
ぬるっ♡

「はっ はっ は…ゼシカ様…気持ちいいです…  
そのヒップアタックとハッスルダンス…！」  
「んっ♡ちがっ…これは…あ…っ…！♡」

(はあ…うそよ…こんな…セックスが  
こんなに気持ちいいなんて知らなかった…！)  
「はあ！はあ！最高に気持ちいいです…  
夢にまで見たゼシカ様とセックス…！」

「あっ♡あっ♡あ♡はううう…はううう♡」  
「ゼシカ様…！気持ちいいです！  
素晴らしいですゼシカ様のまんこ…！」

ゼシカ様の愛液…！びちよびちよで…！  
キュンキュンしめつけてきて…！  
ぬるぬるでほかほかで…！」  
「はううう♡そんな…ああああ♡」

(こんなに気持ちいいはずじゃなかったのよ…  
すぐ終わるものだ…)

にゃほ♡

にゃほ♡

ぶるん♡

にゃほ♡

ぶるん♡

あ♡♡♡

「ああんっ♡やばい…はうう♡  
こんな…こんなああああ♡」

「ああまたキュンって締まって…！  
ゼシカ様…！すごく動きますよお…！」  
「あああ♡はああ♡らめええ♡  
すっごく気持ちいいっ…！！ああああ♡」



「おっ♡おっ♡おおおお！  
ゼシカ様！出ますっ…！♡  
ゼシカ様の中で…っ！はあっ！」

「はあああ♡ひえっ♡あああ♡んううう♡  
らっ♡らめっ♡もっ♡こんな激しく突かれちゃ…ひあっ♡」

ついに俺は、ゼシカ様の中で…！！

「んいいいっ…出さない…よ…♡…  
はやく出して…早く終わらせ…！んっ…！  
こんなの…もう…限界っ…！ひゃああああんっ！？♡」  
「ゼシカ様っ…！おおおお…おおっ！！出るうう！」

ドズッ！

イッポッ！

ドズッ！

キッポッ！

あ♡あ♡あ♡

「おおあっ！おおおおっ！  
おあおああああああ！」  
「はううううう♡んあああああああっ♡」

ゼシカはびぐんびぐんと体をうねらせ、  
膣をキツく搾りながら、大絶頂する。

「いぐっ！いぐういぐっ！  
はあああああっ！♡」

どばあ！！

あぶた！！

「あああああっ！おおあっ  
ゼシカ様っ！気持ちいいっ！  
ああ！！ああすごく締まってえええ！」

ゼシカの中での初射精は  
天にも昇るような気持ちよさで…

「んひっ!んう!んっ!  
んあ!♡あっ…!あ!」

「おおおお…!ゼシカ様…!  
ああ…ゼシカ様…セックス…  
ゼシカ様の体気持ちいいです…  
はあ…!はあ…!」

「はううう♡んううう!んひっ!♡」  
こちらが絶頂を終えても、  
ゼシカはまだ絶頂が続いている。

「すごい…まだ締め付けて…  
絞ってきます…」

ゼシカはしばらく絶頂を続けたまま、  
大量の愛液を垂れ流し、  
そのままぐったりした。



「はあ…はあ…終わった…  
はやく…抜かないと…」

ゼシカは、ふらふらのまま、体を動かそうとする。  
だがこちらの勃起は全く衰えていない…

「待ってくださいゼシカ様  
まだ終わりではありません」  
「!？」

終わらせてはいけないのだ。



「まだ1回終わってません」

「ちょ…ちよつと…

1回だけって約束したでしょ…！」

「抜くまでが1回ですよ！」

せっかくゼシカ様とセックス出来たのだ。

次の機会もないだろう。

たった1回出したくらいで終わらせては

もったいなすぎる。

「はあ…！？何言って…」



「抜くまでが1回ですよ！」

「ひゃっ！♡あああああ…

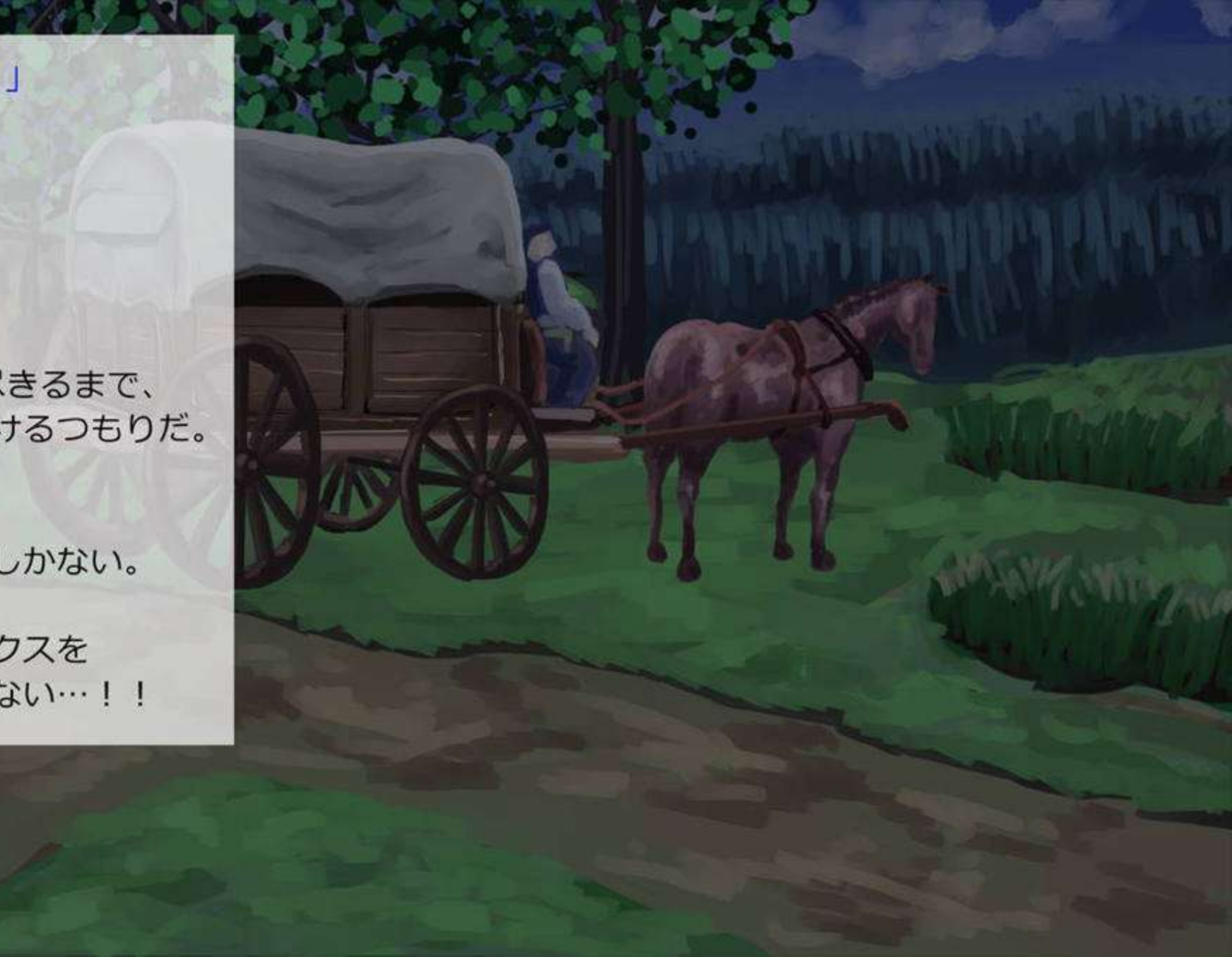
んっ…！はああんっ！♡」

俺は、そのまま抜かずに、  
腰を振り始めた。

謎理論で押切り、俺が力尽きるまで、  
何十回でもセックスを続けるつもりだ。

次の機会がないのなら、  
今の機会を限界までやるしかない。

まだまだゼシカとのセックスを  
終わらせるわけにはいかない…！！



「はあっ！はあ！はあ！」

ゼシカが意識を取り戻した時、すっかり夜は明け、むしろ陽が傾きかけていた。体を這う強烈な快感。

「なにこれえ…すごすぎい…！」

「はあ…はあ…ゼシカ様…  
気持ちすぎですよおお…  
もう15回も出しました…」

「15…！？はあ…信じられない…  
こんなに続けるなんて…はうっ…」

避妊具は精液が溢れていた。

「だって抜いたら終わっちゃうから」

「そうだけど…おお…っ…♡こんなに何回も…♡」

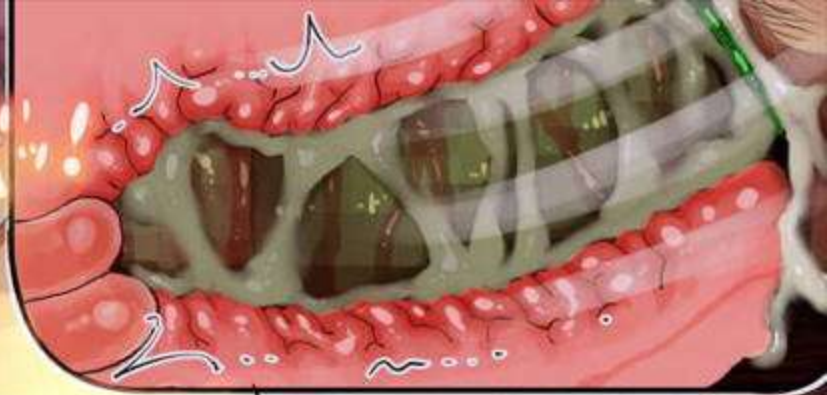
（信じられない…15回って…  
セックスなんて初めてするけど  
そんなに連続で出来るものじゃないわよね…）

「ゼシカ様しかし抜くわけには！  
まだ1回セックスを終えてませんから！」

はっはっ！  
はっはっ！

ずぼっ！！

ズボッ！！



ズボッ！！

「たしかに1回って言ったけど…！  
抜くまでが1回じゃないでしょ…  
主人の命令よ！抜きなさい！」

ドッ

大体セックスするって言ったのは  
盗賊で私じゃな…あああんっ♡そんな突くの禁止…っ♡」  
「ゼシカ様のまんこが！チ○ポをしごきあげて  
最高に気持ちいいんですよお！抜くなんて無理ですっ！」

いこ 7-21



「せっかくゼシカ様とひとつになれたんですからね！  
この感動を体に覚えさせなきゃ！ゼシカ様もね！」

「いやあ…あんたとのセックスなんかあ…気持ちよくないっ…  
あああああんっ♡そこっ♡そこだめええ…♡」

「ああ～ゼシカ様の喘ぎ声最高ですっ♡また射精しそうです！  
ゼシカ様のデカ尻味わいながらスケベまんこで搾られて  
精子出しちゃいますよおおお…！」

「この…変態っ！私の体を射精のダシに…！あああつ♡  
だめえ♡おちんぼっ…すごい来ちゃうっ♡嫌なのにつ…！  
あんたのちんぽにイカされちゃうう…！！」

「ゼシカ様！出ます！出ますよお！ああああ！出るうう！」  
「ああああ♡気持ち良いいい♡らめええ♡  
いっちゃううううう♡あああああん！♡」

「んおおおおおっ♡いっぐうううう♡  
しゅごいのっ♡きでるううう♡おほおおお♡  
おちんぼきもちいいいのおお♡♡！」

「ああっ！おおおああ！ゼシカ様のまんこお♡  
ギュってしまってるっ♡♡おおおああっ！！」

ドグッ！ドグッ！



ぎゅっ♡  
ごっぽお！！

「あひっ♡んひいいいい♡なにこれええ♡  
あそこから体に幸せな感覚が拡がってええ♡  
んひいいい♡しゅごい満たされひゃうううう♡」

びくびく♡

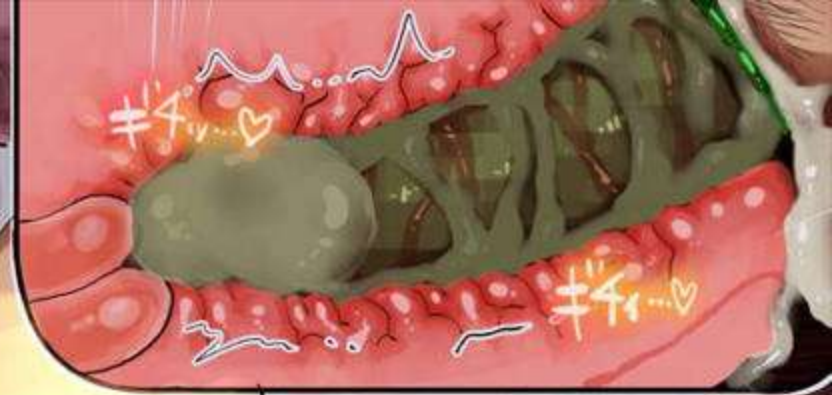
ずっとエロスを求めていたゼシカの体。  
男のペニスで硬いまま刺激を与え続ける事によって、  
ゼシカの渴望していた快感は今、思う存分満たされ続けている。

「ゼシカ様のまんこっ！めちゃくちゃ絞ってます！  
膣ヒダがチ○ポの奥から精子絞り出してますうう！」

「んひい♡ひぎっ♡あ♡私の体あ♡ふわふわしてえ♡  
おまんこからあ♡気持ち良い感覚があ♡止まらなくてえ♡」

(やばい…こんなの続けられたら…気持ちよすぎて  
どうなっちゃうんだろう…  
こいつは止めるつもりもなさそう…)

「まだまだ行きますよお！ゼシカ様！  
ああゼシカ様とセックスできるなんて！」



「あああ♡だめええ♡イっちゃう♡  
もうイっちゃうからああ♡」

男はすぐに腰を振り始める。  
ゼシカはそれだけで軽イキし、  
再び全身を強烈な快感に支配されていく…。

男は目の前の憧れのゼシカの極上の体を  
ひたすらむさぼり続ける。

ゼシカも心では嫌がっているものの、体は  
この衰えないペニスに歓喜するように  
愛液を流し続け、全身を快感と興奮で震わせた。

ギン

ひいひい♡

カトリスやばあ...♡  
それ♡

スゴく当たって♡

きこぞピスタニされるとおま♡

ッ♡ひいひい♡

もらぬ♡  
イキすぎたらぬ♡  
休憩、休憩よ♡ 待って! 待...

ギン  
ギン  
ギン  
ギン

はああああ♡♡♡

繋がったまま、夜が明けようとしている。  
射精は22回を数えた。

半狂乱状態のようなゼシカの喘ぎ声。  
1回突くだけで快楽を味わい絶頂する女体。

その柔らかい最高の体を腕に抱きながら  
男は腰を振り続ける。

ギッシ  
ギッシ

ギッシ  
ギッシ

んまおまおま  
んごっ♡  
んひいひい♡  
あひいひい♡  
T...♡またT...♡  
んひいひいひい♡

朝になってもセックスは終わらない。  
24回目の射精。

ゴム内とはいえ、男は1時間に1回ほど  
ゼシカの膣内で射精し続ける。

ゼシカも何度絶頂したのか  
もうとっくに数え切れない。

しゃぶすきりう♡  
またぐいちゃう♡  
もーいってから♡下てふから♡

あ！あ！ああ♡  
♡♡♡

ドビ♡  
ドビ♡  
ドッ！

あああ♡  
ッ♡ッ♡るうう♡  
きもずいはいあ♡

昼間から馬車の中で交尾が行われているとは誰が思うだろうか。

通りが少ない道とは言え、声を聞いても、異様な馬車の状況に誰も近寄れない。揺れる馬車、中で重ねられる性交…。

ゼシカは信じられないような快感を味わいながら、快感で意識も朦朧としつつ、その甘美を味わい続けた…。

キシ キシ

もあたまえ♡

おかひくなるっ♡

きもひよすぎえ♡

おっほいもワリもお♡  
そんなーに気持ちいいっ♡

またイチヤッよま♡

ドスッ  
ドキュッ! ドキュッ!

あぁあ♡  
イッ♡  
またすごいっ♡

あぁあ♡♡♡

二人のセックスは回数を重ね、  
30回めの射精。まる1日半結合し続け、  
ゼシカは快感で足が震えたまま。

終わらないセックス。

ゼシカは体のすべての部位が敏感になり、  
絶頂し続けるあまり、通常の状態なのか  
絶頂なのか境界が判別できないほどだ…。

外では日が沈む。二人の交尾は、  
間もなくラストスパートへ…。





そのまま二人の濃厚なセックスが続く…。  
御者は呪文が効きすぎて眠ったままだ。

すでに一日中つながっている二人の体は  
汗だく、汁だくになり、馬車の中は  
ゼシカの気持ちよさそうな  
喘ぎ声が延々と響いた。

ギョッ

ギョッ

あゝ♡

はあはあ♡

くっ♡きゅん♡  
Tt♡うう♡

らめ♡

そぎもぢいのお♡

ギョッ

あああ♡

し♡

おちい♡ほお♡

しゃい♡のまお♡



翌日の夜。結合したまま32回めの射精へ。

「あひっ…あひっ…あひっ…♡」

「はあ…はあ…ゼシカ様…ゼシカ様とのセックスがこんなに気持ちいいなんて…！」  
「はうっ…！はふっ…んあう…！♡んあ…？♡」

ゼシカは息を吹きかけるだけでも絶頂する状態。  
腋毛も少し伸びてきている。

「ああ…はうっ…は…♡  
んうう…もお…何回目なのお…？♡」  
「おそらく32発目ですよゼシカ様！」  
「そんな…に…？？」

「ほへえええっ！♡んおおおっ…  
すごおおっ…！すごすぎるっ…！  
おおおお♡こんなに気持ちいいのおお♡」

「もっと！もっと感じてください！  
もっと！ゼシカ様っ！！  
まんこに伝わってますよ！」

「もお いぎすぎておかひくなってるう…♡  
おちんぼしゅごすぎいい♡ひいいい…♡」

チゅッ  
チゅッ  
チゅッ  
チゅッ  
チゅッ

「ゼシカ様の体！まんこっ！最高ですよ！  
あったかくて締め付けられて！おっぱいも  
間近で揺れてるし！イキ顔だけで射精出来ますよ！」

はっ♡  
あ♡  
おお♡

（おん）

チゅッ



いよいよ射精前の激しいピストンが始まる。

ゼシカ様のいやらしいまんこでしごかれて射精  
しちゃいますよお！あ～なんて気持ちいいんだっ！！  
ゼシカ様も！気持ちいいですよね！ゼシカ様！！」

「…んぐうっ…あああ♡はあああっ♡いいっ♡  
いいのおおお♡気持ちいいっ！気持ちいいよおお！  
あんたの事は好きじゃないけど…  
こんな気持ちいいの…っ…！生まれて初めてえ…！♡」

「あああああ！僕もこんなに気持ちよすぎる時間は  
生まれて初めてですよっ！  
出ますっ！ゼシカ様あ出ますよおおおお！！！！」

「あっ♡あああああああ！！！！♡  
私もいぐううっ♡いっっちゃうううう！！♡」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ  
あつぁぁぁぁーんっ!!♡」

びくびく

「おおおおっ! おおお!  
ゼシカ様…ゼシカっ!!!」

「いっぐうううう♡あぁぁぁぁぁぁ♡  
いぐう!!♡気持ち良いのおおお♡  
んあぁぁぁんっ♡はうううあぁ!!♡」

ぷるぷる

ドドド!

ドドド!  
コホホ!

「あぁっ! あ! あぁぁぁぁ!  
気持ちいいっ! 気持ちいいいいいい!!」

32回もの交尾を終え、ゼシカは  
すさまじい快感で意識が混濁。

「ゼシカ様…気持ちよかったですよお…  
最高でしたあ…流石にもう限界です…」

「お…終わり…？ やっと…？  
…ううん…も…もう終わったのお…」

ゼシカは体はもう動かないが、  
欲望は底を知らずまだ湧き上がっている。

「あんたなんか気持ちよくさせられたのは最悪だけどお…  
セックスって…こんなに気持ちいいんだあ…。  
こんなに気持ちよくなれるなんてえ…♡」

「ゼシカ様…あああ…幸せです…」  
男は、ゼシカの胸の谷間に結合したまま倒れ込んだ。  
ゼシカも体が限界で、まぶたを閉じた。

まる2日間、32回の交尾を終えた二人。

大量の精液と、数え切れないほどの絶頂。

ゼシカは、底なしだった性欲の暴走が  
満たされた気がした……。



眼を覚ますと朝だった。

ゼシカは、ラリホーマが効きすぎて  
まだ眠っていた御者を起こし、

そして、御者にリーザス村への帰還を命じた。





「起きなさいよあんた…帰るわよ」

「え…え！？ゼシカ様…

僕も乗ってて良いんですか？」

「いい？これは命令よ

あんたにはお仕置が必要だわ

もっと地獄のようなお仕置がね！

これから今までより働かせるから覚悟なさい」



「えっ…！」

「じゃないと私の気持ちがおさまらないのよ！  
あんたには恐ろしい目にあってもらわないと  
私にした事と合わないのよ！」


「一緒に居て良いんですか！」

「でももう絶対セックスはしないからね！  
あれ1回…1回じゃなかったけど…  
とにかくあれ1回きりよ！！！」

「やったあゼシカ様！」

「覚悟しなさいよね」





馬車はリーザス村に向かっていった。

俺はまさかの展開に股間を膨らませていた。

だが途中で馬車から荷物ごと蹴落とされ、  
早速地獄の召使い生活が始まるのであった。

つづく

「はあっ！はあ！はあ！」  
ゼシカが意識を取り戻した時、すっかり夜は明け、  
むしろ陽が傾きかけていた。体を這う強烈な快感。

「なにこれえ…すごすぎい…！」

「はあ…はあ…ゼシカ様…  
気持ちすぎですよおお…  
もう15回も出しました…」

「15…！？はあ…信じられない…  
こんなに続けるなんて…はうっ…」

避妊具は精液が溢れていた。  
「だって抜いたら終わっちゃうから」

「そうだけど…おお…っ…♡こんなに何回も…♡」  
そして我に振り返り意識する尿意。

「ちょっとごめん…お願い…  
我慢してるの……トイレに行かせて…」  
「ゼシカ様しかし抜くわけには！  
まだ1回セックスを終えてませんから！」

「たしかに1回って言ったけど…！  
抜くまでが1回じゃないでしょ…漏れちゃう…！！  
主人の命令よ！抜きなさい！」

大体セックスするって言ったのは  
盗賊で私じゃな…ああんっ♡そんな突くの禁止…っ♡」  
「そのまま漏らしても構いませんよ！私にぶっかけても！」

「あんっ♡ふざけないで…！！ここですかの！？  
そんなはしたなくて恥ずかしいことするわけじゃない！」  
「ゼシカ様！出して下さい！」  
「ほっ…本当に！本当に漏れちゃうからぁ…出ちゃうからぁ…！  
いやっ！こんなところでおしっこしたくないいい！ああんっ♡」

「僕も精子出しますから！この薄いゴムの中に  
いっぱい出しますからっ！！」

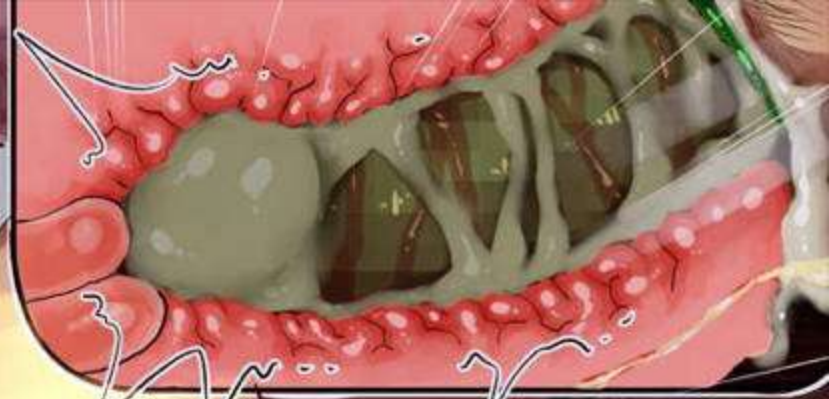
「そんなに早くっ突かないでっ！  
ああああ出る！出る！出ちゃうううう！」

「ゼシカ様！出ます！出ますよお！」  
「はあああああっ♡私も…  
ああああ…漏れちゃううううう！」

「いやああああああんっ！あーっ！  
でちゃううう！はああああん♡！」  
「ああっ！おおおああ！  
気持ちいいですっ！♡おおおあああっ！！」

「はあっ！いやああんっ！出ちゃってるううう！  
あああ！恥ずかしいっ！こんな…  
こんな恥ずかしいことおお…！」

ドグッ！ドグッ！ドグッ！



ゴシヤッ！

ドグッ！ドグッ！ドグッ！

ゴボボボボ！！

「ああああ！ゼシカ様！気持ちいいです…  
すごい勢いで…温かくて…！」

僕の体に当たってますよお！  
僕も…射精があああ…！」



「人におしっこしてるところ見られるなんて…  
セックスしながら放尿なんて…イヤああああ…」

「あああああ僕も…！16回目の射精です！  
ああ気持ちいいですっ！♡」

「いやっ…いやあ！いやああ！私…まだ出てるっ！」  
「あああ…！温かい…！気持ちいいですよゼシカ様！」  
「う…ううう…最悪…最悪よ…こんなのお…」

だがゼシカは放尿の快感と、  
セックスの快感を体中感じていた。  
(こんな時に感じてるなんて…私…！)



俺はまだ抜く訳にはいかない。  
硬いままのペニスをそのまま  
ゼシカの膣で出し入れする。

「まだまだ抜きませんよゼシカ様！  
まだ楽しまなくては！」

「やめなさいっ！もうおしまいよ！  
抜きなさいっば…ああんっ♡  
はあっ♡すっごおおおお♡」



翌日の夜。結合したまま32回めの射精へ。

「あふっ…あひっ…あひっ…♡」

「はあ…はあ…ゼシカ様…ゼシカ様との  
セックスがこんなに気持ちいいなんて…！」  
「はうっ…！はふっ…んあう…！♡んあ…？♡」

ゼシカは息を吹きかけるだけでも絶頂する状態。  
腋毛も少し伸びてきている。

「ああ…はうっ…は…♡  
んうう…もお…何回目なのお…？♡」

「おそらく32発目ですよゼシカ様！」  
「そんな…に…??」

「ほへえええっ！♡んおおおっ…  
すごおおっ…！すごすぎるっ…！  
おごおお♡こんなに気持ちいいの♡」

「もっと！もっと感じてください！  
もっと！ゼシカ様っ！！  
まんこに伝わってますよ！」

「ああああっ！またっ…  
またおっこ出ちゃううう！♡」

ゼシカは少し放尿する。

「ゼシカ様の体！まんこっ！最高ですよ！  
あったかくて締め付けられて！おっぱいも  
間近で揺れてるし！イキ顔だけで射精出来ますよ！」

はっん

はっん

はっ♡  
あ♡  
ああ〜♡

チゅっ！  
チゅっ！

チゅっ！  
チゅっ！

チゅっ！

チゅっ！  
チゅっ！

チゅっ！

チゅっ！  
チゅっ！

はっん  
はっん

いよいよ射精前の激しいピストンが始まる。

ゼシカ様のいやらしいまんこでしごかれて射精  
しちゃいますよお！あ～なんて気持ちいいんだっ！！  
ゼシカ様も！気持ちいいですよね！ゼシカ様！！」

「…んぐうっ…あああ♡はあああっ♡いいっ♡  
いいのおおお♡気持ちいいっ！気持ちいいよおお！  
あんたの事は好きじゃないけど…  
こんな気持ちいいの…っ…！生まれて初めてえ…！♡」

「あああああ！僕もこんなに気持ちよすぎる時間は  
生まれて初めてですよっ！  
出ますっ！ゼシカ様あ出ますよおおおお！！！！」

「あっ♡あああああああ！！！！♡  
私もいぐうっ♡いいっ♡うううう！！！！♡」

あ♡  
あ♡  
あ♡♡

たっぽん

たっぽん

ニュポッ！！

ドクッ！！

ポッ！！

ポッ！！ ニュポ！！

ドクッ！！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ  
あっぁぁぁぁーんっ!!♡」

びくびく

「おおおおっ! おおお!  
ゼシカ様…ゼシカっ!!!」

「あぁあ♡いくっ…いっちゃん…  
また出ちゃうううう!!」

ふるふる

ドホッ!

ドホッ!

ドホッ!

「あぁっ! あ! あぁぁぁぁ!  
気持ちいい! 気持ちいいいいい!!」

男は射精を終え、ゼシカは静かにチョロチョロ放尿してしまう。

「はあっ…♡はぐぅ♡んぶ♡あ…はうううあ…♡あうう…」

「おおっ…お…ああ…はあ…はあ…ゼシカ様…！」

「おぐっ♡すご…すごすぎい…♡ああ…あ…」

びく♡

ドクッ!

43D43D…

ドクッ♡

びく♡

ドクッ! ドクッ!

「ゼシカ様…気持ちよかった…です…よ…♡」

「はううあ…♡こんな…こんな恥ずかしい初体験っ…♡」